

# 宿久庄遺跡 1

令和4年（2022年）3月



茨木市教育委員会



## 序 文

茨木市は大阪の北部に位置し、北は北摂山地を介して京都府亀岡市と接します。北部地域は広大な森林をもつ山々が連なり、そこから流れる安威川、佐保川、茨木川、勝尾寺川などにより、市域南部の平野に豊かな水をもたらしています。

古くから、北部地域では竜王山をはじめとした山々への信仰とともに人々が暮らし、南部の各河川流域では、豊かな自然と温暖な気候に恵まれ、多くの人々が生活を営んできました。その先人たちの足跡の多くが埋蔵文化財として今も土中に残されています。

ここで報告する宿久庄遺跡は茨木市の中央部西寄りに位置します。遺跡の南方に通る古代の山陽道をなぞった「西国街道」は、神戸方面へ抜ける主要幹線道路としての役割を担っていました。現在は、西国街道に沿うように国道 171 号が通っており、周辺の開発が進んでいます。

今回取り上げました調査地では、古墳時代から鎌倉時代の建物跡や土坑など数多くの遺構が見つかりました。また、出土遺物の中には縄文時代後期(約 4,000 ～ 3,000 年前)の土器が確認されています。このことは、この地に人びとが暮らし始めた時期を物語っています。あらためて茨木市の古代の様相を明らかにするうえで新たな知見となる貴重な成果を得ることができました。

最後に、今回の調査を実施するにあたりまして、多大なご協力とご配慮をいただきました土地所有者、近隣の皆様をはじめとする関係各位に対し、深く感謝いたしますとともに、今後ともより一層のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和 4 年 3 月 31 日  
茨木市教育委員会  
教育長 岡田祐一



## 例 言

1. 本書は昭和51年度から平成25年度にかけて実施した茨木市宿久庄二丁目、藤の里二丁目、豊川一丁目に所在する宿久庄遺跡の発掘調査報告書である。
2. 取り扱ったすべての発掘調査は、事業者からの届出・依頼等を受け、茨木市教育委員会が行ったものである。
3. 各発掘調査の担当者については、第1章表1に記載している。報告書作成・刊行に係る令和3年度の整理体制は、茨木市教育委員会教育総務部歴史文化財課長 木下典子・同課長代理 前田聡志のもと、下記の職員が従事した。
4. 本書の執筆・編集は、坂田典彦（第1章）・木村健明（第Ⅱ～Ⅳ章）が行い、すべての調査地点の基礎整理および遺物整理を川村和子（平成26年4月～令和2年3月まで）が行った。なお、本書の執筆過程で調査担当者が作成した発掘調査終了報告や、既刊概報の記述を基にした部分もある。
5. 出土遺物の整理作業については、一部を国際文化財株式会社に委託した。
6. 本書で用いた現地写真は、各調査担当者が撮影した。また、遺物写真の撮影に関しては、坂田・木村が行った。
7. 本書作成および校正にあたっては上記職員のほか、阿部ともよ・岡 篤史・川西宏実・川畑康雄・高村勇士・富田卓見・正岡大実・宮西貴史が従事した。
8. 本調査に係る記録類や出土遺物は、茨木市立文化財資料館〔〒567-0861 大阪府茨木市東奈良三丁目12番18号 電話（072）634-3433〕において保管している。広く活用されることを希望する。
9. 現地調査、報告書の作成にあたっては以下の諸機関・諸氏より、様々なご協力・ご指導を賜った。記して感謝申し上げます（敬称略、五十音順）。  
株式会社庄司・木村外科医院・小林製菓株式会社・大成化工株式会社・日本運送株式会社  
・三菱倉庫株式会社

## 凡 例

1. 本書に記載された測量成果については、平面直角座標系第VI系（世界測地系）に基づいている。図中のX・Y座標は、m単位で表記している。また、平面図の方位は座標北を示している。
2. 標高は東京湾平均海面（T.P.+）値で示し、本文及び挿図中では、「T.P.+」を省略して記した。単位は全てmである。
3. 本報告書に使用した地図は、国土地理院発行（1/25,000地形図）を拡大、縮小、加筆して使用したものである。
4. 本遺跡の土層に示した土色は、小山正忠、竹原秀雄編著『新版標準土色帖』に基づき、土の色相、明度及び彩度を判定したものである。地層観察用畦の観察面はシートで被覆するなどして、湿った状態を保つように留意した。また、地層の粒度の記載に関しては、地質学で標準的に用いられるWentworthの粒径区分を使用した。なお、同一地層内に異なる粒径の粒度が幅をもって認められるときには、基本的により細粒の粒径を先にして、「シルト～粗砂」のように記載した。ただし、場合によっては主体を占めるものを後にして「極粗砂混じりシルト」のように記載したものもある。
5. 遺物実測図の断面は須恵器を黒塗り、瓦器はアミ掛け、石製品を斜線、それ以外のものは白抜きで示した。
6. 遺物観察表の法量記載における（ ）は推定復元値、△は残存値を示す。
7. 本書における遺構、遺物の時期決定は多くの文献を参考にした。参考とした文献はP.70～72に提示している。

# 目 次

序文

例言・凡例・目次

第Ⅰ章 本書作成の経緯	1
第1節 既往調査の概要と本書掲載地点	1
第2節 既刊概報と本書の位置づけ	1
第3節 本書作成体制と編集方針	2
第Ⅱ章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第Ⅲ章 調査の成果	7
第1節 76-1 調査	7
第2節 78-1 調査	7
第3節 82-1 調査	8
第4節 82-3 調査	9
第5節 83-1 調査	10
第6節 84-4 調査	16
第7節 88-1 調査	21
第8節 94-1 調査	22
第9節 96-1 調査	24
第10節 99-2 調査	30
第11節 99-5 調査	39
第12節 01-1 調査	43
第13節 04-1 調査	56
第14節 07-1 調査	59
第15節 13-1 調査	67
第Ⅳ章 本書掲載調査のまとめ	69
遺物観察表	73
写真図版	
報告書抄録	

## 插图目次

- 图1 调查地理位置图
- 图2 茨木市地质图
- 图3 周边遗迹分布图
- 图4 76-1调查 土層断面柱状图
- 图5 78-1调查 出土遺物実測図
- 图6 82-1调查 調査区配置図
- 图7 82-1调查 A区平面图・  
A～C区土層断面柱状图
- 图8 82-3调查 土層断面柱状图
- 图9 83-1调查 調査区平面图
- 图10 83-1调查 掘立柱建物1・2平面图
- 图11 83-1调查 包含層出土遺物実測図(1)
- 图12 83-1调查 包含層出土遺物実測図(2)
- 图13 83-1调查 包含層出土遺物実測図(3)
- 图14 83-1调查 包含層出土遺物実測図(4)
- 图15 84-4调查 調査区平面图
- 图16 84-4调查 包含層出土遺物実測図(1)
- 图17 84-4调查 包含層出土遺物実測図(2)
- 图18 84-4调查 遺構出土遺物実測図
- 图19 88-1调查 調査区平面图
- 图20 94-1调查 調査区平面图
- 图21 94-1调查 掘立柱建物1・2・3平面图
- 图22 96-1调查 調査区平面图
- 图23 96-1调查 掘立柱建物1平面・断面图
- 图24 96-1调查 掘立柱建物2平面・断面图
- 图25 96-1调查 掘立柱建物3平面・断面图
- 图26 96-1调查 掘立柱建物4平面・断面图
- 图27 96-1调查 掘立柱建物5平面・断面图
- 图28 96-1调查 出土遺物実測図
- 图29 99-2调查 東壁土層断面图
- 图30 99-2调查 調査区平面图
- 图31 99-2调查 掘立柱建物1平面・断面图
- 图32 99-2调查 溝2内遺物出土状況图
- 图33 99-2调查 包含層出土遺物実測図(1)
- 图34 99-2调查 包含層出土遺物実測図(2)
- 图35 99-2调查 溝1出土遺物実測図
- 图36 99-2调查 溝2出土遺物実測図(1)
- 图37 99-2调查 溝2出土遺物実測図(2)
- 图38 99-2调查 溝2出土遺物実測図(3)
- 图39 99-5调查 調査区平面图
- 图40 99-5调查 掘立柱建物1平面・断面图
- 图41 99-5调查 S K 1 遺物出土状況图
- 图42 99-5调查 出土遺物実測図
- 图43 01-1调查 東壁土層断面图
- 图44 01-1调查 調査区平面图
- 图45 01-1调查 掘立柱建物1平面・断面图
- 图46 01-1调查 掘立柱建物2・3平面・  
断面图
- 图47 01-1调查 P10、S X 1、S X 2  
平面・断面图
- 图48 01-1调查 P12平面・断面图
- 图49 01-1调查 S E 3 出土遺物実測図
- 图50 01-1调查 S X 2 出土遺物実測図
- 图51 01-1调查 各遺構出土遺物実測図(1)
- 图52 01-1调查 各遺構出土遺物実測図(2)
- 图53 01-1调查 包含層出土遺物実測図
- 图54 04-1调查 調査区平面图
- 图55 04-1调查 出土遺物実測図(1)
- 图56 04-1调查 出土遺物実測図(2)
- 图57 07-1调查 土層断面图
- 图58 07-1调查 第1遺構面平面图
- 图59 07-1调查 第1遺構面遺構平面・断面图
- 图60 07-1调查 第2遺構面平面图
- 图61 07-1调查 第3遺構面平面图
- 图62 07-1调查 遺構平面・土層断面图
- 图63 07-1调查 出土遺物実測図
- 图64 13-1调查 調査区平面・土層断面图

## 表目次

表1 宿久庄遺跡 既往の調査一覧表

表2 07-1調査 遺構一覧表

表3 出土遺物観察表(1~16)

## 図版目次

- PL.1 76-1・78-1・82-3調査 遺構
1. 76-1 調査 土層断面(西から)
  2. 78-1 調査 調査区全景(南から)
  3. 83-1 調査 調査地全景(東から)
- PL.2 82-1調査 遺構
1. A区全景(東から)
  2. B区全景(北から)
  3. C区全景(北から)
- PL.3 83-1調査 遺構
1. 調査区全景(上から・左が北)
- PL.4 84-4調査 遺構
1. 調査区北半部(南から)
  2. 調査区南半部(東から)
- PL.5 88-1調査 遺構
1. 調査区南部(東から)
  2. 調査区南西部(南から)
  3. 調査区北部(北から)
- PL.6 94-1調査 遺構
1. 調査区全景(東から)
  2. 調査区全景(北西から)
- PL.7 96-1調査 遺構
1. B区(西から)
  2. A区(南から)
  3. A区(西から)
- PL.8 99-2調査 遺構
1. 調査区東半部(北から)
  2. 掘立柱建物1(北から)
- PL.9 99-2調査 遺構
1. 掘立柱建物1(東から)
  2. 溝1遺物出土状況(東から)
  3. 調査区西側石列検出状況(東から)

- PL.10 99-5調査 遺構
1. 北調査区中央部(南から)
  2. 北調査区南部(西から)
- PL.11 99-5調査 遺構
1. 掘立柱建物1(南から)
  2. 南調査区全景(西から)
  3. 南調査区東半(南から)
- PL.12 01-1調査 遺構
1. 北調査区全景(上から・上が北)
  2. 南調査区全景(上から・上が北)
- PL.13 01-1調査 遺構
1. 北調査区北部(東から)
  2. S X 1・P 10 全景(西から)
  3. S X 1 検出状況(北から)
- PL.14 01-1調査 遺構
1. P 10 検出状況(北から)
  2. S X 2 検出状況(西から)
  3. 掘立柱建物(北から)
- PL.15 01-1調査 遺構
1. S E 2 完掘状況(東から)
  2. P 173 遺物出土状況(北から)
  3. S E 3 完掘出土状況(南から)
- PL.16 07-1調査 遺構
1. A区第1面西半(北から)
  2. A区第1面東半(北から)
  3. B区第1面(西から)
- PL.17 07-1調査 遺構
1. B区第1面S K 2 遺物出土状況(西から)
  2. B区第2面東半(西から)
  3. B区第2西半(西から)

- PL18 07-1調査 遺構
1. B区第2面SE1(東から)
  2. A区第2面(南から)
  3. B区第3面(西から)
- PL19 07-1調査 遺構
1. A区第3面西半(南から)
  2. A区第3面東半(南から)
  3. A区第3面SX1遺物出土状況(南から)
- PL20 13-1調査 遺構
1. 東壁土層断面(西から)
  2. 完掘状況(南西から)
- PL21 78-1・83-1調査 遺物
1. 78-1調査 出土遺物
  2. 83-1調査 包含層出土遺物
- PL22 83-1調査 遺物
1. 包含層出土遺物
  2. 包含層出土遺物
- PL23 83-1調査 遺物
- 包含層出土遺物
- PL24 83-1調査 遺物
1. 包含層出土遺物
  2. 包含層出土遺物
- PL25 83-1調査 遺物
1. 包含層出土遺物
  2. 包含層出土遺物
- PL26 84-4調査 遺物
1. 包含層出土遺物
  2. 包含層・ピット6出土遺物
- PL27 84-4・96-1調査 遺物
1. 84-4調査 包含層・ピット出土遺物
  2. 84-4調査 包含層・土坑4、  
96-1調査 包含層出土遺物
- PL28 99-2調査 遺物
1. 包含層出土遺物
  2. 溝1出土遺物
- PL29 99-2調査 遺物
1. 溝2出土遺物
  2. 溝2出土遺物
- PL30 99-2調査 遺物
- 包含層出土遺物
- PL31 99-2調査 遺物
- 包含層・溝2出土遺物
- PL32 99-2調査 遺物
- 溝2出土遺物
- PL33 99-5・01-1調査 遺物
1. 99-5調査 出土遺物
  2. 01-1調査 SE3出土遺物
- PL34 01-1調査 遺物
1. SX2出土遺物
  2. 各遺構出土遺物
- PL35 01-1調査 遺物
1. P173出土遺物
  2. ピット出土遺物
- PL36 01-1調査 遺物
1. 包含層出土遺物
  2. 包含層出土遺物
- PL37 01-1調査 遺物
- 各遺構・包含層出土遺物
- PL38 01-1・04-1・07-1調査 遺物
- 01-1調査 出土遺物
- 04-1調査 出土遺物
- 07-1調査 出土遺物
- PL39 04-1調査 遺物
1. 包含層出土遺物
  2. 包含層出土遺物
- PL40 04-1・07-1調査 遺物
1. 04-1調査 包含層出土遺物
  2. 07-1調査 各遺構・包含層出土遺物

## 第I章 本書作成の経緯

### 第1節 既往調査の概要と本書掲載地点

宿久庄遺跡は清水一丁目・藤の里一丁目・二丁目・宿久庄一丁目・二丁目・三丁目・四丁目・豊原町、豊川一丁目、宿川原町にかけて所在する。昭和51年度の府道の拡幅に伴って埋蔵文化財包蔵地として周知され、令和3年度時点で東西1.1km、南北0.75kmの範囲に及ぶ。

遺跡内における本調査は、規模の大小を問わなければ24件実施されている。ただし、図1に示したように、本調査を実施している地点には偏りがあり、包蔵地範囲の南西部～中央部にあたる藤の里二丁目地内での調査件数が突出し、東側及び北側はほとんど調査が行われていない状況である。これは、調査原因の大半が国道171号に面した倉庫等の大型建物の建築によるものであり、現在においても物流の拠点となっている周辺の影響が影響しているといえる。また、倉庫は建物自体が大きく、それに伴って埋蔵文化財に影響を与える範囲も大きくなるため、調査に至るものが多い。したがって、既往調査データの少ない北半部や東部においては、埋蔵文化財が希薄ということではなく、今後の開発次第で遺跡の様相が明確になってくる可能性が高い。

### 第2節 既刊概報と本書の位置づけ

これまでに刊行された各年度の『発掘調査概報』には速報的に概要が報告されているが、概報の性格上、出土遺物にまで整理が及んでいない段階での報告が多いうえに、主要遺構のみを取り上げている

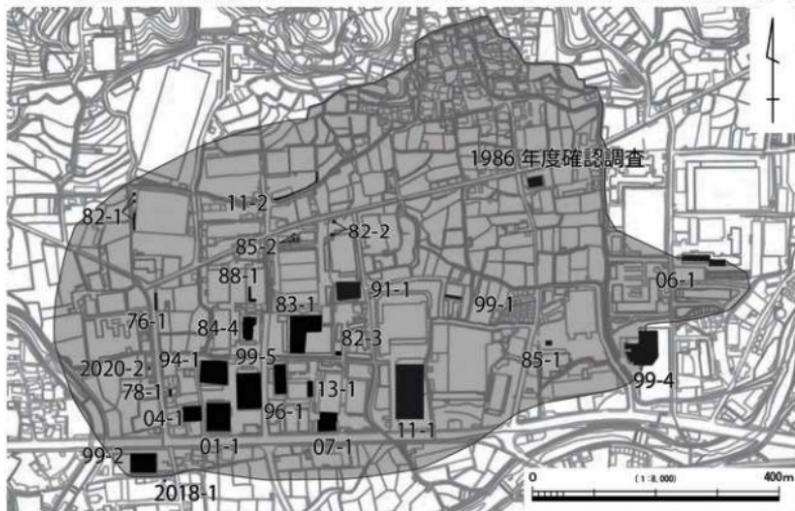


図1 調査地位置図

表1 宿久庄遺跡 既往の調査一覧表

調査年度	調査番号	所在地	調査原因	調査面積 (㎡)	調査期間	調査担当者	既刊 経 緯
1976	76-1	藤の里二丁目	道路拡幅	131	1976年度	奥井哲秀	
1978	78-1	藤の里二丁目	病院建設	50	1978.4.3~4.14	奥井哲秀	
1982	82-1	宿久庄二丁目	配送センター建設	75	1982.6.22~7.5	宮脇 薫	
1982	82-2	藤の里二丁目	倉庫建設	102	1982.8.4~9.2	宮脇 薫	
1982	82-3	藤の里二丁目	倉庫建設	12	1982.8.20~8.27	奥井哲秀	
1983	83-1	藤の里二丁目	倉庫建設	2,204	1983.12.1~1984.1.31	宮脇 薫	
1984	84-4	藤の里二丁目	倉庫建設	750	1984.12.25~1985.2.10	宮脇 薫	宿久庄遺跡発掘調査報告
1985	85-1	藤の里一丁目	配送センター建設	68	1985.11.1~11.10	宮脇 薫	昭和60年度発掘調査報告
1985	85-2	藤の里二丁目	倉庫建設	50.4	1985.12.9~12.28	宮脇 薫	昭和60年度発掘調査報告
1987	—	藤の里一丁目	事務所建設	—	1987.1.12	井上直樹	
1988	88-1	藤の里二丁目	倉庫建設	350	1988.4.1~6.8	宮脇 薫	
1991	91-1	藤の里二丁目	倉庫建設	542	1991.5.10~7.1	濱野俊一・ 中東正志	平成3年度発掘調査報告
1994	94-1	藤の里二丁目	倉庫建設	1,880	1994.5.23~8.11	宮脇 薫	
1996	96-1	藤の里二丁目	倉庫建設	794	1997.1	宮脇 薫	
1999	99-1	藤の里一丁目	倉庫増築	120	1999.5.28~6.7	濱野俊一	平成11年度発掘調査報告
1999	99-2	費用一丁目	研究施設建設	972	1999.6.10~8.4	宮脇 薫	平成11年度発掘調査報告
1999	99-4	費用一丁目	商業施設建設	2,100	1999.10.14~12.18	濱野俊一	平成12年度発掘調査報告
1999	99-5	藤の里二丁目	倉庫建設	2,146	2000.2.21~2001.3.31	宮脇 薫	平成12年度発掘調査報告
2001	01-1	藤の里二丁目	倉庫建設	1,575	2001.5.15~7.20	宮脇 薫	平成13年度発掘調査報告
2004	04-1	藤の里二丁目	コミュニティー センター建設	502	2004.9.6~11.15	宮脇 薫	平成16年度発掘調査報告
2006	06-1	費用一丁目	共同住宅建設	330	2006.12.18~2007.2.1	宮本賢治	平成19年度発掘調査報告
2007	07-1	藤の里二丁目	工場建設	1,029	2007.11.8~2008.1.23	宮本賢治	平成20年度発掘調査報告
2011	11-1	藤の里二丁目	倉庫建設	4,930	2011.4.4~9.20	岡 祥	
2011	11-2	宿久庄二丁目	神守建設	304	2011.5.9~6.7	富田卓見	
2013	13-1	藤の里二丁目	工場建設	132	2013.6.13~7.19	中東正志	
2018	2018-1	費用一丁目	個人住宅建築	6	2018.8.29	木村健明	平成30年度宮本市埋蔵文化財 発掘調査報告
2020	2020-2	宿久庄三丁目	個人住宅建築	6	2020.12.21	木村健明	令和2年度宮本市埋蔵文化財 発掘調査報告

アミフセ部分は本書掲載分

場合がみられた。そこで、今回改めて未報告の調査と合わせて報告済の調査においても再整理の成果を加えて正報告書を作成することとなった。

報告書の編集に際しては、2分冊で刊行することとし、本書はその1冊目である。各調査の面積や期間などの情報及び、本書に所収した調査一覧は、表1にまとめて掲載している。

ただし、本書で扱った調査の内、古いものでは1970年代の記録を対象としており、50年近くが経とうとしている。そのため、写真等の記録類も少なからず劣化が進行しており、記録保存の精度や水準・方法が異なることから、本書編集担当者が当時の記録情報を汲み取りきれていない可能性のあることを記しておく。

### 第3節 本書作成体制と編集方針

本書の作成は、平成26年度から一部の遺物実測を業務委託し、あわせて本市教育委員会において川村和子（平成26年4月～令和2年3月まで）を主担当として各調査の実測原図・写真資料の抽出と再整理をはじめた。

本書の編集にあたって、実測原図・写真・日誌・遺物からメモに至るまで、可能な限り元データにあたるよう心掛けた。しかし、各年代および調査担当者によって遺構表記や記録保存の方法が異なり、本報告では原因や遺物との遊離を防ぐため名称等の表記は、一部を除きあえて変更せず、本書の中では統一を図らなかった。さらに原因にあたることのできたものについては、当時の記録情報を可能な限りそのまま転載し、付加情報として本書編者が追記するかたちで記載するよう努めた。これらのことから、例言に記すべき遺構名称等の表記方法も画一的に進めることができず、地点毎に記載することとした。

## 第II章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

宿久庄遺跡の所在する茨木市域は、北東-南西方向に走る有馬-高槻構造線によって、大きく南北二つに区分される。北部は更に馬場断層と箕面断層によって三つに区分されるが、概ね標高300m前後の秩父古生層系の岩石により構成される北摂山地と、そこから派生する丘陵部からなっている。

当遺跡は市域のほぼ西端、箕面市との市境付近に位置する。

当遺跡の西側から南側を流れる勝尾寺川は、北摂山地を源流とし、当遺跡周辺で大きく蛇行しながら東へ向きを変え、両岸に河岸段丘を形成している。

この河岸段丘の東側に宿久庄遺跡、西側に宿久庄西遺跡・庄田遺跡などが立地する。また、当遺跡の南側には西国街道が千里丘陵と北摂山地の地峡部を東西方向に通っており、交通の要衝に位置していたことが窺われる。

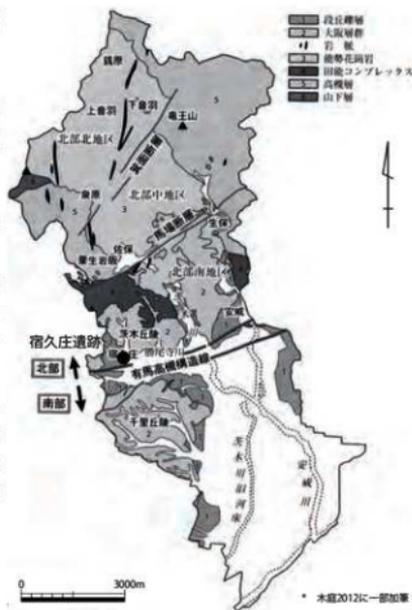


図2 茨木市地質図

### 第2節 歴史的環境

茨木市西部の宿久庄遺跡周辺の人々の活動痕跡は旧石器時代から認められている。

旧石器時代には、粟生間谷遺跡で7箇所の石器製作址が検出されている。また、庄田遺跡などで石器が出土している(註1)。

縄文時代には、粟生間谷遺跡で中期前葉と後期中葉の遺構が確認されており、徳大寺遺跡で晩期の竪穴住居跡が確認されている。また、草創期の有舌尖頭器が粟生間谷遺跡・庄田遺跡で、宿久庄北遺跡で早期の土器、粟生間谷遺跡で中期から晩期にかけての土器がそれぞれ出土している。

弥生時代には西福井遺跡で前期・後期の遺構・遺物が確認されているのが目立つ。後期になると福井遺跡で竪穴住居跡が確認されている。その他、宿久庄遺跡で前期～後期の土器、庄田遺跡で後期の土器が出土している。現時点では、遺構の検出は少ないが、今後確認される可能性が高い。

古墳時代には、多くの古墳が築造されており、前期は紫金山古墳、中期は西福井遺跡で11基からなる古墳群が確認されている。後期には、単独墳である南塚古墳・青松塚古墳・海北塚古墳・福井遺跡で検出された埋没墳、群衆墳である新屋古墳群などがある。また、紫金山古墳の周囲でも後期古墳の石室と推定されるものが確認されている。

集落としては、宿久庄遺跡で前期、福井遺跡で後期後半の集落がそれぞれ確認されている。その他、



西福井遺跡で前期の遺物、宿久庄遺跡において中期・後期の遺物が出土している。

飛鳥時代には、宿久庄遺跡・宿久庄西遺跡・西福井遺跡で竪穴建物が検出されている。宿久庄西遺跡では掘立柱建物も多数検出されている。また、佐保栗栖山南墳墓群で終末期古墳が6基確認されている。

奈良時代には、宿久庄西遺跡から庄田遺跡にかけて掘立柱建物が多数検出されており、陶硯・土馬・製塩土器なども出土している。このことから、公的な施設もしくは有力氏族の居住地の可能性が考えられている。粟生間谷遺跡では、三彩陶器にガラス小玉を納めた地鎮遺構や掘立柱建物が検出されている。西福井遺跡においても掘立柱建物や墨書土器が確認されている。

佐保栗栖山南墳墓群では古代の火葬墓、宿久庄遺跡の約2km北方の山中（大字宿久庄高松）で土取工事中に火葬蔵骨器が発見されている。さらに「安威大織冠山」出土と伝えられる三彩有蓋壺も、石櫃を伴う火葬墓の蔵骨器である。周辺の山地には現在把握されている以上の火葬墓が営まれていた可能性もある。宿久庄北遺跡では、灯明器が多数出土しており、何らかの燃灯行為が行われていたようである。

なお、律令制下では、現在の茨木市を中心とする島下郡は新屋・宿久・安威・穂積の4郷の存在が知られており（註2）、当地域は宿久郷に属すると考えられる。延喜式神名帳には島下郡に17座の神社が挙げられている。この内、「須久久神社二座」は宿久郷に所在したと比定される（註3）。

また、島下郡の条里が勝尾寺文書などから復元されている。宿久庄周辺では勝尾寺文書に宿久村の田畠が8条2里9坪、10条2里23坪、11条2里25坪などの地点が記されている。

平安時代には、徳大寺遺跡で梵鐘造遺構、粟生間谷遺跡・宿久庄西遺跡・福井遺跡で集落、豊川遺跡で掘立柱建物が確認されている。また文献上では、安和二年（969年）の『仁和寺文書』に法勝院領宿久庄（註4）、『小右記』の寛仁二年（1018年）5月30日条に中宮領宿御庄、天永三年（1112年）の「中宮職請奏」に中宮職領宿久御園（註5）が認められる。宿久庄遺跡で確認されている遺構がこれらの荘園と関連する可能性が考えられる。

鎌倉時代から室町時代にかけては、粟生間谷遺跡・福井遺跡・宿久庄遺跡で引き続き集落が確認されている。西福井遺跡では、居館跡が検出されている。また、佐保栗栖山南墳墓群では石遺物を伴う墓地群が検出されている。

この時期には、有馬温泉への湯治などで多くの人々が山陽道（大道）を東西に移動している記録が残されている。この「大道」は勝尾寺文書（註6）において「宿久村サイク田」の四至を「限南河 限北大道」と記されていることから、勝尾寺川の北側に道が通っていたことが窺え、現在の西国街道の道筋とは異なっていたと考えられる（註7）。

また、宿久を姓とする人物が永仁二年（1294年・註8）、文和元年（1352年・註9）、永享五年（1433年・註10）、宝徳三年（1451年・註11）などの文書に見え（註12）、当地は鎌倉幕府御家人、国人領主であった宿久氏の根拠地であったと考えられる。後述する宿久城はこの宿久氏と関連するものかもしれない。

ほぼ同時期に、宿久村には、猿楽座が所在していた。応永七年（1400年）に著された『風姿花伝』において「法勝寺御修正参勤中学三座 新座 本座 法成寺」と挙げられている（註13）。この内、法成寺に「シユク」の傍注が認められる写本があり、宿久村に比定されている。法成寺座については、建長元年（1249年）正月十五日（註14）、永享八年（1436年）三月（註15）及び、住吉大社の四月の御田植神事の前日に猿楽を奉納している（註16）。

また、弘安五年（1282年）の奥書をもつ大門寺一切経には、その書写が宿久村で行われたことが記されている（註17）。

室町時代末期には各地で戦乱が相次ぎ、当地周辺でも多くの城郭が築かれるようになる。元亀二年（1571年）に起こった郡山合戦時には「高ツキ、イハラキ、シユク城、里城」の4城が落城しており、

宿久庄遺跡周辺も合戦の舞台となっていたことが窺える（註18）。城跡の多くは未だ発掘調査の手が及んでいないが、数少ない調査事例として、佐保栗栖山砦跡があり、当時の山城の構築状況の詳細が判明している。

また、宿久庄遺跡の南東側に位置する郡山には天文十七年（1548年）に「郡山堂」が建てられ（註19）、寺内町を形成していた。しかし、永禄十一年（1568年）に織田信長が足利義昭に従って上洛した際に「郡山道場」が破却されている（註20）。

江戸時代には、現在の西国街道沿いに郡山宿が設けられ、郡山宿本陣が国指定史跡として現存する。

宿久庄周辺は17世紀前半には幕府領であったが、17世紀中頃には高槻藩永井氏領となり、その後分家の永井氏領となる（下野国烏山→播磨国赤穂→信濃国飯山→武蔵国岩槻→美濃国加納と移封し、幕末まで加納藩領）。明治二十二年（1889年）には道祖本、宿久庄、清水、粟生、小野原の各村が合併し、豊川村となり、昭和三十一年（1956年）に茨木市と箕面市に分かれて編入され、現在に至っている。

## 註

註1 『新修 茨木市史』第七巻に宿久庄遺跡出土として旧石器時代の石器1点が掲載されている。これは、〔辻本1977〕で報告されているものである。しかし、この資料は茨木壺園北側の土取り場跡の崖面から採集されたものであり、現在の宿久庄遺跡の範囲には含まれていない地点である。

註2 『和名類聚抄』国郡部

註3 『延喜式』巻九 神名帳上 9「摂津国条 島下郡の項

『神宮雜例集』巻第一「中臣氏祖神」の項

註4 『平安遺文』第二巻 302「法勝院領目録」

註5 『朝野群載』新訂増補国史大系 第二十九巻上「中宮職請奏」

註6 『箕面市史』史料編二 勝尾寺文書 590・591「全石女田地売券」、また666「沙弥淨清田地売券」も「限南河限北大道」と記されている。

註7 従来、現在の西国街道沿いに遺跡の分布が認められないことが注意されてきた（財団法人 大阪府文化財センター2002など）。しかし、街道が勝尾寺川の北に位置するならば、宿久庄遺跡、宿久庄西遺跡内を通っていた可能性が考えられるようになる。なお、この点は、〔福留2012〕で指摘されている。一方、〔木下2013〕では「大道」は「その地方での幹線道路をいうことが多く、必ずしも古代の驛路のように全国的な大道とは限らない」と指摘されている。

註8 『箕面市史』史料編一 勝尾寺文書 359「勝尾寺住僧等申状案」「当国御家人宿久六郎」が認められる。

註9 『大日本史料』第六編之十九「摂津国真上虎才丸所領保証契約状写」文和三年雜載「宿久信光」が認められる。

註10 『箕面市史』史料編2 865「勝尾寺常行堂散在秋所当米上帳」「宿久北殿」が認められる。

註11 『箕面市史』史料編2 940「歳末巻数賦日記」「宿久殿」が認められる。

註12 『箕面市史』史料編2 1154「宿久長俊書状」年不詳であるが「宿久丹波守長俊」とある。

註13 『風姿花伝』第四 神儀伝

註14 『岡屋閑白記』建長元年正月条

註15 『住吉太神宮諸神事次第』三月廿日条

註16 『看聞日記』永享八年三月十日条

註17 『大和郡山山西方寺所蔵一切経調査報告書』2144「十門辯惑論巻中」

註18 『大日本史料』第十編之六「尋憲記」元龜二年八月二十九日条

註19 『天文日記』天文十七年三月廿二日条

註20 『言繼卿記』永禄十一年九月卅日条

## 第三章 調査の成果

### 第1節 76-1 調査

#### (1) はじめに

藤の里二丁目で行われた主要地方道茨木能勢線の拡幅に伴う調査である。宿久庄遺跡が埋蔵文化財包蔵地として周知される契機となった。

調査は、道路の東側で南北長47m、東西幅2.6～3.0mの範囲で行われた(調査面積131㎡)。調査区以南は、既に擁壁が完成していたため、調査は行われていない。

#### (2) 基本層序(図4)

調査は土層観察を主として行っている。層序は、1. 耕作土、2. 淡黄褐色粘質土、3. 暗茶褐色小礫混じり粘土(遺物包含層)、4. 灰茶砂質土である。遺物包含層は現地表下0.4mで確認しており、厚さ0.5mを測る。

#### (3) 遺構と遺物

断面図を作成した範囲では遺構は確認されていないようである。遺物は3-1a層から弥生時代～古墳時代の遺物が出土したとされている。しかし、整理段階で遺物の所在を確認できなかったため、詳細は不明である。

#### (4) 小結

土層断面図と写真の所在は確認できたが、遺物の所在は確認できなかった。宿久庄遺跡で最初の調査であるが、周辺は未だ調査例がほとんどなく、実態が不明な地区である。今後、周辺の調査が進めば遺跡北西部の様相が明らかになると思われる。



図4 76-1調査 土層断面柱状図

### 第2節 78-1 調査

#### (1) はじめに

藤の里二丁目計画された病院の建築に伴って行われた発掘調査である。確認できた写真(PL.1)を見る限り、幅2m程度のトレンチ調査が行われたと考えられる(調査面積50㎡)。具体的な記録が確認できなかったため、本書では出土遺物について記述する。

#### (2) 遺物(図5)

遺物はいずれも「茶褐色粘質土」出土である。他の調査区の出土遺物ラベルを参考にすると、この色調の土層は遺物包含層とされており、当調査区においても同様の層が存在したと考えられる。

縄文時代と古墳時代の土器が出土している。図化し得たのは4点に過ぎないが、古墳時代の土器が主であり、当該期の遺物包含層と考えられる。この点は周辺の調査成果とも合致する。

1は縄文土器の注口土器である。注口部のみ残存する。そのため、時期を判断し難いが、近畿地方における注口土器の出現は縄文時代後期以降であるため、それ以降と考えられる。

2は土師器甕である。体部外面及び口縁部内面にハケ、体部内面にケズリを施す。3は須恵器杯身で

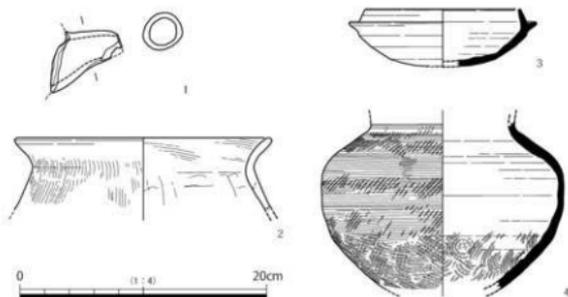


図5 78-1 調査 出土遺物実測図

ある。受部は内傾してやや上方に延びる。TK 10 型式MT 85 号窯段階期である。4 は須恵器壺である。口縁部及び底部を欠損する。体部外面にタタキ後カキメを施し、内面底部に同心円当て具痕が認められる。5 世紀後半頃である。

### (3) 小結

当調査区は、調査状況の写真と遺物の所在は確認できたが、遺構などの平面記録は確認できなかった。写真から判断する限り、トレンチ調査が実施されたと思われる。

遺物は、古墳時代の土師器・須恵器と、縄文土器が出土している。縄文土器は市内でも確認例が少ないことから注目される。

南東 50 m に位置する 04-1 調査（第 13 節で報告）においても縄文時代後期中葉の土器が出土しており、宿久庄遺跡南西部に小規模な集落の存在が想定される。

## 第3節 82-1 調査

### (1) はじめに

宿久庄二丁目で行われた配送センターの建築に伴って計画された道路予定地の発掘調査である。

調査区は任意に設定されており、北から A 区（東西 1.2 m × 南北 2.0 m）・B 区（東西 1.2 m × 南北 1.5 m）・C 区（東西 2.5 m × 南北 28.5 m）と呼称している（図 6）。調査面積は合計で 75 m<sup>2</sup> である。

以下、記録図面と調査終了報告の内容を基にして記述する。

### (2) 基本層序（図 7）

基本層序は、3 層に分けられる。1. 盛土（層厚不明・0-1a 層）、2. 耕作土（層厚 0.1 ~ 0.3 m・1-1a 層）、3. 床土（A・C 区でのみ確認、層厚 0.1 m・1-2a 層）、4. 茶褐色土（A 区層厚 0.1 m、B 区層厚 0.3 m、C 区層厚 0.6 m・2-1a 層）である。

### (3) 遺構と遺物

各調査区が狭小であったこともあり、検出した遺構は、A 区の溝のみである。溝の南肩を検出した（図 7）。検出幅 1.6 m、深さ 0.3 m を測る。

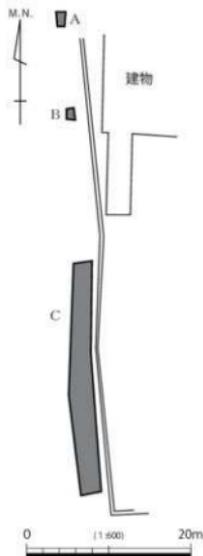


図6 82-1 調査  
調査区配置図

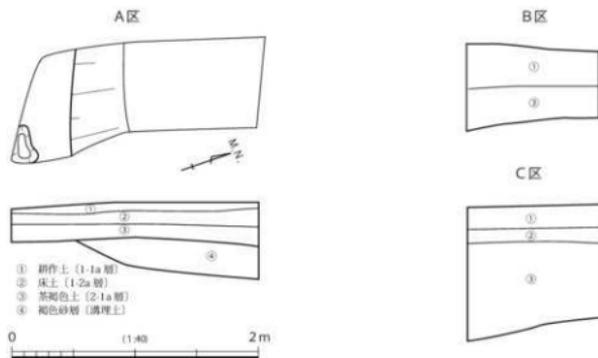


図7 82-1 調査 A区平面図・A～C区土層断面柱状図

溝埋土は褐色砂層である。弥生土器片が出土している。

またC区からは焼土塊が出土しているが、土器片及び焼土塊の詳細は不明である。

#### (4) 小結

当調査区では、丘陵部から低地へ下がっている地形を確認した。断面図に標高の記載が無いため検証できないが、A区からC区にかけては約50mの間に約2.4m下がるとされている。

## 第4節 82-3 調査

### (1) はじめに

藤の里二丁目で計画された食堂の建築に伴って行われた発掘調査である。計画建物による損壊が遺物包含層まで及ばないことから、建物の南端部分のみを対象として調査地の様相を把握するための調査を行った（南北2.0m×東西6.0m、調査面積12㎡）。

調査は建築工事と並行して行われたため、調査区内で掘削土を処理する必要があり、結果的に地山面まで完掘できたのは7㎡に留まった。

以下、調査終了報告の内容を基にして記述する。

### (2) 基本層序（図8）

基本層序は、1. 耕作土（層厚0.16m）、2. 黄色砂質土（層厚0.2m）、3. 黄色粘質土（層厚0.18m）、4. 黄濁色砂質土（層厚0.1cm）、5. 茶褐色粘質土（遺物包含層・層厚0.15cm）、6. 黒色砂質土（拳大の礫含む・層厚0.3m）、7. 黒色粘質土（層厚0.25cm）、8. 青濁色粘土混じり礫（地山）である。

### (3) 遺構と遺物

遺構は検出されなかった。遺物は茶褐色粘質土より、土師器・須恵器片が出土している。ただし、図化できるものは無かった。

遺物包含層からの遺物出土量は少なく、遺構も検出されなかったことから、北側及び西側からの流れ込みによって再堆積した層とも考えられている。



- ① 耕作土
- ② 黄色砂質土
- ③ 黄色粘質土
- ④ 黄濁色砂質土
- ⑤ 茶褐色粘質土（遺物包含層）
- ⑥ 黒色砂質土（拳大の礫含む）
- ⑦ 黒色粘質土
- ⑧ 青濁色粘土（礫層・地山）

図8 82-3 調査  
土層断面柱状図

#### (4) 小結

当調査区では、調査面積及び工程の影響で、土層観察が主となった。遺物の包含量は僅かであった。南西 100 m に位置する 13-1 調査（第 15 節で報告）では 9 基の遺構を検出しているが、いずれも深さ 10cm 程度の極浅いものであり、遺物の出土量は僅かであった。その他の周囲の調査では、遺構・遺物が検出されているため、82-3 調査区と 13-1 調査区は小規模な谷地形の中に位置している可能性がある。

### 第 5 節 83-1 調査

#### (1) はじめに

藤の里二丁目目で計画された倉庫の建築に伴って行われた発掘調査である。南北 62 m × 東西 22 m と

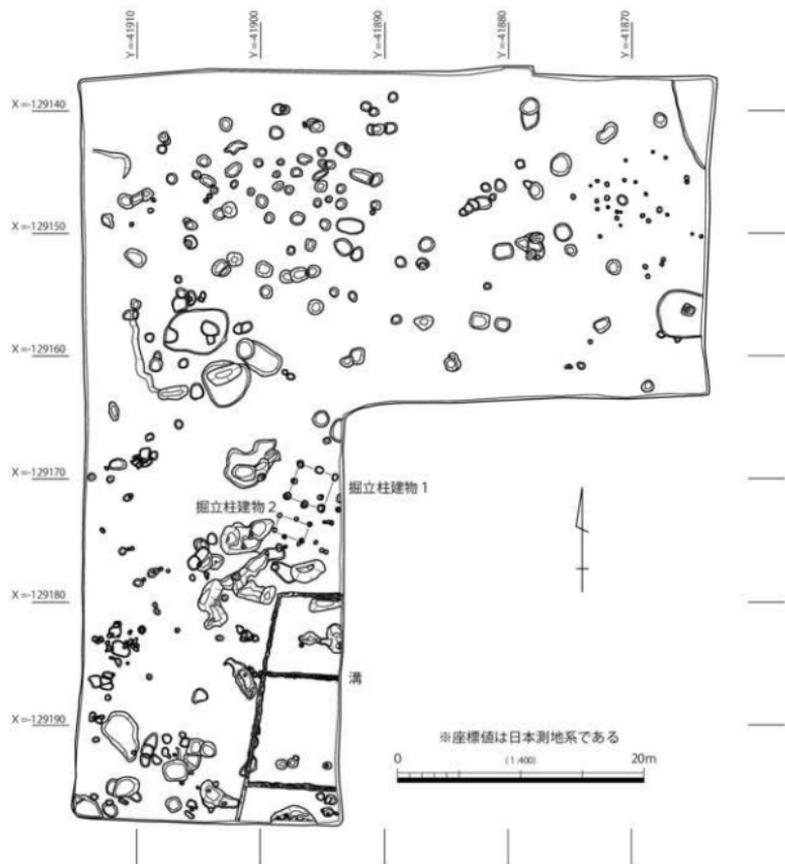


図 9 83-1 調査 調査区平面図

南北28m×東西30mの2つの四角形が逆「L」字状を呈する調査区である（調査面積2,204㎡）。

空中写真測量による平面図の所在は確認できたが、その他の図面は確認できなかった。

## (2) 遺構 (図9)

ビット169基、土坑39基、溝4条を検出した。

ビット 直径0.15m程度の円形を呈するものと、直径1.1m程度の隅丸方形を呈するものがある。この差は時期差に起因する可能性も考えられる。

調査区の南側で、掘立柱建物2棟を検出した(図10)。調査区の北側にもビットが多く認められるため、1～2棟の掘立柱建物が存在した可能性がある。

**掘立柱建物1** 南北2間×東西2間の側柱建物である。東側が一間であるため、調査区外に続く可能性も考えられる。建物の軸はN-21°-Eをとる。柱穴の芯々距離は1.4mを測る。柱穴の直径は0.4～0.6mで、平面形状は長楕円形を呈する。中央に直径0.25mの円形を呈する穴が認められるものもあり、柱痕の可能性も考えられる。

**掘立柱建物2** 南北1間×東西2間の側柱建物である。建物の軸はN-21°-Eをとる。柱穴の芯々距離は1.2m～1.5mを測る。柱穴の直径は0.35mで、平面形状は円形ないし隅丸方形を呈する。

掘立柱建物2は、掘立柱建物1より柱穴の規模が小さいが、建物の軸が等しく、西側の柱筋が揃っていることから西側を正面として互いに関連する建物の可能性がある。なお、両建物の間は最も狭い部分で0.9mを測る。

**土坑** 様々な平面形状を呈している。西に80m地点に位置する84-4調査(第6節で報告)と同様に不定形で複雑な形態のものも認められるが、これ以上詳述するための材料がない。

**溝** 調査区南東隅で検出した溝4条は、溝中に礫を充填する。本調査区では土層断面図が確認できなかったため、層位から時期を判断することはできない。しかし、南西200mに位置する01-1調査(第12節で報告)において、同様に礫が充填された溝が検出されている。この溝は耕作土直下から切り込んでいることが確認でき、近世以降の耕作に伴う暗渠と考えられる。当調査区の溝も近世以降の耕作に伴う暗渠の可能性はある。

## (3) 遺物 (図11～14)

遺物は大半が包含層と考えられる「茶褐色土」出土である。一部「P-4」や「P-3」とラベルに記載されているものもあるが、具体的に何を示しているものか定かでない。また、仮に遺構番号であってもそれを記載した図面が確認できなかったため、今回の報告では包含層出土遺物として扱う。古墳時代中期・後期及び飛鳥時代と中世(12世紀後半から13世紀初頭)の遺物を図示した。

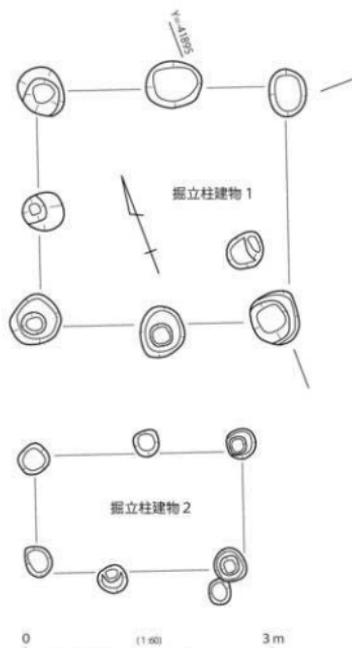


図10 83-1調査 掘立柱建物1・2平面図

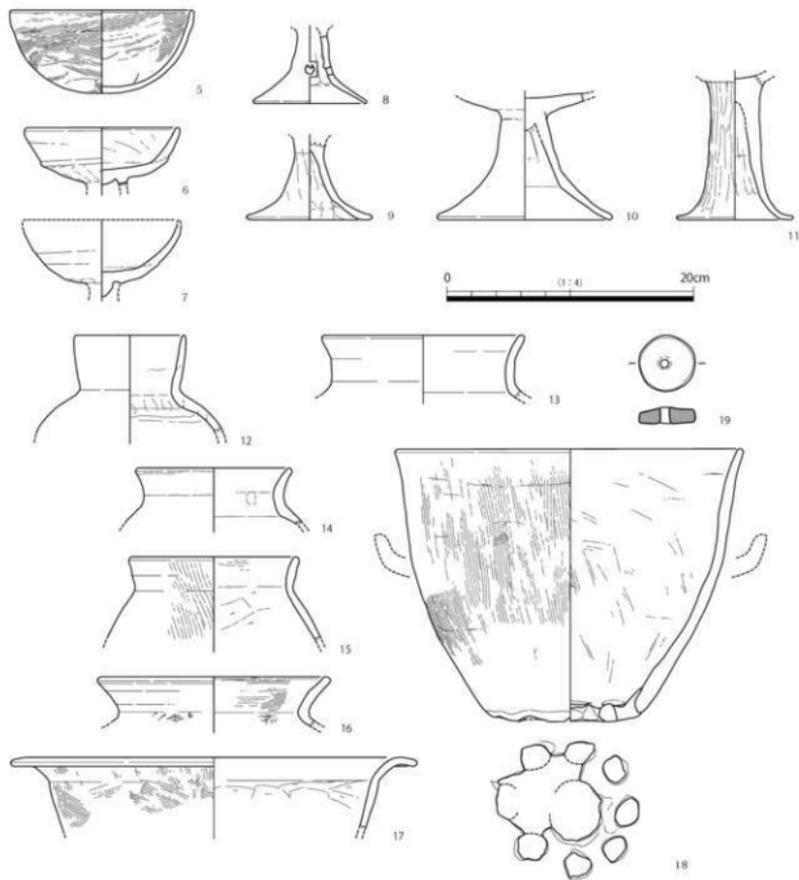


図 11 83-1 調査 包含層出土遺物実測図 (1)

5～18は土師器である。5は椀である。内外面にハケを施す。丸底を呈する。6～11は高杯である。6・7は有稜椀形高杯の杯部である。共に体部と口縁部の境に稜をもち、柱部との接合技法は円盤充填法(中野分類のD2類)である。〔中野2008〕。8～11は脚柱部である。8～9は屈曲して「ハ」字状に開く裾部をもつ。脚柱部内面にシボリ痕、裾部内面に指頭圧痕が認められる。8は脚柱部に円形透かし孔が1個残存する。9・10の杯部との接合技法は9が中野分類CⅡ類、10がD2類である。11は直立する脚柱部から緩やかに広がる裾部をもつ。

12～15は壺である。12は直立する口縁をもつ。肩部内面に粘土紐接合痕と指頭圧痕が認められる。13・14は外反する口縁をもつ。15はほぼ直立する口縁をもつ。外面および口縁部内面にハケ、体部内面にケズリを施す。

16は甕である。体部外面及び内面にハケを施す。17は鍋である。口縁部は大きく外側へひらく。外

面にハケ、内面にケズリを施す。18は甌である。底部はほぼ残存するが、体部から口縁部にかけての残存状態が悪い。本来体部に付く把手は残存していない。体部内外面にハケを施す。底面の蒸気孔は中央に直径4cmの円孔、周囲に直径2cmの円孔を8個穿つ。体部外面に黒斑が認められる。5～17の土師器は辻編年3段階と考えられる〔辻1999〕。一方、18は蒸気孔の個数が多いため2段階の可能性はある。

19は土製紡錘車である。直径4.6cm、厚さ1.35cmで中央に0.7cmの円孔を穿つ。重量は32gを計る。

20～76は須恵器である。20は蓋である。内面に断面三角形形状のかえりをもつ。21～30は杯蓋である。21は天井部と口縁部の境に稜をもち、口縁端部内面が肥厚し段をもつ。22～26は口径10～11cmを測る。22・24・25は口縁端部付近で屈曲し、23・26は屈曲しない。27はやや扁平で口径12.4cmを測る。天井部と口縁部の境が凹線状にくぼむ。28～30は口径15～16cmと大形である。口縁端部付近で屈曲する。いずれも飛鳥Ⅰ期である。

31～51は杯身である。31はたちあがり内傾し、口縁部内面に面をもつ。丸みを帯びた器形を呈する。MT 15型式である。32・33はたちあがり内傾し、口縁部内面に面をもつ。TK 10型式である。34～41はたちあがり内傾し、角度を変えて上方に立ち上がる。平底を呈する。TK 43型式である。35は外面に自然軸がかかる。42～45はたちあがり短く内傾する。口縁部は先端が細くなり、端部は丸く取める。45は底部が尖り気味である。TK 209型式である。46～51はたちあがり短く内傾し、底部は平底のものと同丸底のものがある。飛鳥Ⅰ期である。47は外面に自然軸や灰がかぶる。そのために器表面は荒れている。49は受部に重ね焼きの痕跡が認められ、底部外面にヘラ記号が認められる。50は受部に別個体の破片が溶着する。

52・53は杯である。53は口縁部が斜め上方に立ち上がり、口縁端部は直立する。飛鳥Ⅰ期である。

54～56は有蓋高杯である。56は脚柱部の下半分しか残存していないが、いずれも二段の長方形透かし孔を3方向に穿ち、透かし孔の間に沈線を施す。54は浅い杯部も残存する。54・55は裾端部を上方に折り曲げ、56は下方に拡張する。いずれもTK 209型式である。56は外面に自然軸がかかる。

57は高杯である。57は外方に大きく開く頸部をもつ。外面に凹線文3条を施し、凹線文の間に櫛描刺突文、上方に櫛描波状文を施す。下側はハケを施す。58は甌である。扁平な球形の体部と外方へ開く口縁部をもつ。口縁部は上方に拡張し、面をなす。体部が最大径を測る位置に直径1.2cmの円孔を穿つ。円孔の位置に櫛描波状文を施す。底部にヘラ記号が認められる。TK 216型式である。

59は長頸甌である。ほぼ直立する頸部である。内面に自然軸がかかる。飛鳥Ⅱ期である。60～63は甌である。60は丸底の底部である。TK 43型式か。61～63は口縁部である。61は外面の口縁部下に突帯一条をもつ。焼成が悪く、器面は黄橙色を呈する。63は口縁部を上方に拡張し、外面に櫛描波状文2帯を施す。64・65は器台の底部であろう。64は丸底の底部に高台を張り付けた痕跡が認められる。65は台部が残存する。

66～73は甌である。66は口縁部直下及び頸部に断面三角形形状の突帯3条をもつ。突帯間に櫛描波状文2帯を施す。TK 208型式である。67は口縁端部を外方へ屈曲させる。口縁部内面に自然軸がかかる。68・69は口縁端部を上方に拡張する。体部外面に平行タキ後カキメを施し、体部内面に同心円当て具痕が認められる。MT 15型式である。70・71は口縁端部を外側に折り曲げる。72・73は口縁部を外内へ拡張する。下方に沈線2条を施す。72は沈線の上にヘラによる刺突文を施す。内面に自然軸がかかる。TK 208型式である。73は端部を上下に拡張し、面を成す。

74は器台である。ほぼ球形を呈する台部をもつ。4条の凹線を施し、その間に櫛描波状文を施す。口縁部は外方へ屈曲し、端部は面を成す。TK 208型式である。

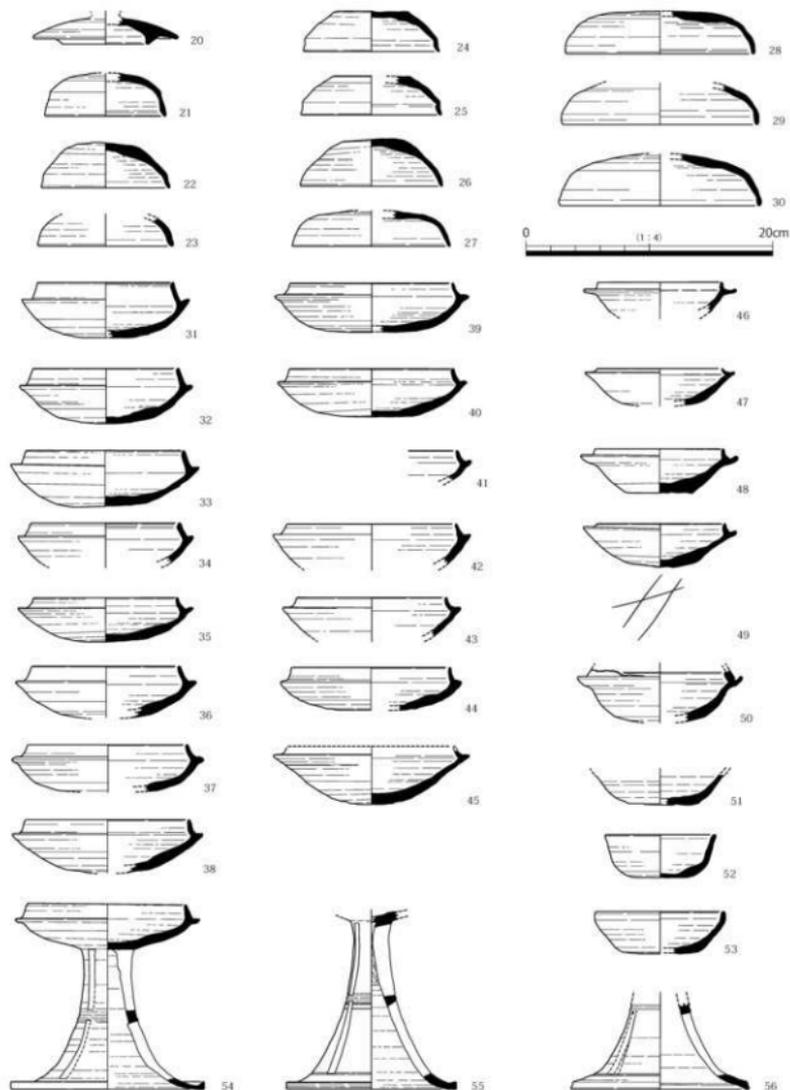


図12 83-1調査 包含層出土物実測図(2)

75・76は焼成の悪い須恵器と考えられる。75は短頸壺である。口縁部が外方へ屈曲する。76は甕である。口縁部は上方に拡張し、端部は面を成す。

77・78は瓦器椀である。77は外面に指頭圧痕が認められ、内面にミガキを施す。和泉型Ⅲ期頃か。

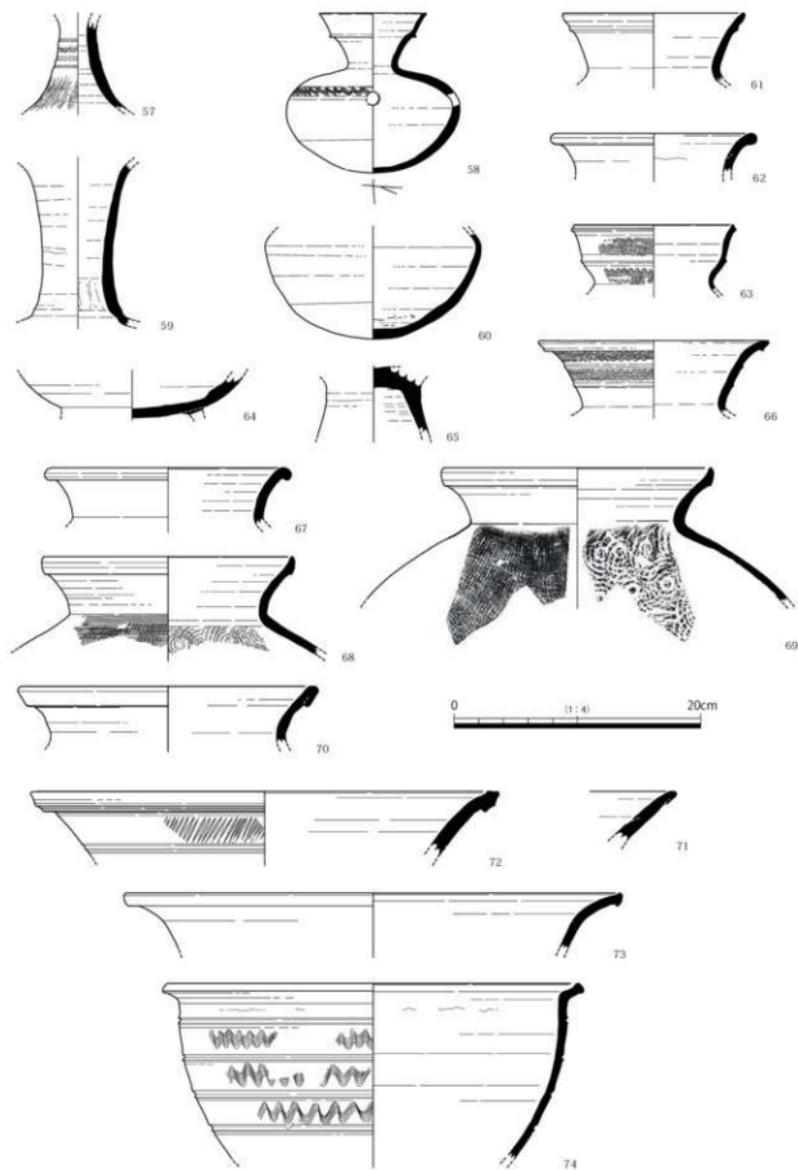


図13 83-1調査 包含層出土遺物実測図(3)

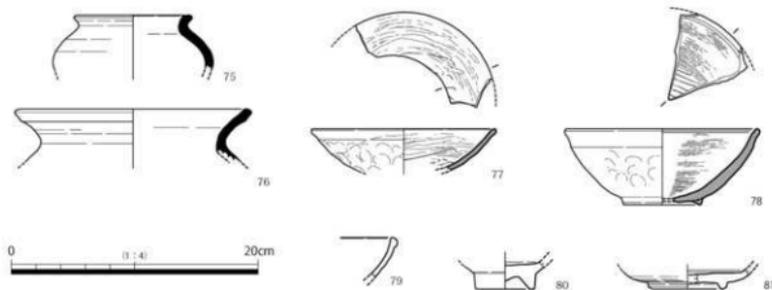


図 14 83-1 調査 包含層出土遺物実測図 (4)

78 は口縁端部内面に沈線を施す。外面に指頭圧痕が認められ、内面に密なミガキ、内面見込みに平行線状暗文を施す。断面三角形の高台をもつ。いぶしがおこなわれておらず、土師質に近い状態である。楠葉型Ⅲ-3 期頃である。

79・80 は白磁碗である。79 は口縁部外面が小さな玉緑状を呈する。太宰府分類の白磁碗 X 1 類か。80 は断面台形状の高い高台をもつ。外面は露胎である。81 は白磁皿である。断面台形状の高台をもち、平らな底部から口縁部が屈曲して立ち上がる。

#### (4) 小結

当調査区は、宿久庄遺跡において初の大規模な調査である。調査の結果、多くの遺構を検出することができた。残念ながら遺構の詳細は不明であり、図上で掘立柱建物 2 棟を復元したに留まる。

出土遺物は古墳時代中期～飛鳥時代前半のものが中心である。他の調査区ではあまり認められない古墳時代中期の須恵器が出土していることは注目される。ただし、蓋杯などの小型品は認められず、器台などの大型品が中心であり、集落内で用いるものではないのかもしれない。

また、若干ながら中世の遺物を含んでいる。宿久庄遺跡では、和泉型瓦器碗が主体となる中で、楠葉型瓦器碗が含まれていることも注目される。

## 第 6 節 84-4 調査

### (1) はじめに

藤の里二丁目で計画された倉庫の建築に伴って行われた発掘調査である。東西 39 m×南北 18 m で一部が台形状に張り出した不整形な調査区である (調査面積 759m<sup>2</sup>)。『宿久庄遺跡発掘調査概要』〔茨木市教育委員会 1986〕(以下・本項では『概要』と記述) を基に記述する。

### (2) 基本層序

土層断面図は原図に標高値・土色などの注記がなされていなかったため、『概要』の内容を記述する。

基本層序は、1. 盛土 (層厚 1.4 m)、2. 耕土 (0.35 m)、3. 黄色粘土層 (床土・層厚 0.2 ~ 0.25 m)、4. 黒褐色土 (遺物包含層・層厚 0.25 ~ 0.35 m)、5. 黄褐色礫層 (地山) である。地山面は北西から南東に向かって緩やかに傾斜する。黒褐色土中に、弥生時代後期・古墳時代後期の遺物を含むが、出土量は少ない。

### (3) 遺構 (図 15)

ピット 294 基、土坑 66 基、井戸 1 基を検出した。各遺構の断面図は確認できなかったため、遺構埋土などの詳細は不明である。

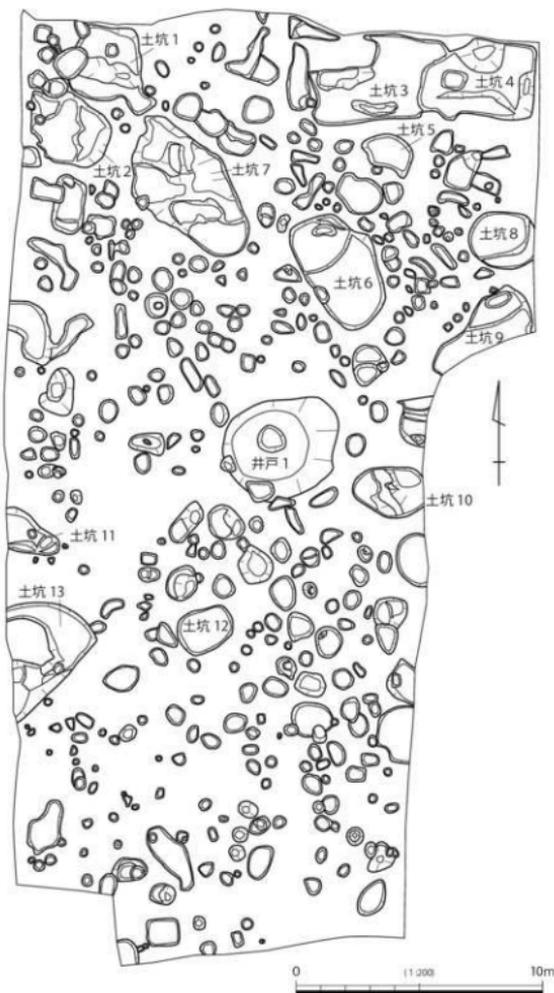


図15 84-4調査 調査区平面図

**ピット** 多数検出したが、掘立柱建物としてまとまりを把握できるものはなかった。平面形状は円形を呈するものと方形を呈するものがある。円形のは直径0.3～0.8mを測る。方形のものは一辺が1.0～1.1mを測り、円形のものより平面規模が大きいことが指摘できる。この違いは時期差に起因する可能性も考えられる。

**土坑** 規模の大きなもの13基は『概要』に遺構の概要が記載されており、それを基に記述する。ただ

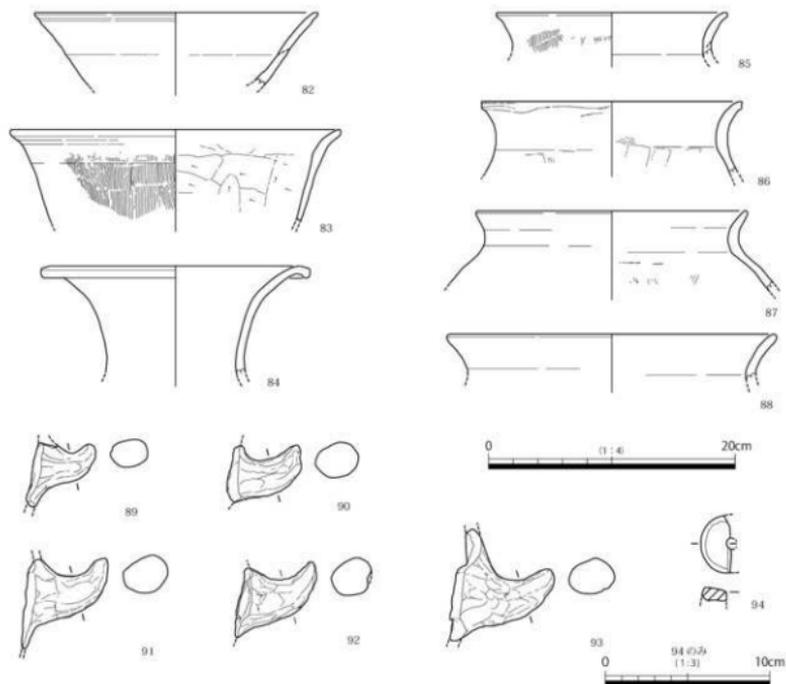


図 16 84-4 調査 包含層出土物実測図 (1)

し数値等は修正しているものもある。また、『概要』では「土壇 1」などと表記されているが、本書では「土坑 1」というように表記した。遺物については出土しているもののみ記す。

土坑 1 調査区北西部で検出した平面形状が不整な方形を呈する土坑である。長辺 3.0 m、短辺 2.8 m、深さ 0.24 m を測る。遺構底面でビット状の遺構が検出されているが、前後関係は不明である。遺物は土師器・須恵器が出土している。

土坑 2 土坑 1 の南側で検出した平面形状が不整な方形を呈する土坑である。長辺 3.6 m、短辺 2.5 m、深さ 0.19 m を測る。遺物は土師器・須恵器が出土している。

土坑 3 調査区北端で検出した平面形状が方形を呈する土坑である。長辺 5.5 m、短辺 3.5 m、深さ 0.34 m を測る。東側は土坑 4 に切られる。遺物は土師器・須恵器が出土している。

土坑 4 土坑 3 の東側で検出した平面形状が方形を呈する土坑である。長辺 4.7 m、短辺 3.0 m、深さ 0.33 m を測る。遺物は土師器が出土している。

土坑 5 土坑 3 の南側で検出した平面形状が不整な方形を呈する土坑である。長径 2.1 m、短径 1.3 m、深さ 0.16 m を測る。

土坑 6 土坑 5 の南側で検出した平面形状が方形を呈する土坑である。長辺 5.0 m、短辺 4.8 m、深さ 0.34 m を測る。

土坑 7 土坑 6 の北西側で検出した平面形状が楕円形を呈する土坑である。長径 6.5 m、短径 3.3 m、

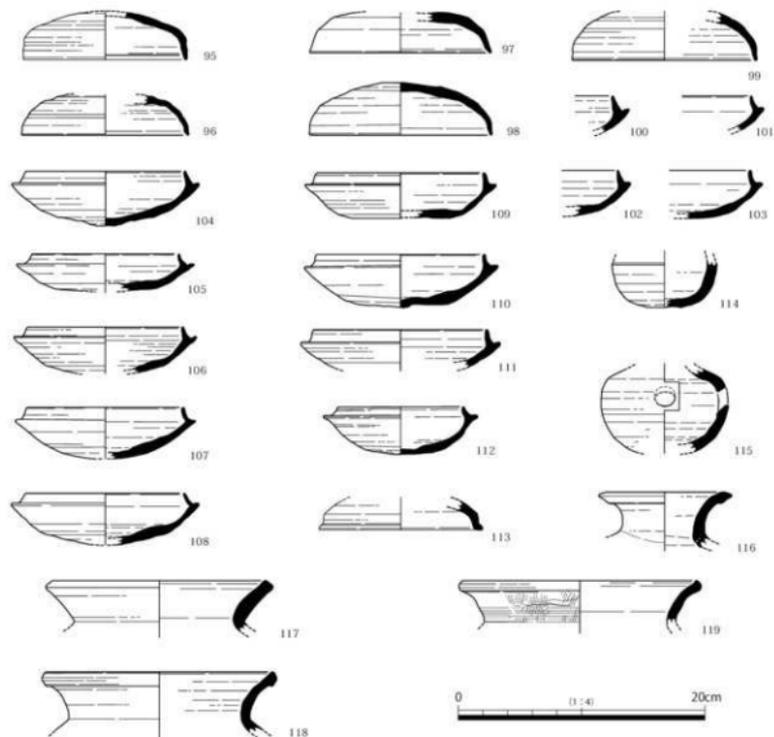


図 17 84-4 調査 包含層出土物実測図 (2)

深さ 0.41 m を測る。底面の凹凸が著しく、複数の土坑が切りあっている可能性が指摘されている。

土坑 8 調査区東端で検出した平面形状が円形を呈する土坑である。長径 2.6 m 以上、短径 2.4 m、深さ 0.67 m を測る。

土坑 9 土坑 8 の南側で検出した土坑である。南側は調査区外へ延びる。長径 4.7 m、短径 1.6 m 以上を測る。

土坑 10 調査区東端で検出した平面形状が楕円形を呈する土坑である。長径が 2.7 m 以上、短径 2.0 m、深さ 0.24 m を測る。

土坑 11 調査区西端で検出した平面形状が楕円形を呈する土坑である。長径 2.4 m 以上、短径 1.7 m を測る。

土坑 12 調査区南側中央で検出した平面形状が隅丸方形を呈する土坑である。長径 2.3 m、短径 1.7 m、深さ 0.51 m を測る。

土坑 13 調査区西端で検出した平面形状が長楕円形を呈する土坑である。西側は調査区外に延びる。長径 5.0 m 以上、短径 4.7 m を測る。南側は数基の遺構の切りあいが認められる。

土坑の中には複数の遺構が重複しているものが確認されており、遺構底面の凹凸が複雑な状況はその

影響が考えられている。出土遺物は少量かつ細片であるため、時期は定かではない。

井戸 1 調査区中央部で検出した井戸である。掘方の規模は、長径 4.5 m、短径 4.0 m、深さ 3.7 m を測る。井戸側は川原石を積み上げて構築する石組円形井戸である。

埋土は耕作土及び盛土であり、底部付近には黒色粘土が堆積する。出土遺物中に現代の陶器が含まれていること、検出面が耕土面であり、埋土が耕作土・盛土であることから、造成直前まで使用されていた耕作関連の井戸と考えられる。

#### (4) 遺物 (図 16～18)

包含層出土遺物 (図 16・17 82～119) 弥生時代後期と古墳時代後期の遺物が認められる。

82～84 は弥生土器である。82 は高杯である。椀状の杯部をもつ。口縁端部は強いヨコナデにより、凹線状の段が生じている。粘土紐接合痕跡が認められる。83 は鉢である。口縁端部は外側にひろく。体部外面にハケ、体部内面にケズリを施す。84 は広口壺である。口縁部は大きく開き、端部は面を成す。いずれも弥生時代後期である。

85～93 は土師器である。85～88 は甕である。85～87 は短い口縁部が外反する。86 は更に端部が面を成し、端面は凹線状にくぼむ。いずれも摩滅のため、器表面の状態が悪い。器面調整は 85 が外面にハケ、86 が外面にハケ、内面に板ナデ、87 が内面にハケをそれぞれ施す。89～93 は把手である。いずれも把手部分のみが残存する。短い角状を呈し、断面形状は円形から楕円形を呈する。ユビナデによって整形する。辻編年 4 段階以降である。

94 は滑石製紡錘車である。本来は断面台形状を呈すると思われるが、大きく欠損しており上面の一部のみが残存する。中央部に円孔 (直径 0.5cm) を穿つ。現在の重量は 7 g を量る。

95～119 は須恵器である。95～99 は杯蓋である。いずれも天井部と口縁部境の稜は認められない。口縁端部内面に段をもつ。TK 43 型式である。100～112 は杯身である。いずれも短い受部をもち、たちあがりは内傾して立ち上がり、口縁端部はいずれも丸く収める。100～104 は TK 43 型式、105～111 は TK 209 型式、112 は飛鳥 1 期である。

113 は蓋である。椀端部は屈曲して水平に延び、面を成す。114・115 は甕である。共に球形を呈する体部をもつ。114 は残存する最上部に沈線 1 条を施す。内面に自然軸がかかる。115 は体部最大径を測る位置に直径 1.4cm の円孔を穿つ。ともに TK 43 型式である。116 は提瓶である。口縁部は外方へ広がり、端部は面を成す。

117～119 は甕である。117 は口縁端部が面を成す。118 は端部外面が外方へ肥厚する。119 は端部を上方に拡張し、外面に平行タタキ後力キメを施す。TK 10～TK 43 型式である。

土坑 4 出土遺物 (図 18 120) 120 は土師器甕である。口縁部が外反し、端部は丸く収める。外面に

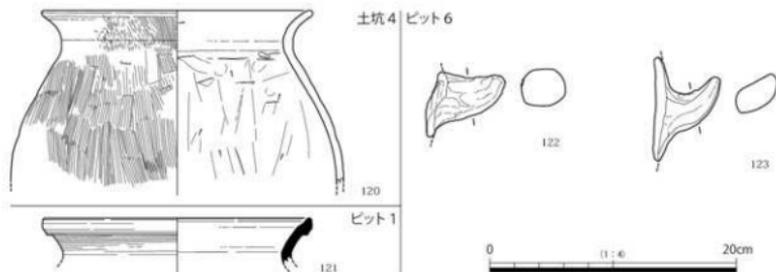


図 18 84.4 調査 遺構出土遺物実測図

ハケ、内面にケズリを施す。

#### ビット1出土遺物(図18 121)

121は須恵器甕である。端部は上下に拡張する。頸部外面にカキメを施す。TK10~TK43型式である。

ビット6出土遺物(図18 122・123) 122・123は土師器把手である。共に短い角状で、コビナデによって整形する。122は断面形状が円形を呈する。辻編年3~4段階頃である。123は断面形状が扁平な四角形状を呈する。辻編年4段階以降である。

なお、ビット1・6については位置を特定できなかった。

#### (5) 小結

当調査区では、多くの遺構を検出した。図面から得られる情報が少なく、各遺構の性格を明らかにすることはできなかったが、出土遺物の様相から、主に古墳時代後期の遺構が中心と考えられる。

## 第7節 88-1 調査

### (1) はじめに

藤の里二丁目で計画された倉庫の建築に伴って行われた発掘調査である。南北40m×東西6mの長方形と東西12m×南北6mの長方形が「L」字形を呈する調査区である(調査面積350㎡)。整理段階で平面図と写真の所在は確認したが、その他の図面や出土遺物の所在は確認できなかった。

### (2) 遺構(図19)

ビット90基、土坑20基、溝2条、落込1基を検出した。出土遺物の所在を確認できなかったため、検出した各遺構の所属時期は

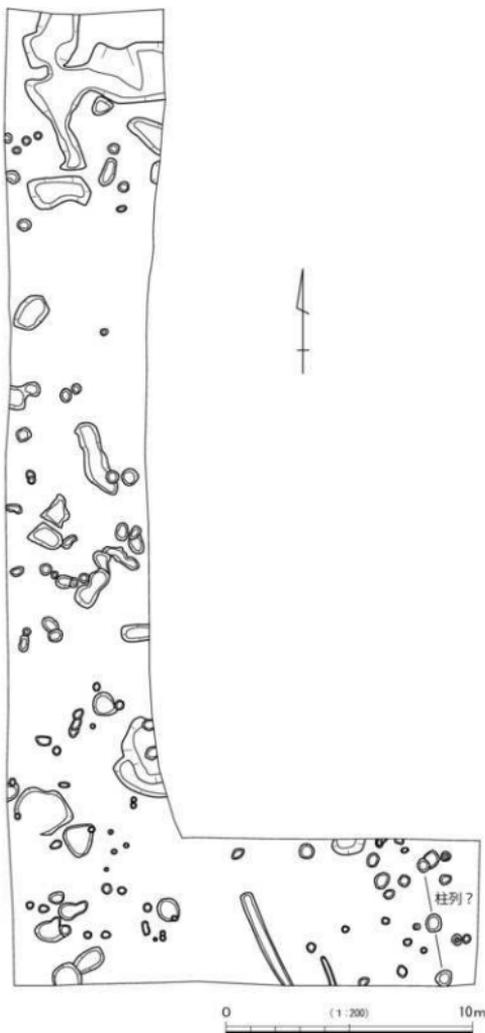


図19 88-1 調査 調査区平面図

不明である。

ピット 平面形状が円形を呈するものと隅丸方形を呈するものが存在する。円形を呈するものは直径0.3~0.5m程度、隅丸方形を呈するものは直径0.6m程度をそれぞれ測る。

掘立柱建物として明確に復元できるものは確認できなかったが、調査区南東隅で検出された隅丸方形を呈する3基のピット(図19に推定線を記入)は芯々距離が約2.0mを測り、掘立柱建物ないし柱列を構成する可能性がある。

その他の土坑・溝・落ち込みは、その性格を判断しうるような様相を見出すことができない。

### (3) 小結

当調査区では、平面図と写真の所在は確認できたが、出土遺物の所在を確認できなかった。そのため、検出した遺構について上述した以上の内容を記述することができない。あえて推測するならば、南側25mに位置する84-4調査(第7節で報告)の様相から、検出した遺構は古墳時代後期の可能性が大きいと考えられる。

## 第8節 94-1調査

### (1) はじめに

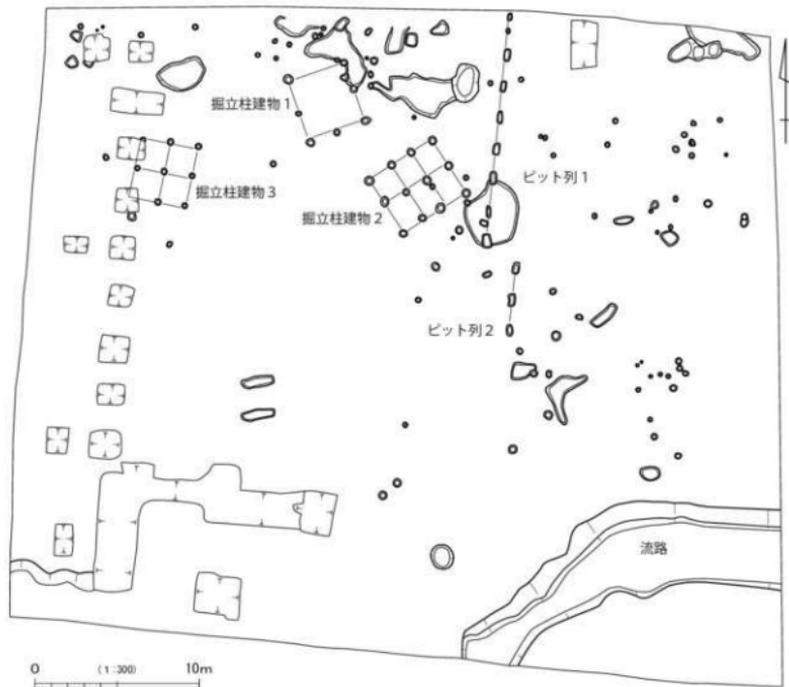


図20 94-1調査 調査区平面図

藤の里二丁目で計画された倉庫の建築に伴って行われた発掘調査である。建物の範囲、東西 47 m × 南北 40 m を対象として調査を行った（調査面積 1,880 m<sup>2</sup>）。

整理段階で平面図と写真の所在は確認できたが、その他の図面や出土遺物の所在を確認することはできなかった。また、平面図中に、標高値や遺構番号が記載されていなかったため、各遺構の深さなどは不明である。

## (2) 遺構 (図 20)

ピット 116 基、土坑 24 基、流路 1 条を検出した。また、ピットの並びから、掘立柱建物 3 棟を検出している。

**掘立柱建物 1 (図 21)** 東西 2 間 × 南北 2 間の側柱建物である。北辺中央の柱穴を欠く。建物の主軸は N-19° -W をとる。柱穴の芯々距離は約 2.0 m を測る。柱穴は直径 30 cm 程度の円形を呈する。

**掘立柱建物 2 (図 21)** 東西 3 間 × 南北 2 間の総柱建物である。建物の主軸は N-34° -W をとる。柱穴の芯々距離は約 1.9 ~ 2.0 m を測る。柱穴は直径 30 cm 程度の円形を呈する。

**掘立柱建物 3 (図 21)** 東西 2 間 × 南北 2 間の総柱建物である。建物の主軸は N-12° -E をとる。柱穴の芯々距離は約 1.8 ~ 1.9 m を測る。柱穴は直径 20 cm 程度の円形を呈する。

**ピット列 1・2** 掘立柱建物 2 の東側で長さ 0.8 m、幅 0.4 m の隅丸長方形形状を呈するピットが列状に並

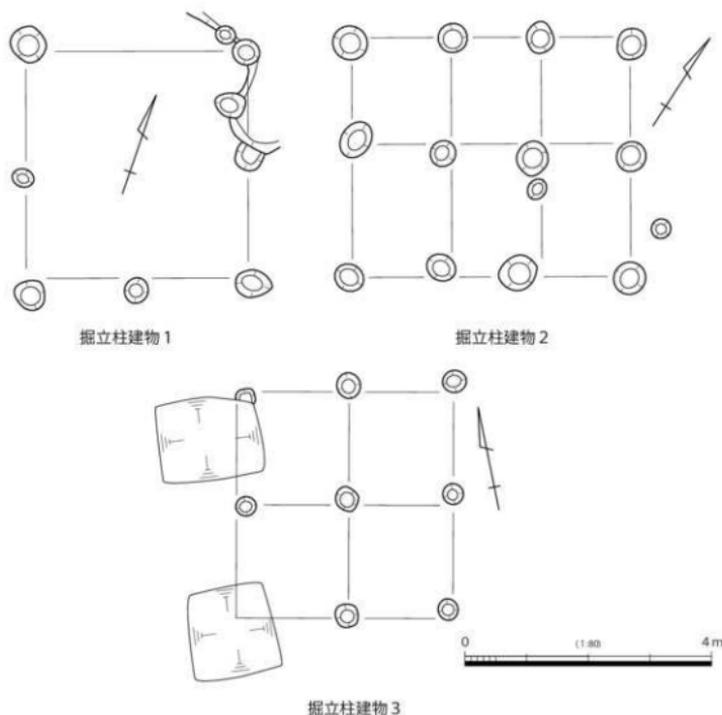


図 21 94-1 調査 掘立柱建物 1・2・3 平面図

んでいる。8基からなる列（ピット列1）と、3基からなる列（ピット列2）の2列が確認できる。ピットの間隔は約1mを測り、ほぼ等間隔であるため、双方が関連した遺構と考えられるが、詳細は不明である。

柵の可能性も考えられようか。

流路 調査区南東部で流路と考えられる東西方向の溝を検出した。長さ20m、幅6.0mを測る。流下方向は不明である。

いずれの遺構もどのような遺物が出土したのか不明なため、時期を判断することができない。

### (3) 小結

当調査区においては、遺構の密度が低い。そのため掘立柱建物3棟を検出することができた。しかし、出土遺物を確認できなかったため、時期を判断することができなかった。建物の主軸が統一されていないことから、時期が異なる可能性も考えられる。

## 第9節 96-1 調査

### (1) はじめに

藤の里二丁目目で計画された倉庫の建築に伴って行われた発掘調査である。南北に二分割して調査を行った。（南側をA区、北側をB区とする）。

A区は東西18m×南北21m、B区は東西16m×南北26mであり、調査面積

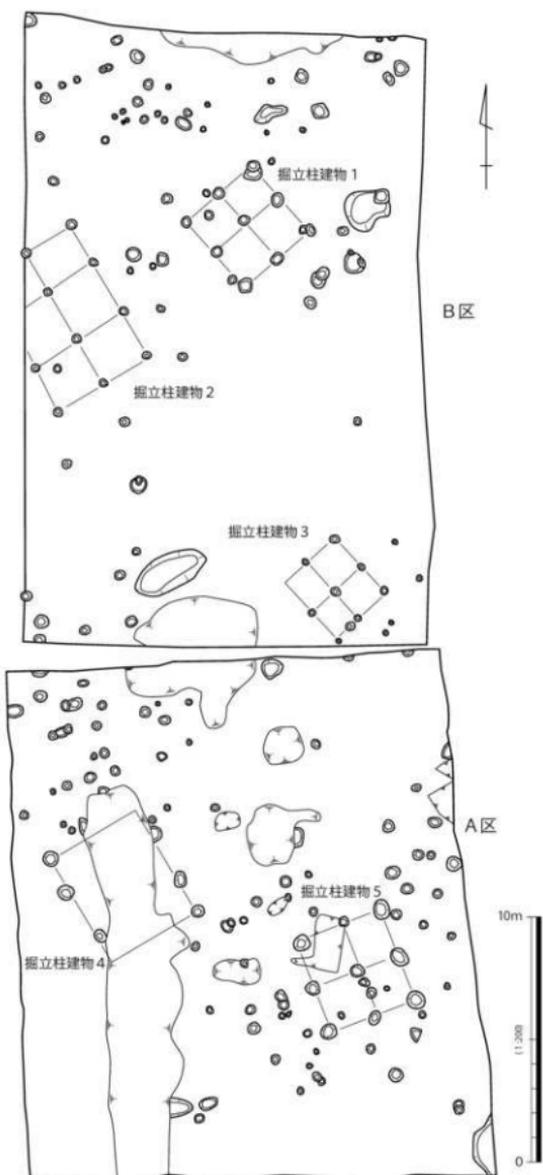


図22 96-1 調査 調査区平面図

は合計794㎡である。図面は平面図のみを確認した。図面にレベルの読み値は記入されているが、基準値が不明なため、高低差は判断できるが、遺構断面に標高値を記すことはできなかった。またその他の図面は確認できなかった。

## (2) 基本層序

土層断面図が確認できなかったが、確認調査時の記録では、盛土1.4m、耕土0.2m、床土0.1m、包含層0.3mである。

## (3) 遺構 (図22)

ピット199基、土坑7基を検出した。また、平面図から掘立柱建物5棟を検出することができた。

**掘立柱建物1 (図23)** B区北側で検出した東西2間×南北2間の総柱建物である。建物の主軸はN-41°-Wをとる。柱穴の芯々距離は約1.8mを測る。ピットの平面形は円形から隅丸方形を呈し、直径0.5m程度、深さ0.3m程度を測る。

**掘立柱建物2 (図24)** B区西側で検出した東西2間×南北3間(東西方向に関しては、調査区外に続く可能性もある)の総柱建物である。建物の主軸はN-30°-Wをとる。柱穴の芯々距離は約2.0mを測る。ピットの平面形は円形を呈し、直径0.45m程度、深さ0.3m程度を測る。

**掘立柱建物3 (図25)** B区南端で検出した東西2間×南北2間の総柱建物である。建物の主軸は

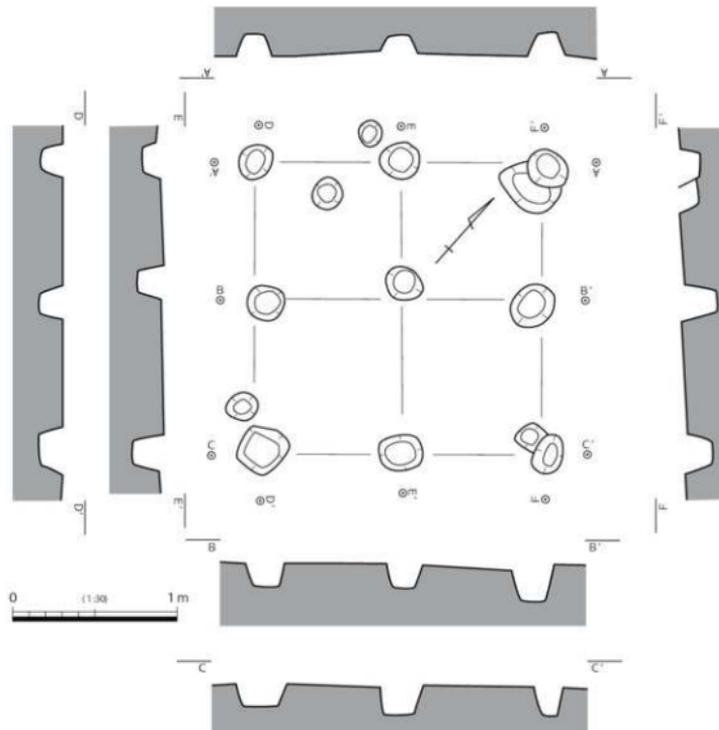


図23 96-1調査 掘立柱建物1平面・断面図

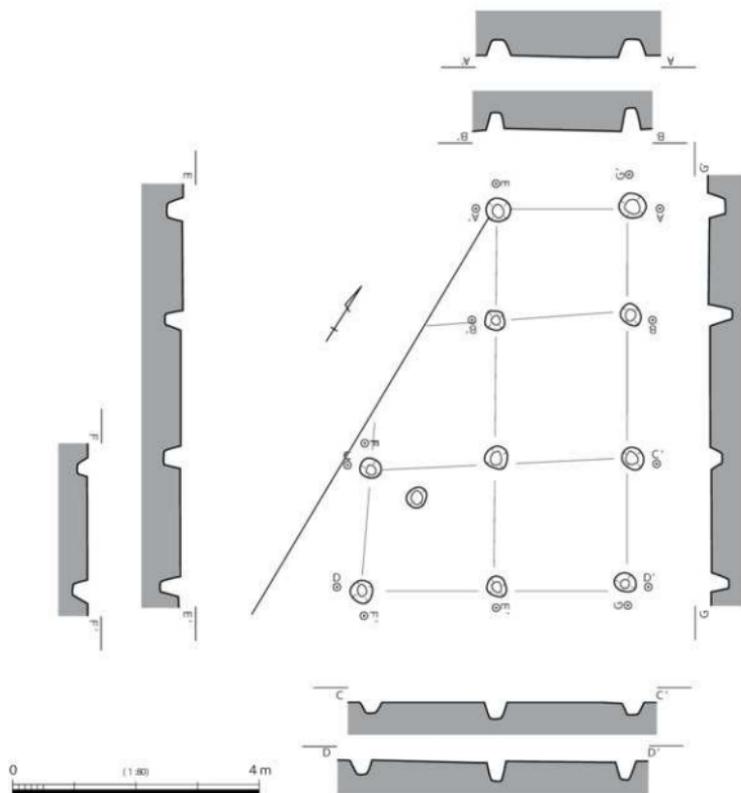


図 24 96-1 調査 掘立柱建物 2 平面・断面図

N-43° - Wをとる。北西隅の柱穴が欠く。柱穴の芯々距離は約 1.5 mを測る。ピットの平面形は円形を呈し、直径約 0.3 m程度、深さ約 0.2 m程度を測る。

掘立柱建物 4 (図 26) A区西側で検出した掘立柱建物である。建物の中央部に攪乱が位置するため、総柱建物か側柱建物かは不明である。当調査区で検出した掘立柱建物は全て総柱建物であるため、この建物も総柱建物と考えて良いかもしれない。

現況で、東西 1 間（おそらく 2 間）×南北 3 間である。建物の主軸は N-30° - Wをとる。柱穴の芯々距離は 1.5 ～ 2.0 mを測る。ピットの平面形は円形を呈し、直径 0.5 ～ 0.6 m程度、深さ 0.2 ～ 0.3 m程度を測る。

掘立柱建物 5 (図 27) A区南側で検出した東西 2 間×南北 2 間の総柱建物である。建物の主軸は N-21° - Wをとる。柱穴の芯々距離は約 2.0 mを測る。ピットの平面形は円形から隅丸方形を呈し、直径 0.7 m程度、深さ 0.5 m程度を測る。

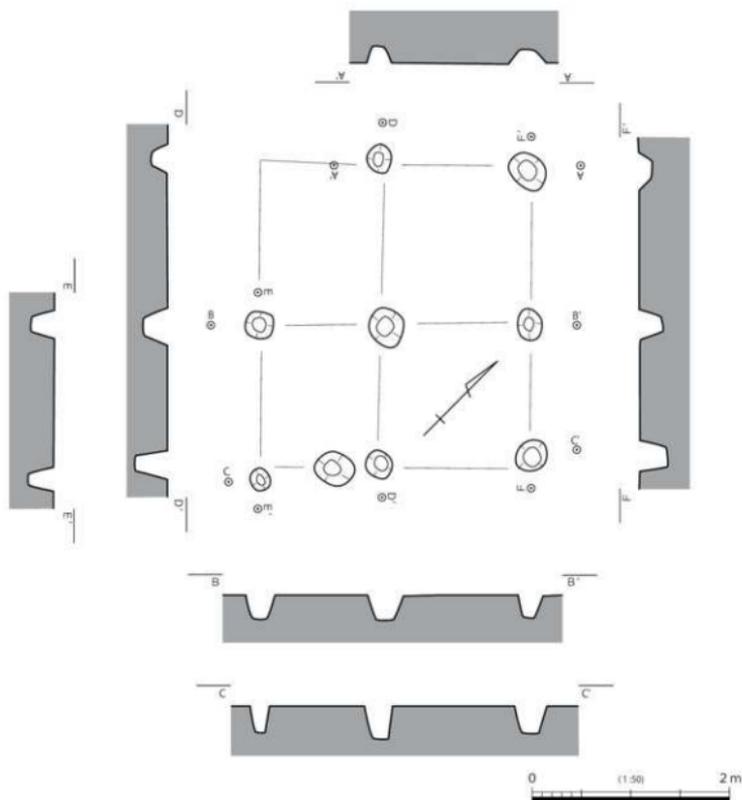


図25 96-1調査 掘立柱建物3平面・断面図

#### (4) 出土遺物 (図28)

当調査区の出土遺物は大半が細片であったため、図化できたものは非常に少なく、包含層出土の2点のみである。

124は石鏃である。残存長2.6cm、幅1.75cm、厚さ0.6cmを測る。重量は3gを量る。基辺が窪む凹基式で、基端の一方が欠損する。石材はサヌカイトである。

125は須恵器杯身である。受部が短く水平に伸び、たちあがり内傾して立ち上がり、口縁端部内面に凹線状の窪みをもつ。TK 43型式である。

#### (5) 小結

当調査区においては、掘立柱建物5棟を検出することができた。ただし、ピットの分布状況から判断して、掘立柱建物1・4のそれぞれ北側に更に1棟程度存在した可能性も考えられる。

検出した各建物の主軸は概ね北西方向を取るが、厳密に同一方向を取るものではない。柱穴の直径や芯々距離など個々の数値においても差が認められるため、同時期に建っていたものではない可能性もあ

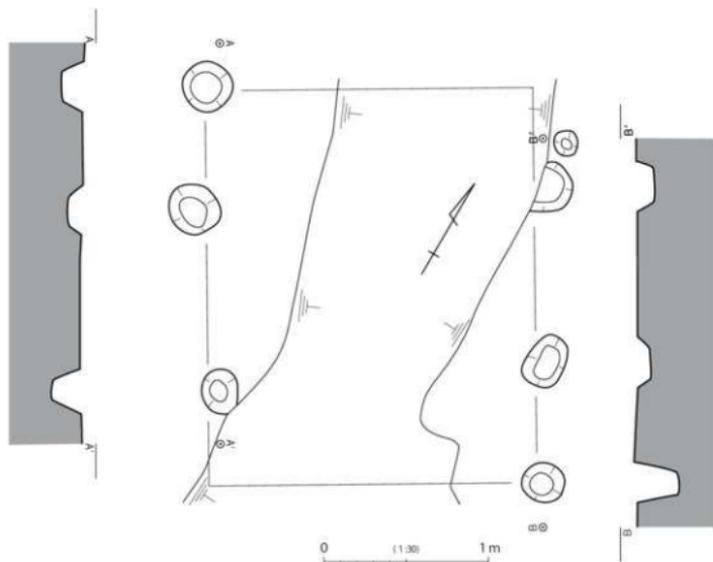


図 26 96-1 調査 掘立柱建物4 平面・断面図

る。また、同時期であっても計画的な建物配置ではないと考えられる。柱穴から出土した遺物はいずれも細片であるため、時期比定には至らない。また図示した須恵器も包含層出土の1点のみであるため、遺構の時期を反映しているのかは判断できない。

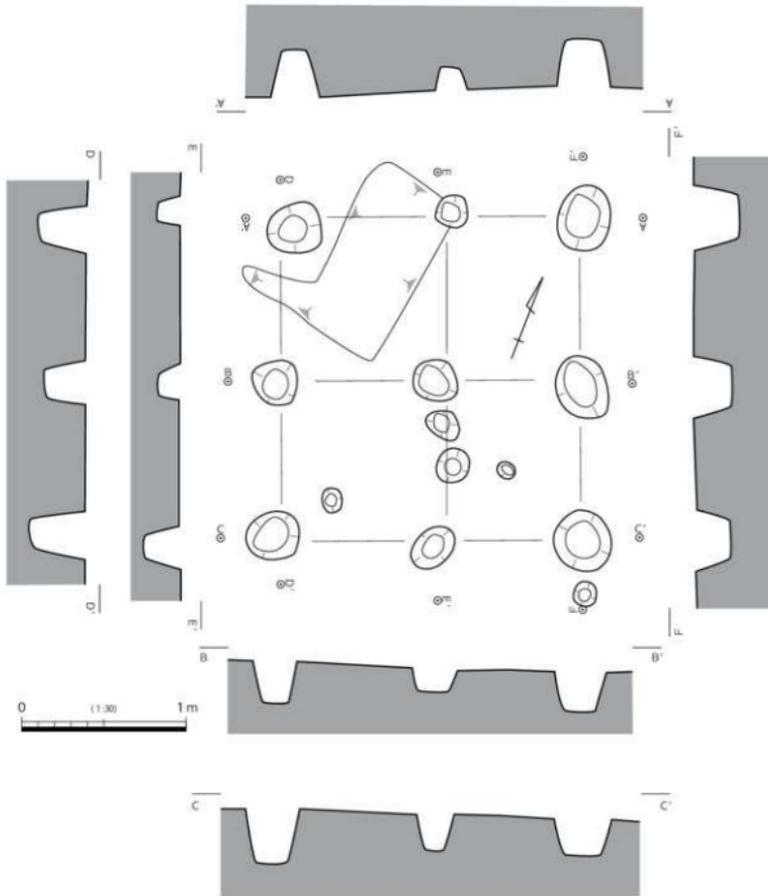


図27 96-1調査 掘立柱建物5平面・断面図

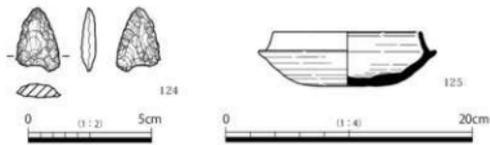


図28 96-1調査 出土遺物実測図

## 第10節 99-2調査

### (1) はじめに

豊川一丁目で計画された研究施設棟の建築に伴って行われた発掘調査である。確認調査の結果、計画建物の西側は勝尾寺川の旧河道と考えられる砂礫層が検出されたため、調査対象とされていない。

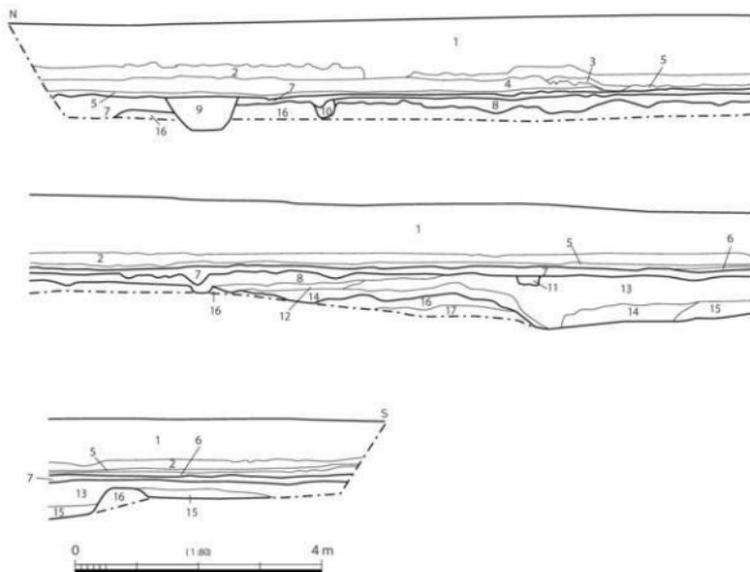
そのため、調査区は計画建物の東側に設定され、東西36m、南北26.5m（調査面積972m<sup>2</sup>）の調査を行った。

『平成11年度発掘調査概報』〔茨木市教育委員会2000〕（以下、『概報』と記載する）に簡略な報告がなされている。

### (2) 基本層序（図29）

大別4層を確認した。1層は盛土（層厚0.9m）、2層は耕土（層厚0.2m）、3層は床土（層厚0.2m）、4層は地山層である。3層下面で遺構面を検出した。なお、原図に標高値が記載されておらず、図中に示すことはできなかった。

### (3) 遺構（図30）



- |                                 |   |
|---------------------------------|---|
| 1. 盛土 (0-1a 層)                  | 10. 7.5YR3/1 黒褐色粘質土 (土器片含む)               |
| 2. 10Y5/1 灰色シルト (1-1a 層・耕作土)    | 11. 2.5Y4/1 黄灰色砂質土                        |
| 3. 10GY5/1 緑灰色機砂 (1-2a 層)       | 12. 2.5Y3/1 黒褐色砂質土 (土器片及び炭化物含む)           |
| 4. 10YR5/3 に近い黄褐色機砂 (2-1a 層・床上) | 13. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土 (土器片含む)               |
| 5. 7.5YR4/4 褐色砂質土 (2-2a 層・床上)   | 14. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土                       |
| 6. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土 (2-3a 層・床上)  | 15. 10YR3/2 黒褐色砂質土                        |
| 7. 7.5YR3/4 暗褐色砂質土 (3-1b 層)     | 16. 10YR4/4 褐色土 (0.5~20cm 大の礫含む) (3-2b 層) |
| 8. 10YR4/3 に近い黄褐色砂質土            | 17. 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂 (3-3b 層)             |
| 9. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土              |   |

図29 99-2調査 東壁土層断面図

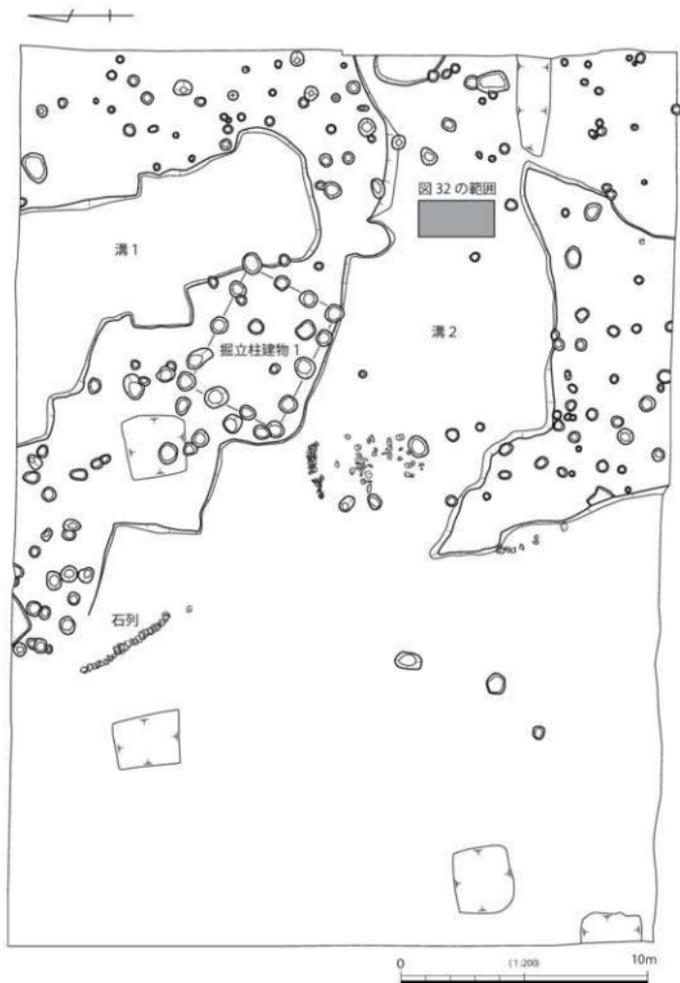


図30 99-2調査 調査区平面図

遺構はビット171基、土坑6基、溝2条を検出した。溝2条は原図に記録されているものであるが、経緯は不明ながら『概報』所収の平面図には記載されていない。しかし、出土遺物の大半が溝1・2出土であるため、今回改めて図示している。溝というよりも落ち込みに近いものであるかもしれない。

平面図にレベルの読み値は記入されているが、基準値が不明である。そのため、高低差は判断できるが、遺構断面に標高値を記すことはできなかった。また各遺構の埋土の様子、出土遺物の有無といった個別情報も不明である。

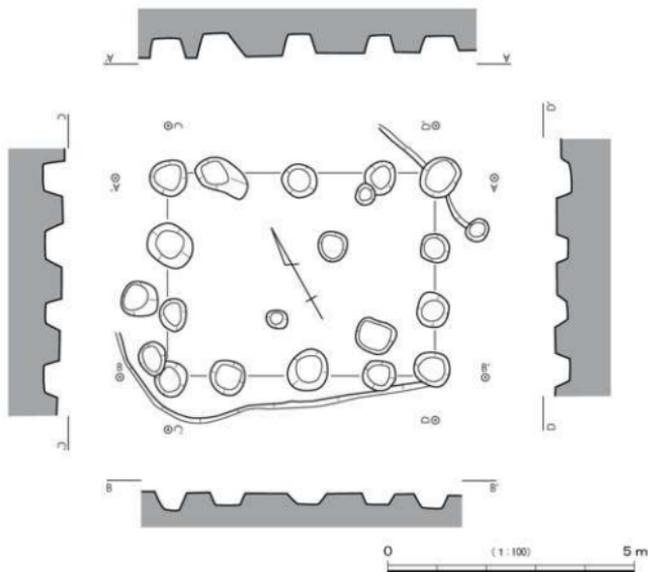


図 31 99-2 調査 掘立柱建物 1 平面・断面図

調査区西側はかなり削平を受けているようで、遺構はほとんど検出されていない。以下では、出土遺物を掲載した遺構と特徴的な遺構について記述する。

**溝 1** 調査区北端から南北方向に延びる。南北12.5m、東西5～10m、深さ0.12mを測る。古墳時代中期の土師器、石製品などが出土している。

**溝 2** 調査区南東部で「L」字状に屈曲する。南北方向12m、東西方向20m、深さ0.07mを測る。極浅い落ち込み状を呈する。西側は削平の影響を受けているのか、どこまでが遺構内であるのか定かではない。

調査区中央部で石がまとまって検出された状態が記録されているが、特に人為的な様相は認められない。溝の屈曲部付近では、遺物が集中して出土している（図32）。主に古墳時代後期の土師器・須恵器が出土している。

**掘立柱建物 1**（図31） 調査区中央部、溝1と溝2の間に位置する。東西4間×南北3間の側柱建物である。建物の主軸はN63°-Eをとる。柱穴の芯々距離は1～1.5mを測る。柱穴の直径は0.6m程度、深さ0.3～0.5m程度を測る。『概報』では2棟を示しているが、柱穴を共有していることから、本報告では1棟の提示に留めた。

**石列** 溝2の西端で、一辺30cm程度の角礫が並べられた状態で検出した。長さ4.5mを測る。写真（PL.9）で見える限り、部分的に2段積まれている箇所も認められる。西側に面を揃えているようにも見受けられ、そうであるなら護岸のような目的で積まれた可能性がある。

#### （4）遺物（図33～38）

包含層出土遺物（図33・34 126～174） 古墳時代後期・飛鳥時代・中世の遺物を図示した。

126～166は須恵器である。126～134は杯蓋である。126・127は口縁端部は丸く取める。TK

43型式である。127は外面に自然軸がかかる。128～131は口縁端部内面が段をもつ。130は外面に自然軸がかかる。TK 209型式である。133・134は口縁部が屈曲する。飛鳥1期である。132は天井部に沈線二条を施し、その間にヘラによる刺突文を2段施す。

135～158は杯身である。135はたちあがりは短く角度を変えて立ち上がる。TK 43型式である。136～152はTK 209型式である。たちあがりは内傾して立ち上がり、口縁端部は丸く収める。140は底部付近に別個体の破片が溶着する。143は気泡が多く見受けられ、表面の凹凸が著しい。148は内面に粘土紐の痕跡が認められる。140・141・143・144・149・152は外面に自然軸がかかり、145は外面受部から内面にかけて自然軸がかかる。153～158はたちあがりは短く内傾し、口縁端部は丸く収める。受け部は斜め上方に立ち上がる。平底気味である。飛鳥1期である。153・154は外面に自然軸がかかる。155・158は外面に火漶が認められる。155は器形に焼成時の歪みが認められる。157は焼成不良で、灰白～淡黄色を呈する。

159は有蓋高杯蓋である。天井部に扁平な摘みをもつ。天井部から口縁部にかけてなだらかに延び、口縁端部は丸く収める。TK 43型式である。

160は杯Gである。底部から屈曲して口縁部が立ち上がる。口縁端部は丸く収める。外面に自然軸がかかる。飛鳥1期である。

161・162は甕である。ともに球形の体部を持ち、頸部は緩やかに外反して開く。体部最大径を測る位置に直径1.4cmの円孔1個を穿つ。162は円孔の上下に沈線を1条ずつ施す。また、口縁部は上方に拡張し、面を成す。頸部にも沈線2条を施し、櫛描波状文を2帯施す。外面口縁部から頸部内面に自然軸がかかる。共にTK 209型式である。163は提瓶である。肩部から口縁部の破片である。片方の把手が残存する。外面に自然軸がかかる。TK 43型式である。

164・165は甕である。164は口縁端部が外方に肥厚する。体部外面にカキメ、体部内面に同心円当て具痕が認められる。TK 10型式である。165は口縁部を下方に拡張する。体部外面にタタキを施し、体部内面に同心円当て具痕が認められる。外面口縁部から頸部に自然軸がかかる。TK 43型式である。166は器台である。口縁端部上端が面を成す。受部外面にカキメを施す。外面に自然軸がかかる。

167は土師器甕である。口縁部は外方へ屈曲して開く。体部外面にハケ、体部内面にケズリを施す。168は土師器把手である。短い角状で、断面は扁平な楕円形を呈する。ユビナデによって整形する。体部にハケを施す。辻編年4段階以降である。

169～172は土師器皿である。169・171・172は底部から口縁部が明瞭な段をもって立ち上がる。

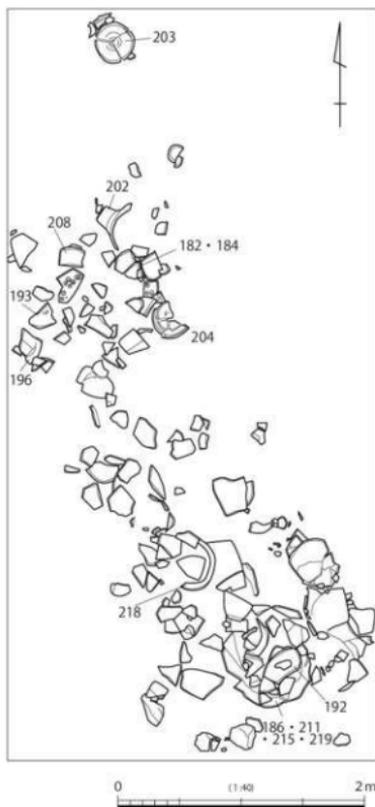


図32 99-2調査 溝2内遺物出土状況図

頸部は緩やかに外反して開く。体部最大径を測る位置に直径1.4cmの円孔1個を穿つ。162は円孔の上下に沈線を1条ずつ施す。また、口縁部は上方に拡張し、面を成す。頸部にも沈線2条を施し、櫛描波状文を2帯施す。外面口縁部から頸部内面に自然軸がかかる。共にTK 209型式である。163は提瓶である。肩部から口縁部の破片である。片方の把手が残存する。外面に自然軸がかかる。TK 43型式である。

164・165は甕である。164は口縁端部が外方に肥厚する。体部外面にカキメ、体部内面に同心円当て具痕が認められる。TK 10型式である。165は口縁部を下方に拡張する。体部外面にタタキを施し、体部内面に同心円当て具痕が認められる。外面口縁部から頸部に自然軸がかかる。TK 43型式である。166は器台である。口縁端部上端が面を成す。受部外面にカキメを施す。外面に自然軸がかかる。

167は土師器甕である。口縁部は外方へ屈曲して開く。体部外面にハケ、体部内面にケズリを施す。168は土師器把手である。短い角状で、断面は扁平な楕円形を呈する。ユビナデによって整形する。体部にハケを施す。辻編年4段階以降である。

169～172は土師器皿である。169・171・172は底部から口縁部が明瞭な段をもって立ち上がる。

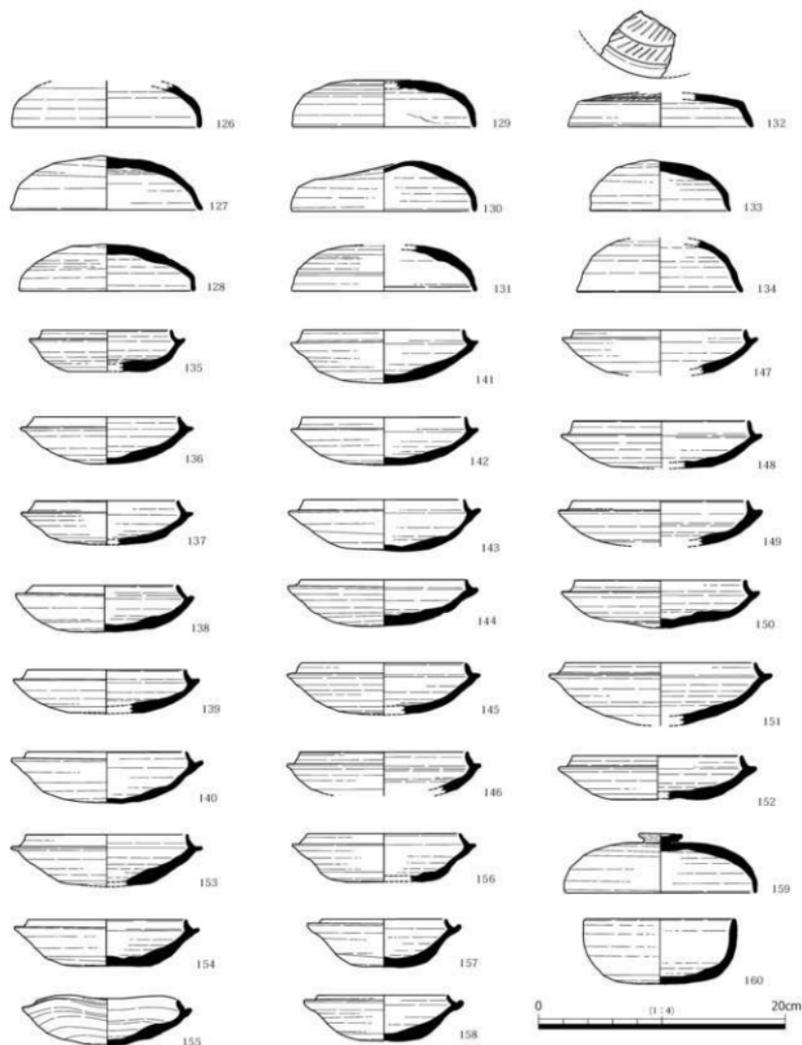


図33 99-2調査 包含層出土物実測図(1)

外面に指頭圧痕が認められる。外面に指頭圧痕が認められる。170は口縁端部に面取りを施す。12世紀頃か。

173は青磁碗である。内外面に釉が厚くかかる。口縁端部が僅かに肥厚する。内外面とも無文である。

174は瓦器碗である。口縁部が外方へ大きく広がる。底面に指頭圧痕が認められる。

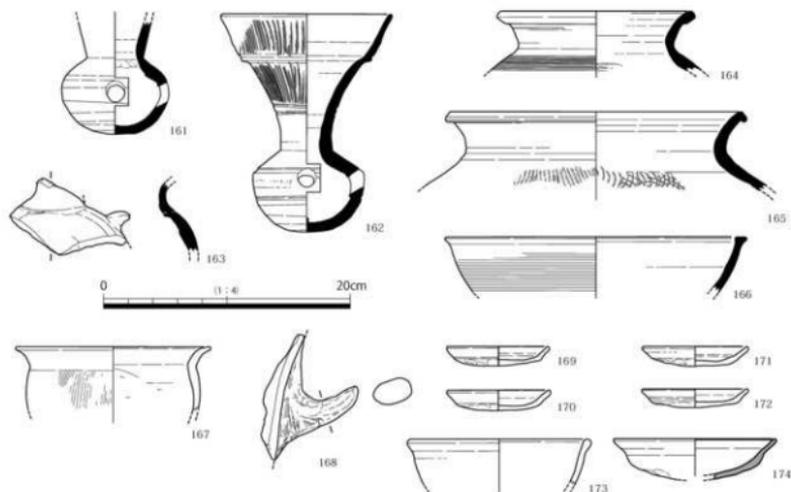


図34 99-2調査 包含層出土遺物実測図(2)

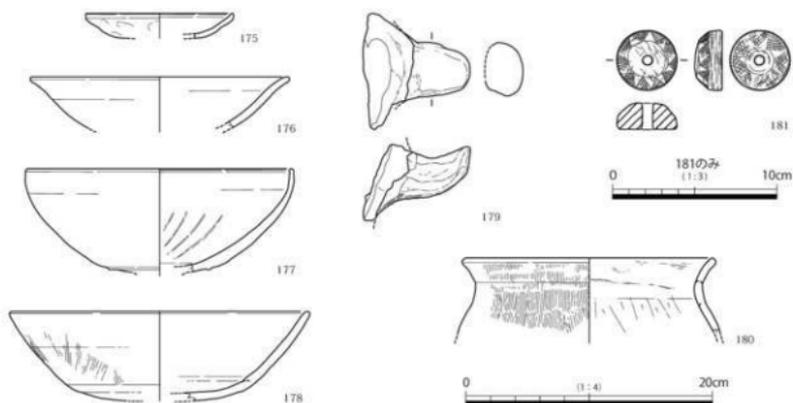


図35 99-2調査 溝1出土遺物実測図

溝1出土遺物(図35 175~181) 175は土師器皿である。口縁端部を上方に摘み上げ、面取りを施す。外面に指頭圧痕が認められる。13世紀初頭の遺物が混入したと考えられる。

176~178は土師器高杯である。176は無稜直口高杯である。浅い皿状の杯部をもち、口縁部が外反する。177・178は有稜椀形高杯である。177は口縁部が内湾する。内面に放射状のミガキを施す。178は口縁部が外方へ直線的にひらく。体部外面にハケを施す。

179は土師器把手である。断面は楕円形状を呈する。ユビナデによって整形する。体部外面にハケを施す。180は土師器甕である。外面及び口縁部内面にハケ、体部内面にケズリを施す。176~180

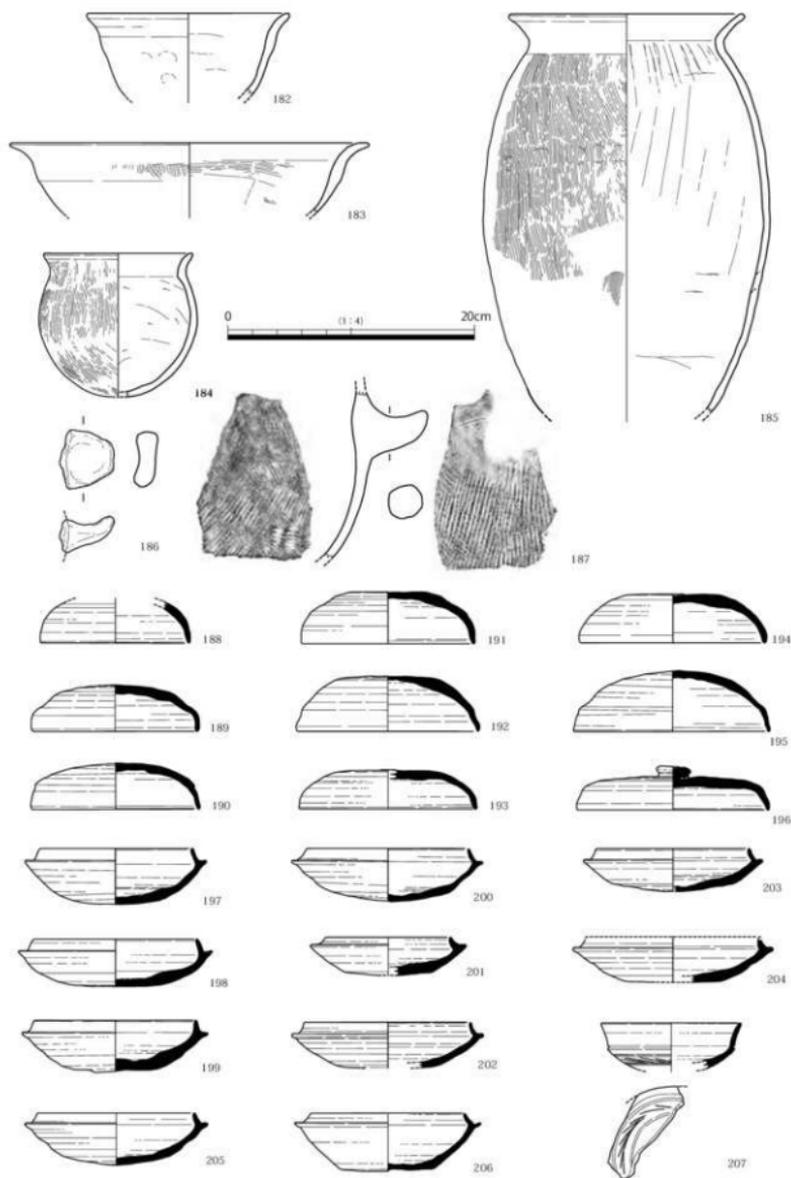


図36 99-2 調査 溝2 出土遺物実測図(1)

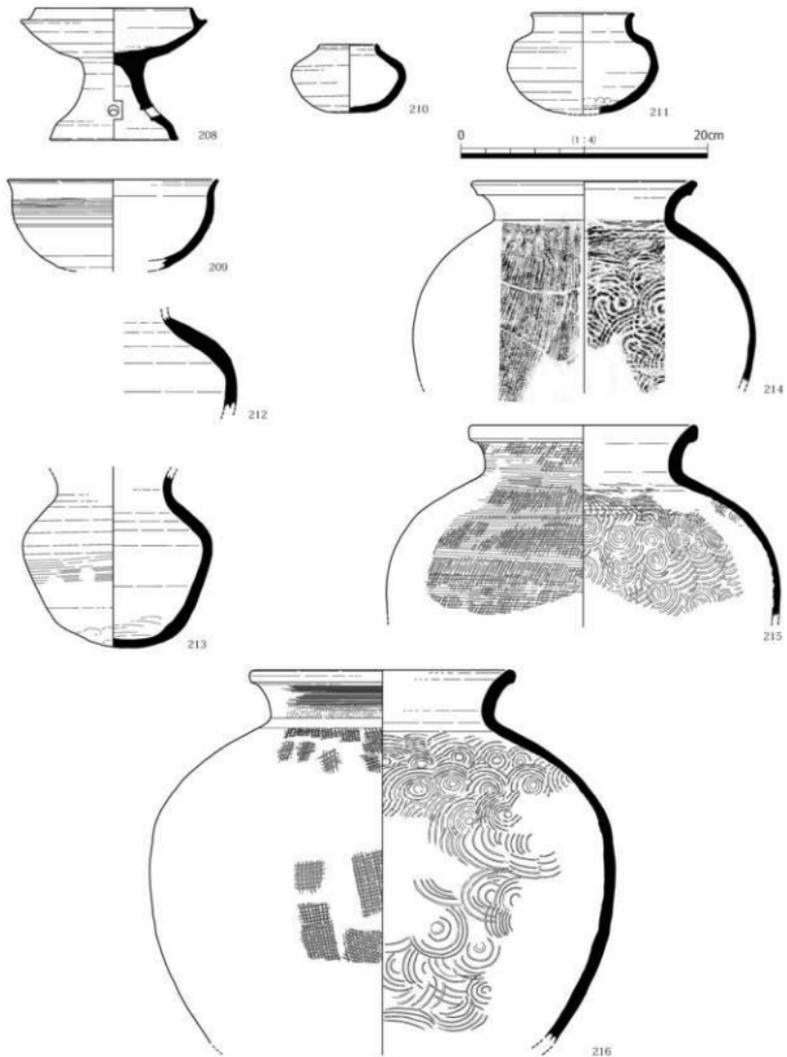


図37 99-2調査 溝2出土遺物実測図(2)

は辻福年3～4段階である。

181は滑石製紡錘車である。直径3.8cm、厚さ1.7cm、中央の孔の直径0.6cmを測る。重量は35gを量る。断面台形状を呈する。側面・底面に鋸歯文を施し、鋸歯文の内側を斜線で充填する。側面及び上面に擦痕が認められる。

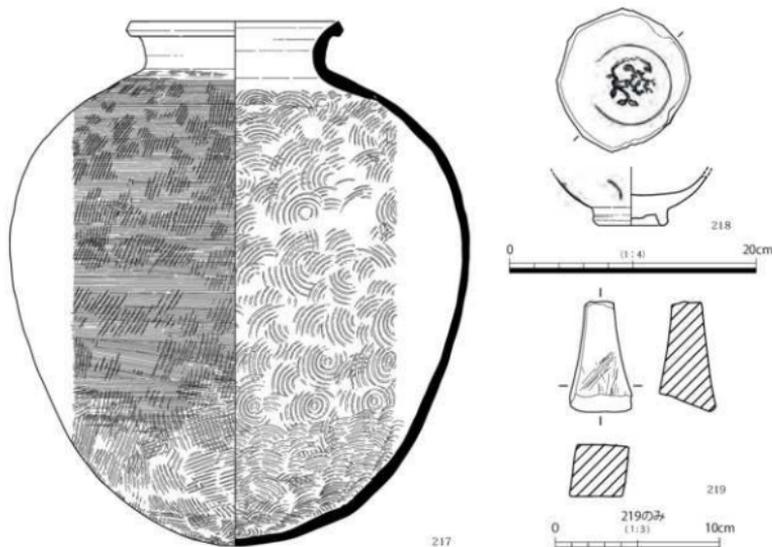


図38 99-2 調査 溝2出土遺物実測図(3)

溝2出土遺物(図36～38 182～219) 182～187は土師器である。182は鉢である。口縁部は外側へ開く。外面に煤が付着する。183は銅である。口縁部は外側へ開く。体部外面にハケ、体部内面にハケ、ヘラケズリを施す。

184・185は甕である。184は口縁部が外方へ開く。外面にハケ、内面にヘラケズリを施す。外面に煤が付着する。185は長胴甕である。体部外面にハケ、体部内面に板ナデを施す。186は把手である。断面形状は中央の窪んだ扁平な四角形を呈する。182～186は辻編年5段階頃である。

187は把手付き甕である。断面形状が円形を呈する把手をもつ。体部外面に格子状タキを施し、体部内面に平行線当て具痕が認められる。調整の様子から、韓式系土器と考えられる。

188～217は須恵器である。188～195は杯蓋である。188はT K 10型式、189～193はT K 43型式、190・191は口縁端部内面に段をもつ。193～195はT K 209型式である。195は口縁部内面に段をもつ。焼成不良で、灰白色を呈する。196は有蓋高杯蓋である。天井部に扁平な円形のつまみをもつ。天井部から口縁部の屈曲は明瞭である。T K 43型式である。

197～206は杯身である。197～200はT K 43型式である。197・198・200はたちあがり内傾する。199はたちあがり垂直に立ち上がり、受部に重ね焼きの痕跡が認められる。201～205はT K 209型式である。201～205は短いたちあがり内傾して立ち上がる。202は外面に自然軸がかかる。206は平底気味である。飛鳥1期である。

207・208は高杯である。共にT K 43型式である。207は杯底部から口縁部が屈曲して立ち上がる。境界に沈線1条を施す。沈線の下に柳描列点文を施す。208は有蓋高杯である。脚柱部に円形透かし孔(直径0.8cm)を3方向に穿つ。杯部は短い受部をもつ。209は器台である。口縁部は外方へ開き、外面にカキメを施す。外面に重ね焼きの痕跡が認められる。

210・211は短頸甕である。いずれも体部は扁平な球形を呈する。210は極めて短い口縁部が直立す

る。211は直立した口縁部が僅かに外反する。共にTK 10型式である。212・213は須恵器壺である。213は口縁部が欠損する。体部下半にカキメを施す。

214～217は甃である。いずれも口縁端部外面に面をもつ。体部内面は同心円当て具痕が認められる。214・215・217は体部外面にタタキ後カキメを施す。216はタタキを施す。TK 43型式である。

218は青磁碗である。外面に蓮弁を描き、内面見込みに回線と花文スタンプを押す。断面台形状の高台をもつ。外面は高台の内面のみ露胎で、高台畳付きまで釉がかかる。高台内に砂粒が溶着する。中世遺物の混入と考えられる。太宰府分類の龍泉窯系青磁碗Ⅱ-c類(13世紀前半)と考えられる。

219は砥石である。長さ6.8cm、幅3.7cm、厚さ3.3cmを測り、重量87gを量る。4面に使用痕が認められ、断面形状は四角形だが、よく擦り減っており台形状になっている。石材は砂岩である。

溝2の出土遺物はTK 10型式から飛鳥1期までの遺物が出土した。TK 43型式からTK 209型式が主体である。

### (5) 小結

当調査区においては、主に調査区東側で遺構を検出した。掘立柱建物は1棟を検出した。溝1および溝2との間に位置しているが、前後関係は不明であり、建物の時期は判断することができない。

遺物は特に溝2に集中して出土している。当調査区は古墳時代後期が中心となる時期と考えられる。

## 第11節 99-5調査

### (1) はじめに

藤の里二丁目で計画された倉庫の建築に伴って行われた発掘調査である。東西37m、南北58mの調査区を設定して調査を行った(調査面積2,146㎡)。北側から44mの地点で南北に分割して調査を行っている。『平成12年度発掘調査概報』[茨木市教育委員会2001](以下、『概報』と記述する)に簡略な報告がなされている。

### (2) 基本層序

土層断面図は作成されていたが、標高値および土層の注記がなされていなかったため、図示していない。空測平面図より遺構検出面は北が高く、南が低くなっており、南北で1.5mの高低差が存在することが確認できる。

### (3) 遺構(図39)

原図と『概報』掲載の平面図では遺構番号が異なっている。遺構番号は全ての遺構に付与されておらず、『概報』作成時に再度付与したと考えられる。遺物との照合を考えるならば、原図に記載されているものを優先するのだが、『概報』のみに番号が認められるものの方が多く、どちらかに統一することができない(これは遺構からの遺物出土量が少なかったことが影響しているのかもしれない)。これ以上の混乱を避けるためにその番号も使用せざるを得ないが、「SK1」などと遺構種別に略号を用いているのは原図に記載されていたもの、「溝1」などと遺構種別に漢字を用いているのは、『概報』に記載されていたものとして区別する。

以下で遺構の個別情報を記述するが、図面から読み取りきれない情報は『概報』に記されているものを踏襲した。

ピット314基、土坑46基、溝13条を検出した。標高の高い北側と比べ、南側は遺構の輪郭が不定形なものが多く、流路などの影響を受けている可能性がある。

ピット 多数検出しているが、掘立柱建物として検出できたのは1棟である。『概報』では東側にもう1棟の掘立柱建物、南側に柵列が示されているが、この建物は大半が調査区外になっていて明確でなく、

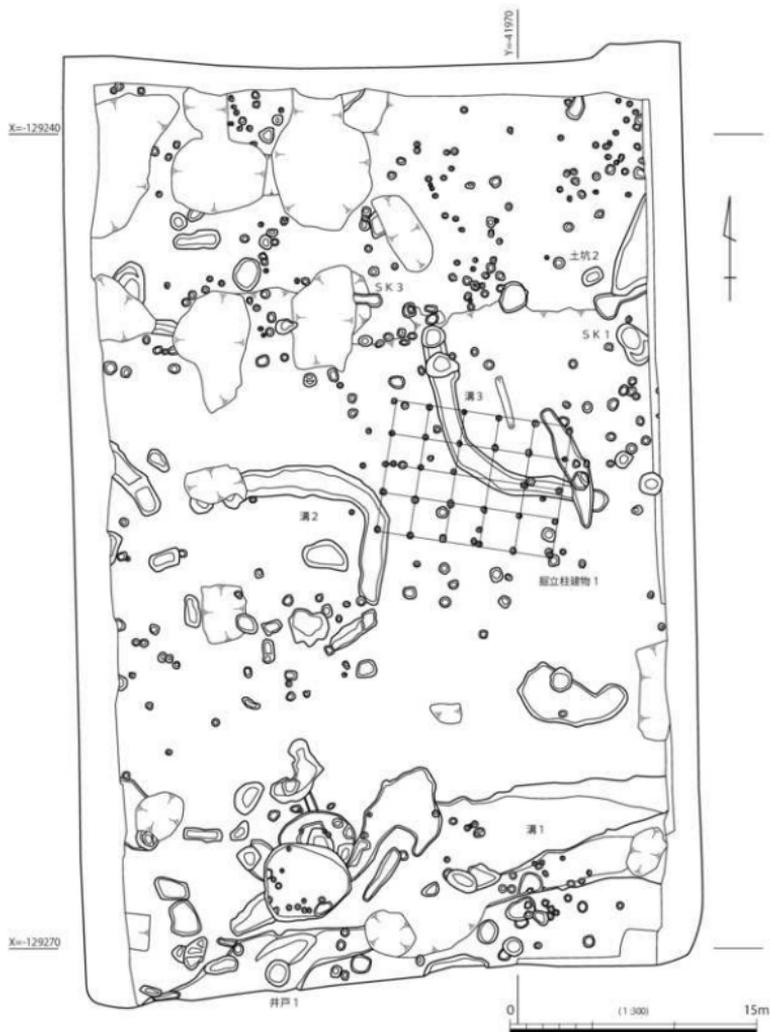


図 39 99-5 調査 調査区平面図

柵列は遺構埋土などの判断材料が不足するため、それぞれ提示を見送った。

掘立柱建物 1 (図 40) 東西 5 間×南北 4 間の総柱建物である。掘立柱建物の主軸は  $N-9^{\circ}-E$  をとる。柱穴の芯々距離は約 2.0 m を測る。柱穴の平面形は円形を呈し、直径 0.3 m 程度、深さ 0.2 m を測る。溝 1 および溝 3 と重複しているが、切り合い関係から掘立柱建物 1 の方が新しいと判断できる。建物面

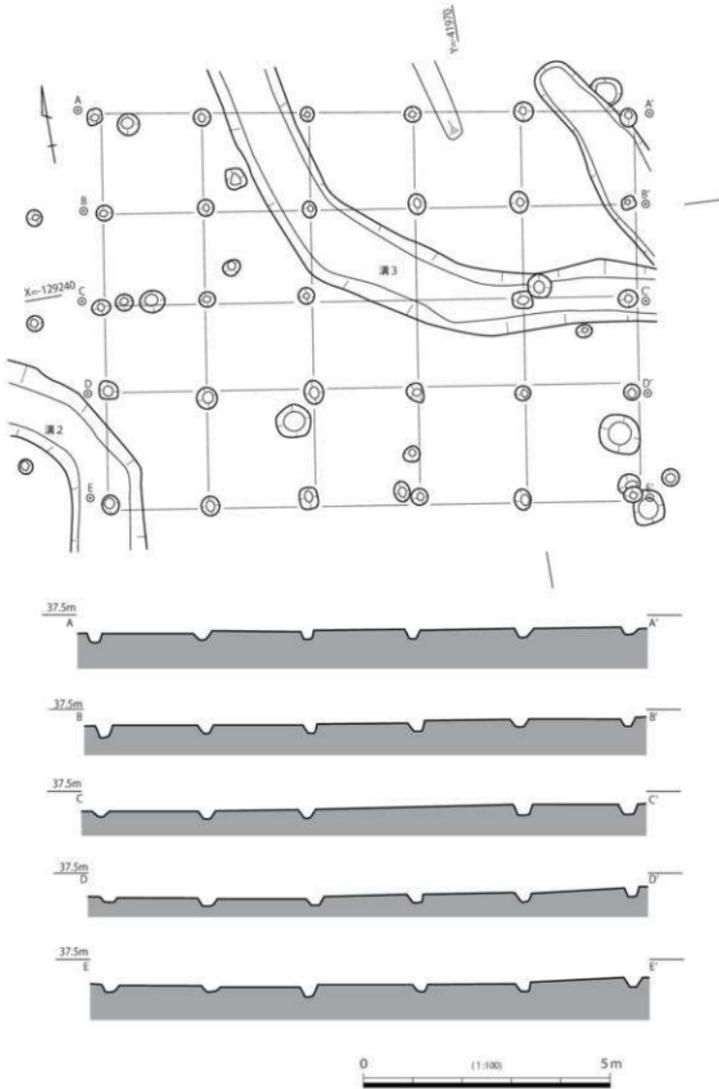


図40 99-5調査 掘立柱建物1平面・断面図

積は01-1調査(第12節で報告)の掘立柱建物1と同じ(共に8m×11mを測る)であるが、柱穴の直径は0.2mほど小さく、柱穴の深さは0.3mほど浅い。深さについては、削平の影響も考えられるが、直径についてはそれほど影響を受けることは考えにくく、元々の規模が異なっていたのであろう。そのため、使用する柱の太さも異なっていたと考えられ、建物全体の印象も異なっていたのではないだろうか。

**SK1(土坑1・図41)** 調査区東側で検出した平面形状が楕円形を呈する土坑である。長径2.6m、短径1.6m、深さ0.9mを測る。埋土は淡褐色土の単層である。遺物は須恵器、土師器が出土している。7世紀前半頃である。

**土坑2** 土坑1の北側で検出した平面形状が楕円形を呈する土坑である。長径1.7m、短径1.3m、深さ0.3mを測る。埋土は焼土、灰の混じった淡褐色土である。ただし、土坑の壁面及び底面は被熱しておらず、土坑内での燃焼行為は無かったと考えられる。遺物は出土していない。

**土坑3** 調査区東端で検出した平面形状が円形を呈する土坑である。直径1.35m、深さ0.7mを測る。埋土は淡褐色土である。遺物は出土していない。

**土坑4** 調査区中央で検出した平面形状が楕円形を呈する土坑である。長径1.4m、短径0.9m、深さ0.4mを測る。遺物は出土していない。

**SK3** 調査区北側中央部で検出した。検出長1.8m、幅0.6m、深さ0.3mを測る。平面形状は溝状を呈する。西側は攪乱に切られる。遺構の東側で礫が集中して出土した。遺物は土師器が出土している。

**溝1** 調査区南部を東西方向に横断する。幅1.15～2.7m、深さ0.15～0.45mを測る。埋土は褐色土の単層である。遺物は出土していない。

**溝2** 調査区中央で検出した「L」字状に屈曲した溝である。東西7.0m、南北6.5m、幅1.3～2.0m、深さ0.25～0.35mを測る。埋土は淡褐色土である。遺物は出土していない。

**溝3** 溝2の東側で検出した「L」字状に屈曲した溝である。東西9.5m、南北8.5m、幅1.55m、深さ0.15

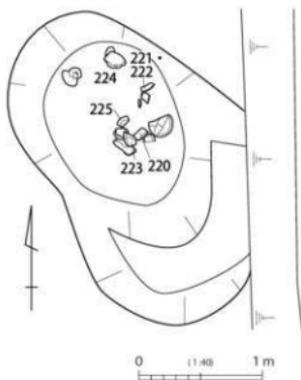


図41 99-5調査 SK1遺物出土状況図

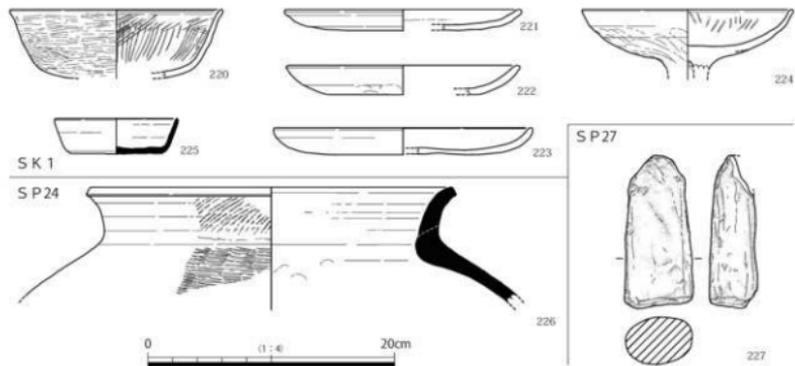


図42 99-5調査 出土遺物実測図

～0.2 mを測る。遺物は出土していない。

**井戸1** 調査区南端で検出した。直径0.5 mの円形を呈する。地山層である礫層の更に下の砂層まで掘削されている。遺物は出土していない。

#### (4) 遺物 (図43)

当調査の出土遺物で図化し得たのは、遺構出土の8点である。S P 24・S P 27は位置が不明である。S K 1出土遺物(220～225) 220～224は土師器である。220は杯Aである。口縁部は外方へわずかに開く。外面に密なヘラミガキ、内面に2段の放射状暗文を施す。221～223は皿Aである。器高1.7～2.4cmと扁平な器形である。224は高杯である。浅い碗状の杯部をもつ。杯部外面にユビナデ、杯部内面に放射状暗文を施す。脚柱部の根元が盛り上がっている。杯底部外面に刺突が認められる。

225は須恵器杯Aである。平らな底部から口縁部が屈曲して立ち上がる。

S K 1の出土遺物は飛鳥Ⅱ期頃と考えられる。

S P 24出土遺物(226) 226は須恵器甕である。口縁部は短く、わずかに外反して開く。口縁端部は面を成す。口縁部外面から体部外面にかけて平行線状タタキを施す。

S P 27出土遺物(227) 227は砂岩製の不明石製品である。長さ12.5cm、幅5.6cm、厚さ3.9cmを測り、重量は407 gを量る。断面形状は楕円形状を呈する。図の上側は一部欠損が認められるが、下面は完存する。

#### (5) 小結

当調査区では、多くの遺構を検出したが、掘立柱建物1棟を検出した以外は、遺構の性格を明らかにすることはできなかった。

平面形態が「L」字形を呈する溝2・3は何らかの区画を目的とした溝や方形周溝築の可能性が考えられるが、遺物が出土していないため、時期や性格を判断することはできなかった。

## 第12節 01-1 調査

### (1) はじめに

藤の里二丁目で計画された倉庫の建築に伴って行われた発掘調査である。東西35 m×南北43 mの調査区(調査面積1,505㎡)を設定して調査を行った。調査は南北に2分割して行っている。『平成13年度発掘調査概報』[茨木市教育委員会2002](以下、『概報』と記載する)に簡略な報告がなされている。

### (2) 基本層序 (図43)

調査区の基本層序は、盛土(層厚1.2～1.5 m・原因に地表面が記載されていないため、図43では図示できていない)、耕土(層厚0.2～0.25 m)、床土(層厚0.05 m)、茶褐色土(包含層)である。遺構面のベース層は黄褐色砂礫層及び黄褐色土である。

### (3) 遺構 (図44)

ピット676基、土坑13基、井戸3基、墓2基、溝10条を検出した。

掘立柱建物は3棟を復元検出した。『概報』では7棟が示されているが、調査区外へ続くものが多いことから、本書では3棟の提示に留めた。ピットの数が非常に多いため、かえって掘立柱建物として捉えることはできていないが、ピットの分布状況から考えて、掘立柱建物1の西側などに更に数棟が存在する可能性がある。

原因に記載されている遺構名と『概報』で使用されている遺構名は異なっているが、本報告では混乱を防ぐために、原因に記載されている遺構名を使用している。以下、特徴的な遺構と出土遺物を掲載し

た遺構を中心に記述する。

掘立柱建物1(図45) 東西4間×南北5間の総柱建物である。建物の主軸はN-5°-Wをとる。柱穴の芯々距離は2.2mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し、直径0.5m程度、深さ0.4~0.7mを測る。

掘立柱建物から北と西にそれぞれ7mの位置に溝(北側はSD1、西側は遺構名が付与されていない)が存在する。北西角で途切れているが、両溝共幅0.5mを測ることから、掘立柱建物1を「L」字状に囲むように掘削されたものと考えられる。長さは東西溝が16m、南北溝が10.5mを測る。

『概報』では、東側の南北溝も含め3方向を囲むと考えられているが、東側のものは幅が0.15mと細いことから、この掘立柱建物に伴うものではないと考えられる。また、『概報』では掘立柱建物1とSE3とが同時併存する可能性があげられているが、建物の柱筋と井戸掘方が重複することは考えにくい。ため、時期差があると考えられる。建物の中央に位置するP26およびSD1から土師器皿が出土しており、12世紀末~13世紀初頭と考えられる。

掘立柱建物2(図46) 東西3間×南北2間の側柱建物である。建物の主軸はN-7°-Wをとる。柱穴の芯々距離は2.0mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し、直径0.5m程度、深さ0.2~0.3mを測る。

掘立柱建物3(図46) 東西2間(南辺は1間)×南北2間の側柱建物である。柱穴の平面形は円形を呈し、直径0.5m、深さ0.1~0.2mを測る。建物の主軸はN-20°-Eをとる。柱穴の芯々距離は1.5m~3.5mを測る。南から2列目の柱穴は東西とも重複しており、掘立柱建物と関連している可能性がある。

井戸 SE1~SE3の3基を検出した。

SE1 調査区北端で検出した。検出幅4.5mを測る。調査区内では掘方の一部を検出したのみで、大

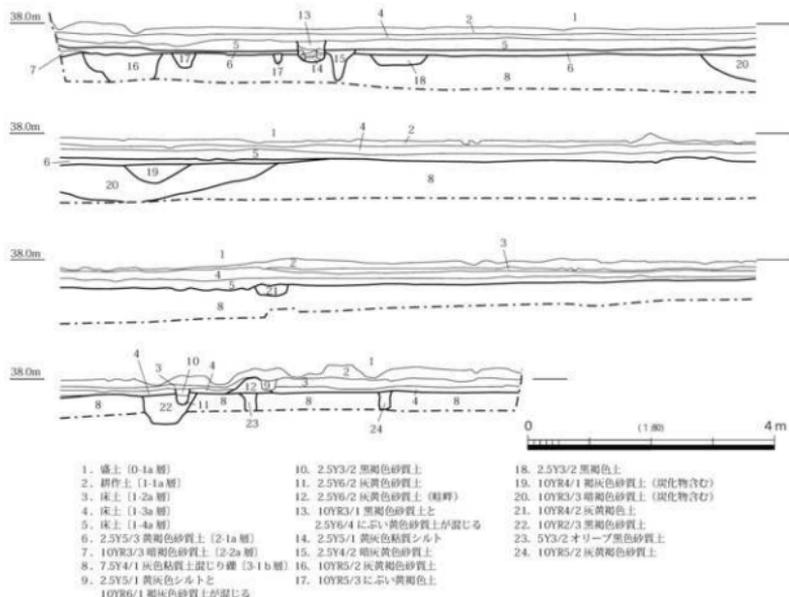


図43 01-1調査 東壁土層断面図

半が調査区外に位置するため詳細は不明である。遺物は土師器・須恵器が出土している。

SE 2 調査区北側で検出した。掘方は直径 2.1 m を測る。井戸側は内径 1.0 m の円筒状に川原石を積み上げて構築する石組円筒形〔宇野 1982〕の井戸である。深さ 2.5 m を測る。遺物は出土していない。

SE 3 調査区中央部、掘立柱建物 1 の東側に位置する。掘方は長径 3.0 m、短径 2.5 m を測る。井戸側は内径 1.2 m の円筒状に川原石を積み上げて構築する石組円筒形の井戸である。深さ 0.7 m を測る。土師器・瓦器・滑石製石鍋・木製品などが出土した。前述したように『概報』においては、掘立柱建物

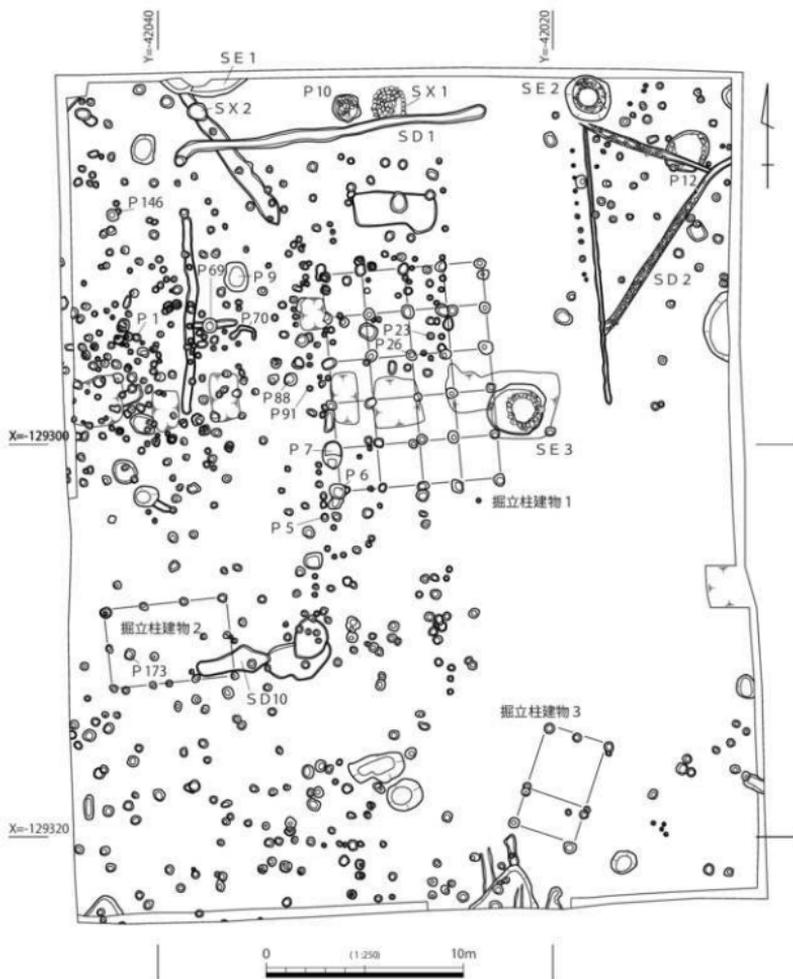


図 44 01-1 調査 調査区平面図

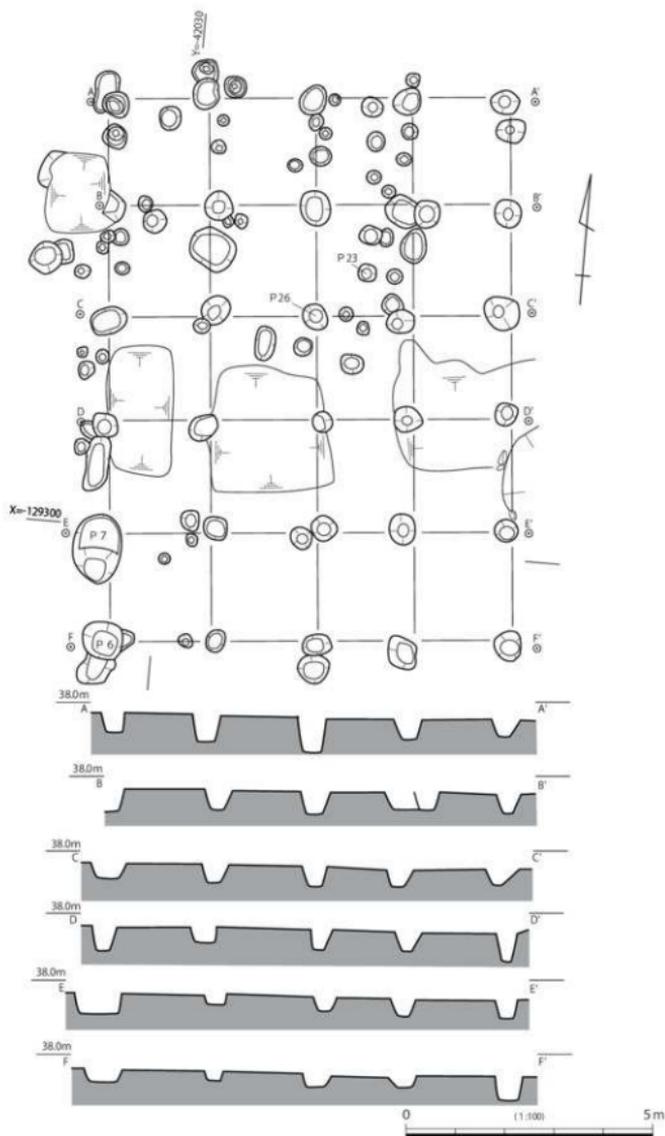
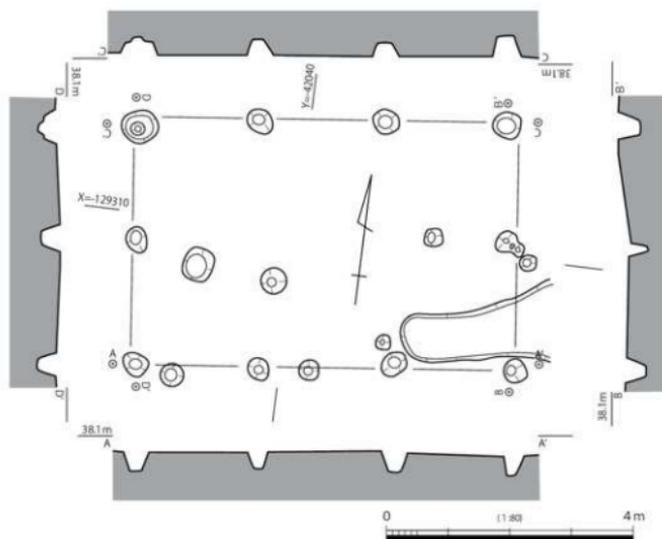
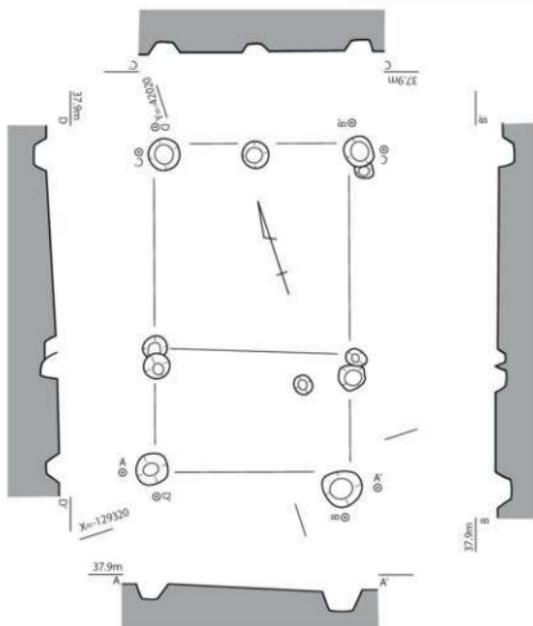


図45 01-1 調査 掘立柱建物1平面・断面図



掘立柱建物 2



掘立柱建物 3

図 46 01-1 調査 掘立柱建物 2・3 平面・断面図

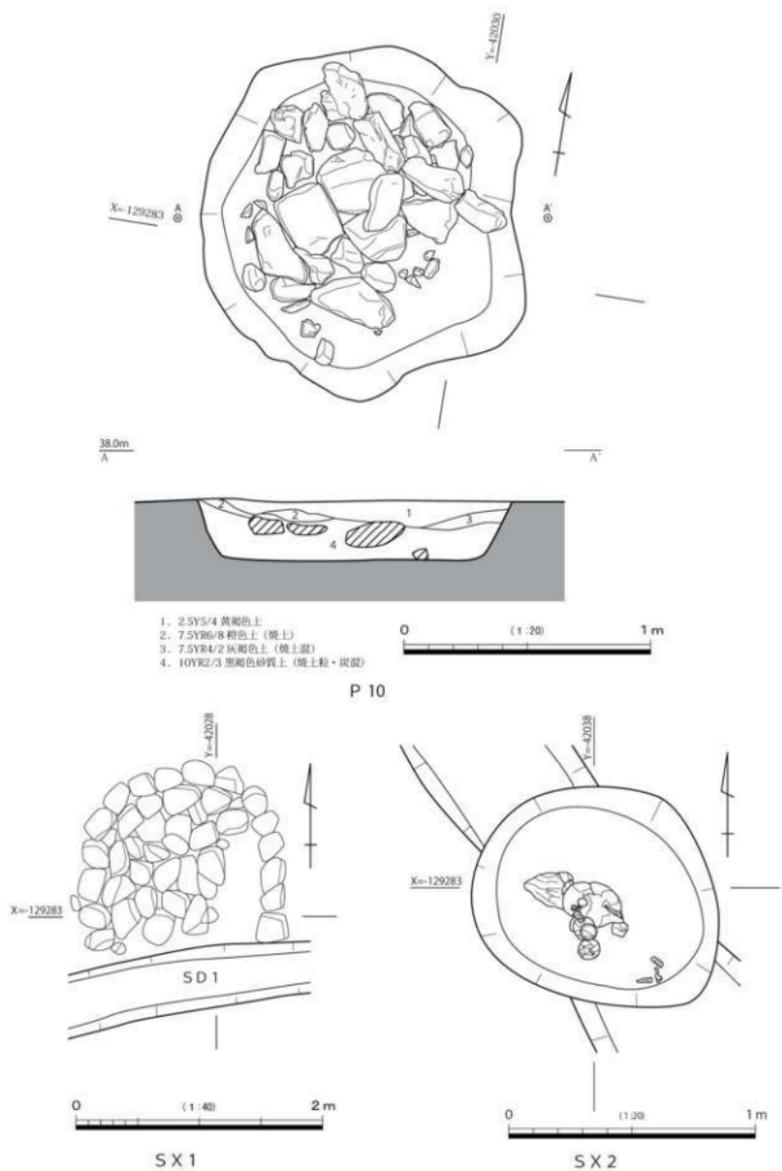


図47 01-1調査 P 10、SX 1、SX 2平面・断面図

1との同時併存があげられているが、建物の柱列と井戸の掘方が重複することは考えにくい。出土遺物の年代は13世紀中頃である。これが井戸の廃絶年代を示していると考えれば、建物が廃絶した後に井戸を掘削した可能性がある。溝SD2調査区の北東隅から南西方向に延びる溝である。東側は調査区外に延びる。検出長11.0m、幅0.5m、深さ0.16mを測る。溝内に礫を充填する。土層断面図(図43)で確認できるように、床土直下から切り込んでおり、他の遺構より新しいことが確認できる。近世頃の耕作に伴う暗渠の可能性が考えられる。SD10掘立柱建物2と重複する。長さ3.7m、幅1.5m、深さ0.11mを測る。西端で土師器皿が集中して出土している。13世紀前半である。

ピットP1調査区西側で検出した。平面形状は円形を呈する。直径0.2m、深さ0.3mを測る。遺物は土師器・瓦器が出土している。12世紀末～13世紀初頭である。

P5掘立柱建物1の南西側に位置する。平面形状は円形を呈する。直径0.3m、深さ0.07mを測る。遺物は瓦器が出土している。

P6・7掘立柱建物1の南西部に当たる。P6の平面形状は楕円形を呈する。長径0.8m、短径0.7m、深さ0.3mを測る。P7の平面形状は楕円形を呈する。長径1.5m、短径1.0m、深さ0.4mを測る。P7のからは土師器・須恵器が出土している。

P7は掘立柱建物1の一部を構成しているが、建物を構成する他のピットより規模が大きく、複数の遺構が切り合っている可能性がある。そのため、図示した出土遺物(12世紀末～13世紀初頭)が掘立柱建物1の年代を直接に示すものであるかは判断し難いが、P7とP26ではほぼ時期差は認められない。

P9掘立柱建物1の西側で検出した。平面形状は楕円形を呈する。長径1.5m、短径1.0m、深さ0.5mを測る。遺物は瓦器が出土している。

P23掘立柱建物1の内側に位置する。平面形状は円形を呈する。直径0.3m、深さ0.2mを測る。遺物は土師器が出土している。13世紀前半である。

P26掘立柱建物1のほぼ中心に位置する柱穴である。平面形状は円形を呈する。直径0.5m、深さ0.3mを呈する。遺物は土師器が出土している。13世紀前半である。

P69掘立柱建物1の西側で検出した。平面形状は円形を呈する。直径0.35m、深さ0.3mを測る。遺物は土師器が出土している。13世紀前半である。

P70 P69の東側で検出した。不規則に屈曲した溝状を呈する。長さ1.5m、幅0.2m、深さ0.2mを測る。遺物は土師器が出土している。13世紀前半である。

P88掘立柱建物1の西側で検出した。平面形状は円形を呈する。直径0.3m、深さ0.3mを測る。遺物は土師器・瓦器・白磁が出土している。12世紀末～13世紀初頭である。

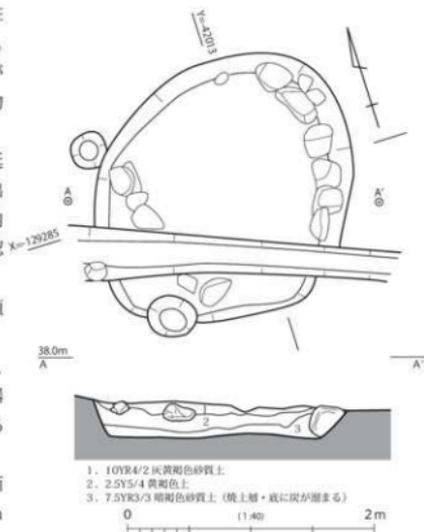


図48 01-1調査 P12平面・断面図

P 91 P 88の南東側で検出した。平面形は円形を呈する。直径0.15 m、深さ0.2 mを測る。土師器・瓦器が出土している。13世紀初頭である。

P 146 調査区北西部で検出した。別のピットに西側を切られ、残存径は0.15 m、深さ0.16 mを測る。遺物は須恵器が出土している。古墳時代後期である。

P 173 掘立柱建物2の内側に位置する。平面形は円形を呈する。直径0.5 m、深さ0.08 mを測る。遺物は土師器が出土している。13世紀前半である。

その他の遺構 SX 1 (図47) SD 1の北側に位置する。直径1.5 mの範囲に人頭大の礫を敷き詰めている。敷き詰めた上面はほぼ平坦になっている。南端がSD 1に切られているように見えるが、元々SD 1に接して造られた可能性も考えられる。遺物は出土していない。

SX 2 (図47) P 10から6.5 m西側に位置する。直径1.0 mの円形を呈し、深さ0.1 mを測る。遺物は土師器・瓦器・青白磁・銅銭などが出土した。蔵骨器は認められないが、火葬墓の可能性が考えられている。断面図が作成されていないので、土坑の被熱状況・埋土の様子は不明である。この場で火葬したか、火葬後に取骨して埋葬したものは不明である。ただし、出土した青白磁合子や銭貨は被熱していないため、火葬後に取められたものであろう。13世紀代と考えられる。

P 10 (図47) SX 1の西側0.5 mに位置する。平面形状は直径1.5 mの不整形円形を呈し、深さ0.2 mを測る。底面に不規則ではあるが、拳大～人頭大の礫を敷き詰める。土坑の壁面・底面及び礫に被熱痕跡が認められた。土坑内で燃焼行為が行われたと考えられる。遺物は出土していない。

P 12(図48) 調査区北東部で検出した。平面形状は楕円形を呈する。長径2.5 m、短径2.0 m、深さ0.3 mを測る。壁際に人頭大の礫を並べる。遺構の底面に焼土と炭が溜まっている。遺物は土師器・瓦器が出土している。土坑内及び礫の被熱の有無が不明であるため、土坑内で燃焼行為が行われたのか、焼土や炭を廃棄したのかは判断できない。

#### (4) 遺物 (図49～53)

SE 3出土遺物 (図49 228～254) 228は須恵器杯蓋である。天井部から口縁部がなだらかに延び、口縁端部は丸く収める。TK 209型式である。229は土師器甕である。口縁部は外方へ屈曲して延びる。内面にケズリを施す。山内氏・河田氏による「裏形製塩土器」と似ていることから、古墳時代前期の製塩土器の可能性が有る〔山内1994・河田1996〕。なお、『宿久庄遺跡2』で報告する11-1調査出土のものとも形状が似る。229は古墳時代前期、228は古墳時代後期である。共に掘方出土のため、井戸の掘削時に混入した遺物と考えられる。

230～239は土師器皿である。いずれも底部から口縁部が屈曲して立ち上がる。235は残りが悪く判読できないが、内面に梵字と思われる墨書が認められる。

240・241は瓦器皿である。241は口縁部に強いヨコナデを施す。内面にミガキを施す。242～248は瓦器碗である。いずれも和泉型である。高台は粘土紐を貼り付けた痕跡程度の高さの低いものである。内面見込みに平行線状暗文を施す。和泉型Ⅳ-1期頃である。243は内面に煤が付着する。

249は青磁碗である。外面に櫛目文、内面に圏線が認められる。太宰府分類の同安窯系青磁碗Ⅲ類である。12世紀中頃～後半である。250は陶器碗である。高台は断面台形を呈する。内面全体及び外面の一部に自然軸がかかる。山茶碗か。

251は須恵器甕である。口縁部は下方に拡張し、端部は面をなす。外面に平行タキを施す。252は甕である。被熱して表面が赤変しており、土師器のようにも見えるが、焼成の悪い須恵器の可能性もある。外面にハケを施す。

253は滑石製石鍋である。外面に断面台形状の鐙が巡る。Ⅲ類-aである〔木戸1995〕。外面の鐙以下に煤が付着する。

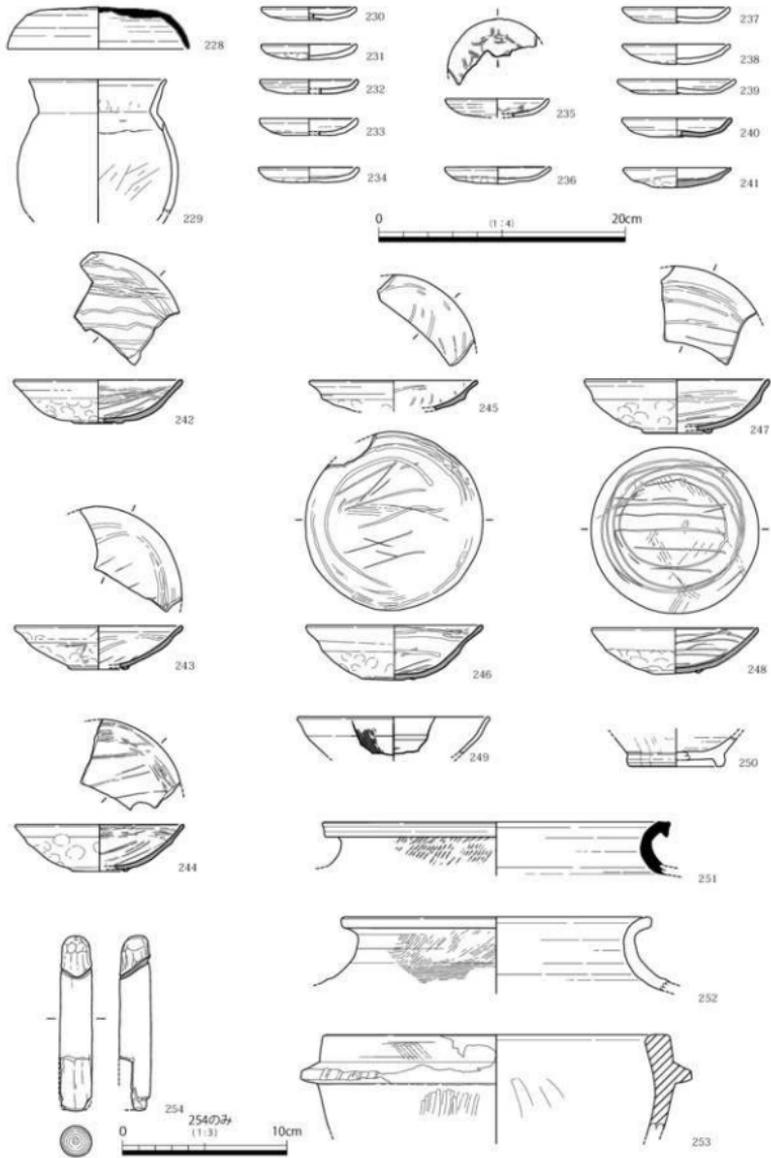


図49 01-1調査 SE3出土遺物実測図

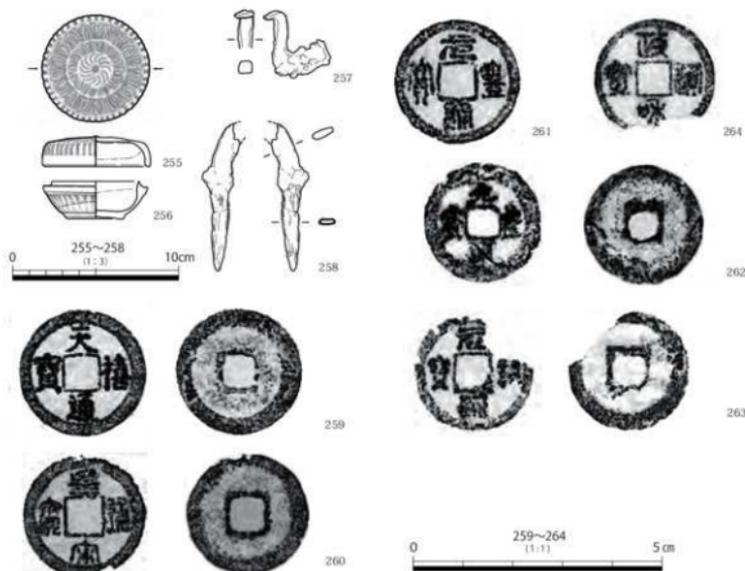


図 50 01-1 調査 SX 2 出土遺物実測図

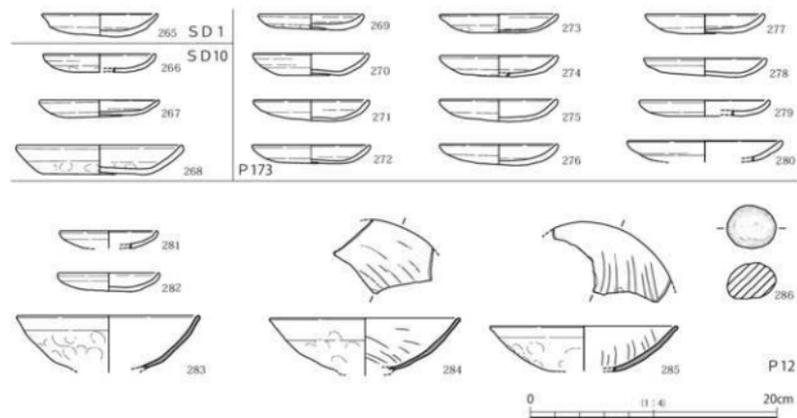


図 51 01-1 調査 各遺構出土遺物実測図 (1)

254 は男根状木製品である。残存長 10.7cm、直径 1.9cm を測る。先端に斜めの袂りを入れて龟头を表現している。水野氏によれば、男根形木製品（オハゼ形）は井戸の湧水を誘う呪術に用いると考えられており〔水野 1985〕、春成氏も水に関連した場所からの出土例が多いとされている〔春成 1996〕。本例も井戸から出土しているため、上記で指摘されているような祭祀に用いたものと考えられる。

各遺物の年代から13世紀中頃に廃絶した遺構と考えられる。

S X 2 出土遺物 (図51 258~267) 255・256は青白磁合子である。255が蓋、256が身である。共に側面に菊弁文を描き、口縁部に緑が認められる。255は甲に菊の複弁花を描く。被熱はしていない。森本分類のⅡ-2であり、13世紀代である〔森本2003〕。257は鉄釘である。断面四角形で、頭部は平らになっている。「く」の字状に折れ曲がる。258は鉄鎌である。断面は扁平な四角形を呈する。刃部が欠損している。259~264は銅銭である。259と261は互いの背面が錆着している。259は天禧通寶(1017年初鑄)である。260は皇宋通寶(1017年初鑄)である。261・262は元豊通寶(1078年初鑄)である。263は元豊通寶ないし元祐通寶(1086年初鑄)である。264は政和通寶(1111年初鑄)である。いずれも北宋銭である。

銭貨の最も新しい初鑄年は政和通寶であり12世紀初頭であるが、合子の年代から13世紀以降の年代が考えられる。

S D 1 出土遺物 (図53 265) 265は土師器皿である。口縁部に強いヨコナデを施し、段が生じる。

S D 10 出土遺物 (図53 266~268) 266~268は土師器皿である。いずれも口縁部に面取りを施す。

P 173 出土遺物 (図53 269~280) 269~280は土師器皿である。いずれも口縁端部に面取りを施す。

P 12 出土遺物 (図53 281~286) 281・282は土師器皿である。共に口縁端部に面取りを施す。283~285は瓦器碗である。いずれも和泉型Ⅲ期である。283は内面が摩滅しているため不明であるが、284・285は内面見込みに平行線状暗文を施す。286は用途不明の球状石製品である。やや壺形であるが、自然石を使用したものであろうか。重量は48gを量る。

P 1 出土遺物 (図53 287~291) 287~290は土師器皿である。いずれも口縁部に面取りを施す。291は瓦器碗である。口縁部は強いヨコナデにより外反する。摩滅のため内面の暗文は不明である。和泉型Ⅲ期である。

P 8 出土遺物 (図53 292・293) 292は土師器皿である。底部中央がやや窪む。口縁部に2段のヨコナデを施し、面取りを行う。293は瓦器碗である。内面に粗いミガキ、見込みに平行線状暗文を施す。断面半円状の低い高台をもつ。和泉型Ⅲ期である。

P 91 出土遺物 (図53 294・295) 294は土師器皿である。口縁部に2段のヨコナデを施し、面取りを施す。295は瓦器碗である。断面台形状の高台をもつ。内面に粗いミガキ、見込みに平行線状暗文を施す。ミガキは密だが、器高が低いことから、和泉型Ⅲ-3期頃か。焼成が悪く黄灰色~灰白色を呈する。

P 146 出土遺物 (図53 296・297) いずれも須恵器杯蓋である。口縁端部内面は段をもつ。T K 10 型式である。

P 88 出土遺物 (図53 298~305) 298~301は土師器皿である。いずれも小皿で、口縁部に面取りを施す。302は瓦器皿である。口縁端部はヨコナデにより、外反する。口縁部内面に密なミガキ、内面見込みに円状の暗文を施す。303・304は瓦器碗である。和泉型Ⅲ-1期である。内面に密なミガキを施す。暗文は残存していないため、不明である。305は白磁碗である。口縁端部外面に玉縁をもつ大宰府分類の白磁碗Ⅳ類である。11世紀後半~12世紀前半である。

P 5 出土遺物 (図53 306) 306は瓦器皿である。底部から口縁部がなだらかに延びる。口縁部にヨコナデを施す。

P 9 出土遺物 (図53 307) 307は瓦器皿である。強いヨコナデにより底部から口縁部の境が稜をもつ。

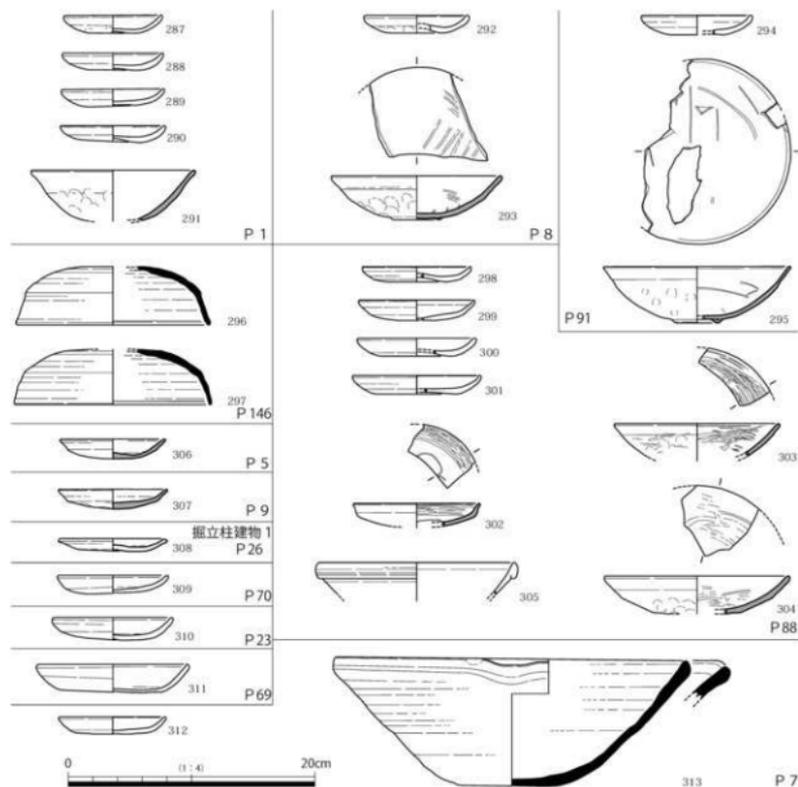


図52 01-1調査 各遺構出土遺物実測図(2)

P 26出土遺物(図53 308) 308は土師器皿である。器高が1cm程度の扁平な器形である。口縁部は外側へむらく。著しく堅緻な焼成で、一見すると須恵器のような色調を呈する。

P 70出土遺物(図53 309) 309は土師器皿である。底部から口縁部が緩やかに立ち上がる。

P 23出土遺物(図53 310) 310は土師器皿である。底部から口縁部が緩やかに立ち上がる。口縁部に面取りを行う。

P 69出土遺物(図53 311) 311は土師器皿である。口縁部は面取りを行う。

P 7出土遺物(図53 312・313) 312は土師器皿である。底部から口縁部が屈曲して立ち上がる。313は東播系須恵器鉢である。片口をもつ。口縁部は上方に拡張する。焼成が著しく悪く、土師質に近い状態である。13世紀初頭である。

包含層出土遺物(図54 314~342) 314は土師器鉢である。外面に沈線5条を施す。把手が剥離した痕跡が認められる。被熱痕跡が認められる。形態的にはTK216~208型式頃の把手付碗である。

315~319は須恵器である。315・316は杯蓋である。315は天井部から口縁部が屈曲して延びる。316は天井部と口縁部の境に稜をもつ。口縁端部内面は面を成す。317は杯身である。受部は斜め上

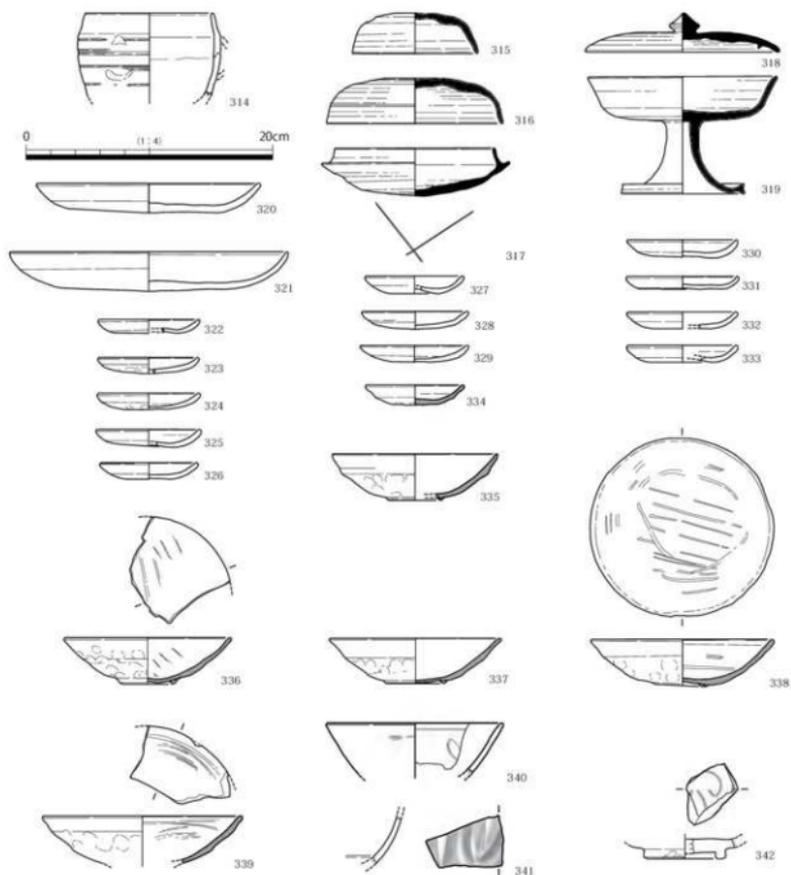


図 53 01-1 調査 包含層出土遺物実測図

方に延び、口縁部は内傾して立ち上がる。底面にヘラによる線刻が認められる。315～317はTK 43型式である。

318は蓋である。宝珠形つまみをもつ。口縁内面に断面三角形のかえりをもつ。319は高杯である。ゆるやかに開く脚部をもつ。端部は上下に拡張し、面を成す。杯部は底面から外方へ緩やかに立ち上がる。平城宮Ⅰ期である。

320～333は土師器皿である。320・321は底部から口縁部が緩やかに立ち上がり、口縁端部は丸く取める。平城宮Ⅰ期である。322～333は口縁端部に面取りを施す。328は強いヨコナデにより、底部と口縁部の境に段をもつ。334は瓦器皿である。口縁部は強いヨコナデによって段をもつ。

335～339は瓦器椀である。いずれも粘土紐を円形に貼り付けた低い高台をもつ。335は外面口縁部下に突線状の段が生じている。336・338・339は内面に粗いミガキを施す。335・337は摩滅のた

め内面の様子は不明であるが、336・338 は見込みに平行線状暗文を施す。和泉型Ⅲ期である。

340～342は青磁碗である。340は内面に劃花文を施す。太宰府分類の龍泉窯Ⅲ-1B類である。13世紀中頃～14世紀初頭である。341は外面に蓮弁文、内面に圏線を施す。他のものと異なり青色が強い釉がかかる。342は断面四角形状の高台をもつ。内面見込みに花文の可能性のある刻線が認められる。高台内面は露胎である。大宰府分類の龍泉窯青磁浅形碗（12世紀中頃～後半）か。

### (5) 小結

当調査区では、主に12世紀後半から13世紀初め頃にかけての遺構・遺物を確認した。特に掘立柱建物1は北と西の2方向を溝で区画された大規模な掘立柱建物である。宿久庄遺跡に位置した中宮職領宿久御厨などの荘園に関連する遺構の可能性もある。

また、井戸（SE3）は掘立柱建物の廃絶後に掘削された可能性が考えられる。さらに、掘立柱建物1の北側で検出した石組遺構（SX1）や火葬墓（SX2）は、互いに関連するものかは不明であるが、掘立柱建物の後の時期に造られた可能性がある。

## 第13節 04-1調査

### (1) はじめに

藤の里二丁目で計画されたコミュニティセンターの建築に伴って行われた発掘調査である。東西27m×南北16mの範囲で調査を行った。調査面積は432m<sup>2</sup>である。『平成16年度発掘調査概報』〔茨木市教育委員会2005〕（以下、『概報』と記載する）に簡略な報告がなされている。

### (2) 基本層序

基本層序については、『概報』の記述を基にする。

層序は1. 盛土（層厚約0.3m・北半部のみ）、2. 耕土（層厚約0.2～0.25m）、3. 淡黄色土（床土・層厚約0.05m）、4. 淡黄褐色土（層厚約0.2～0.25m）、5. 褐色土（包含層・層厚約0.35～0.45

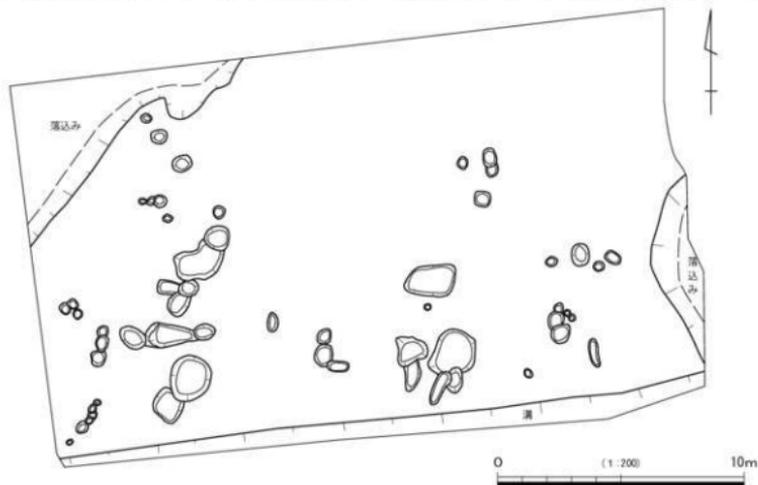


図54 04-1調査 調査区平面図

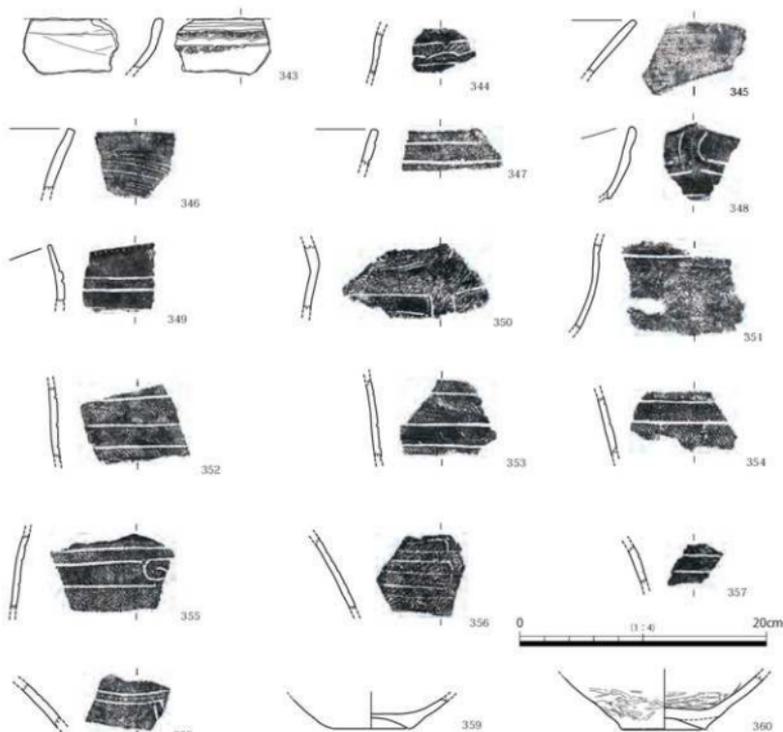


図55 04-1調査 出土遺物実測図(1)

m)、6. 黄濁色土(遺構面)であった。遺構面は北西から南東に向かって下がっている。

### (3) 遺構(図54)

溝 1条、土坑 20基、ピット 36基、落込み 2基の遺構を検出した。

溝 調査区の南端を東西方向に延びており、北肩を検出したに留まる。検出幅0.86~1.15m、深さ0.06~0.16mを測る。遺物は土師器・須恵器・瓦器が出土している。

土坑 平面形状が円形・楕円形・不整形のものがある。

ピット 直径0.18~0.35mを測る。出土遺物から古墳時代と中世のものに分けることができたようだが、遺構番号が不明なため検証する術がない。また、掘立柱建物を構成するようなまとまりを把握できるものは認められない。

落込み 調査区の東端と北西部で検出しているが、共に調査区外に延びている。深さは0.05~0.07mを測るが、下端が破線で表現されていることから、完掘されていない可能性がある。遺物は出土していない。

### (4) 出土遺物

包含層出土遺物(図55・56 343~370) 縄文時代後期中葉、古墳時代中期~後期、中世の遺物が出

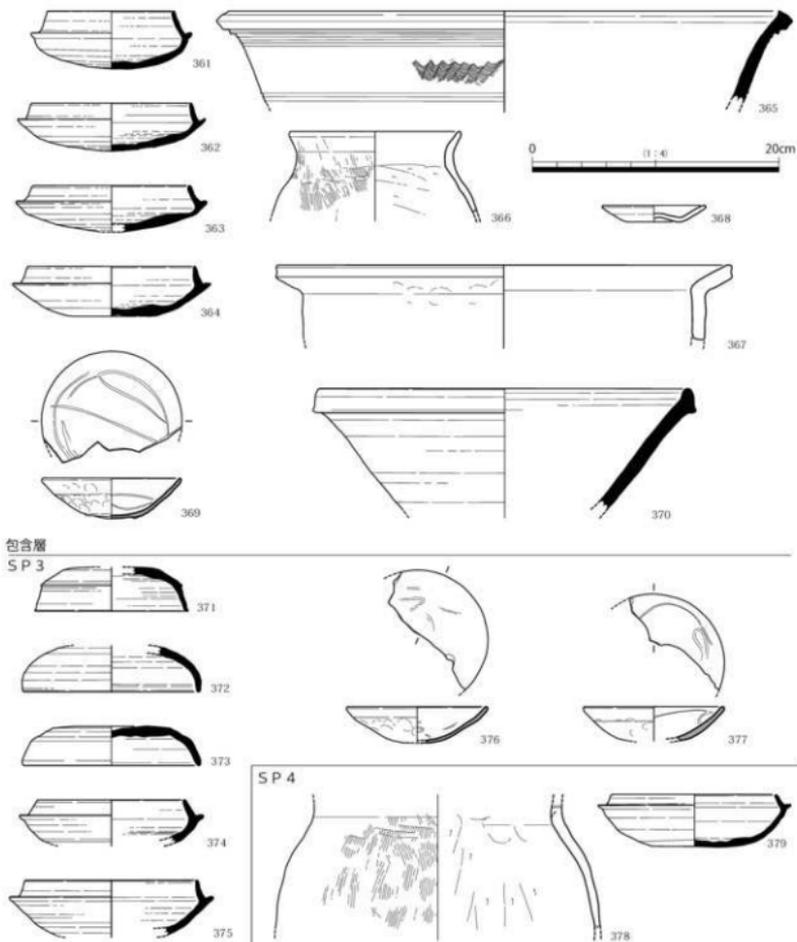


図 56 04-1 調査 出土遺物実測図 (2)

土した。

縄文時代の遺物(図55 343~360) いずれも縄文時代後期中葉と考えられる。343・344は浅鉢である。共に口縁部下に沈線2条と単節斜縄文R Lを施す。その下に波状の沈線、及び沈線1条と単節斜縄文R Lを施す。

345~360は深鉢である。345は無文の口縁部である。346は外面に条痕を施す。347は口縁部直下に単節斜縄文R Lを施し、下位に沈線2条を施す。348は波状口縁である。口縁端部に刺突文を施す。沈線2条で縦方向に弧を描き、弧の部分に横方向の刺突文を施す。弧状の沈線の下端に水平方向の沈線を施す。349は波状口縁である。口縁端部に刺突文を施し、体部に沈線2条を施す。350は沈線で四

角形の区画を形成し、区画の上に単節斜縄文 R L を施す。351 は上部に沈線 1 条を施し、単節斜縄文 R L を施す。353～354 は沈線 2～3 条を施し、沈線間に単節斜縄文 R L を施す。355 は沈線 3 条を施し、2 条目に垂下する渦巻き状の沈線を施す。沈線間に単節斜縄文 R L を施す。356 は磨減が著しいが、沈線 7 条を施す。縄文を施しているかは定かではない。357 は沈線 2 条を施し、沈線の上に刺突文を施す。358 は横方向の沈線 2 条を施し、2 条目の沈線から縦方向の沈線 2 条が延びる。359・360 は中央部が窪んだ上げ底状の底部である。360 は外面及び内面にミガキを施す。

古墳時代の遺物 (図56 361～366) 361～364 は須恵器杯身である。361 は受部が厚く、たちあがりは長く、内傾して延びる。深い器形を呈する。MT 15 型式である。362～363 は口径が大きく、浅い器形を呈する。たちあがりは内傾して立ち上がる。TK 43 型式である。365 は須恵器器台である。口縁端部は外側に拡張し面を成す。口縁部下に断面三角形の突帯をもつ。頸部に櫛描波状文と、その上側に 2 条、下側に 1 条の沈線を施す。366 は土師器甕である。口縁部は短いが外反する。外面にハケ、内面にケズリを施す。

中世の遺物 (図56 367～370) 367 は土師器甕である。ほぼ直立する体部から口縁部が屈曲して延びる。端部は面を成す。368 は土師器皿である。底部中央が上げ底状に窪む。369 は瓦器椀である。形骸化した低い高台をもつ。内面見込みに「の」字状の暗文を施す。体部外面に指頭圧痕が認められる。和泉型 IV-1 期である。370 は東播系須恵器鉢である。口縁端部は上下に拡張する。口縁部外面に施軸する。13 世紀中頃である。

SP 3 出土遺物 (図56 371～377) 古墳時代後期中世の遺物が出土しているようである。混入か遺構番号の混乱に起因するものであるのかは定かではない。

371～373 は須恵器杯蓋である。371 は天井部と口縁部の境に稜をもち、口縁端部は面をもつ。MT 15 型式である。372 は口縁部内面に段をもつ。373 は天井部の中央が窪む。372・373 は TK 43 型式である。374・375 は須恵器杯身である。たちあがりは内傾し、端部は丸く収める。TK 10 型式である。376・377 は瓦器椀である。丸底で高台は認められない。磨減するが、内面見込みに暗文がかりうじて認められる。和泉型 IV-2～IV-3 期である。

SP 4 出土遺物 (図56 378・379) 378 は土師器甕である。体部から頸部にかけて残存する。外面にハケ、内面にヘラケズリを施す。379 は須恵器杯身である。たちあがりは短く、内傾する。TK 43 型式である。

## (5) 小結

今回の報告では、遺構や層序については、『概報』の記載を踏襲し、遺物の報告に主眼をおいた。出土遺物を概観すると、古墳時代中期と 12 世紀末から 13 世紀初頭にかけての遺構が存在したと考えられる。また、一定量の縄文後期中葉の土器が出土している。北西 50 m 地点の 78-1 調査でも縄文土器が出土していることから、狭い範囲ではあるが、縄文時代の集落が存在した可能性が考えられる。また、この時期には近接する粟生間谷遺跡でも土器が出土しており、周辺で縄文時代の人々が活動していたことが窺われる。

## 第 14 節 07-1 調査

### (1) はじめに

藤の里二丁目で計画された工場の建築に伴って行われた発掘調査である。南北に二分割 (北側 420.5 m<sup>2</sup>・南側 608 m<sup>2</sup>、合計 1,029 m<sup>2</sup>) して調査を行っている。

調査時には「北」・「南」と呼称され、遺構名は各調査区、各遺構面毎にそれぞれの遺構がその種類ご

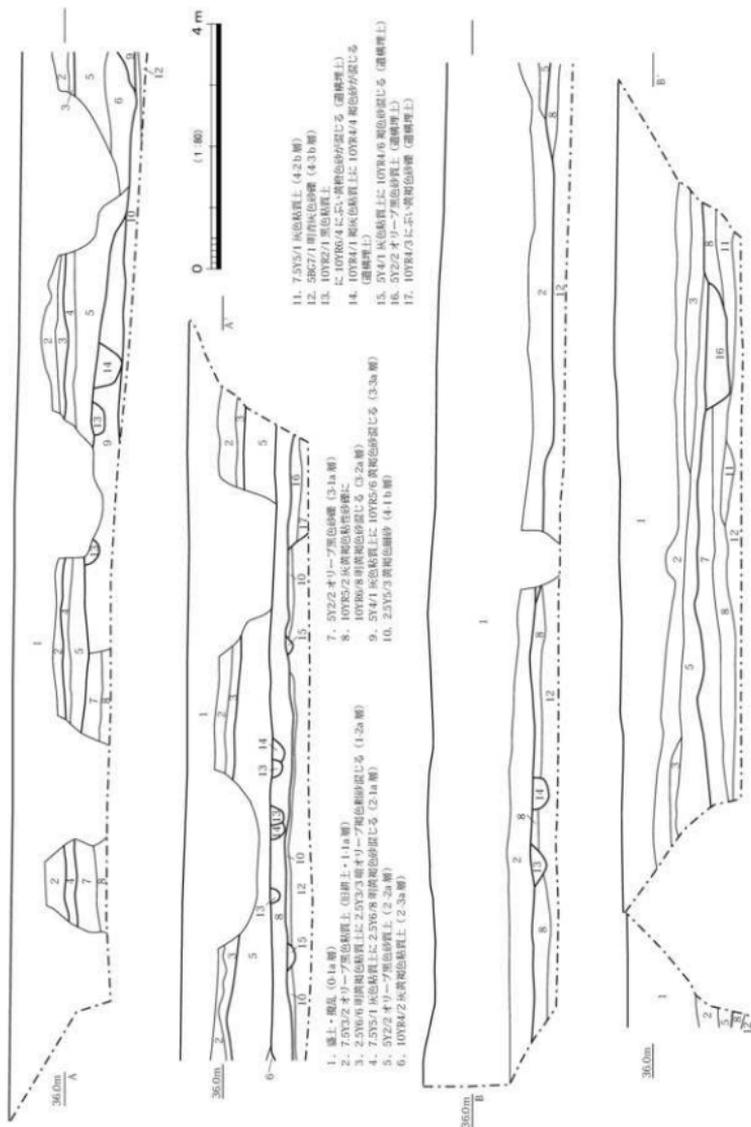


図 57 07-1 調査 土層断面図

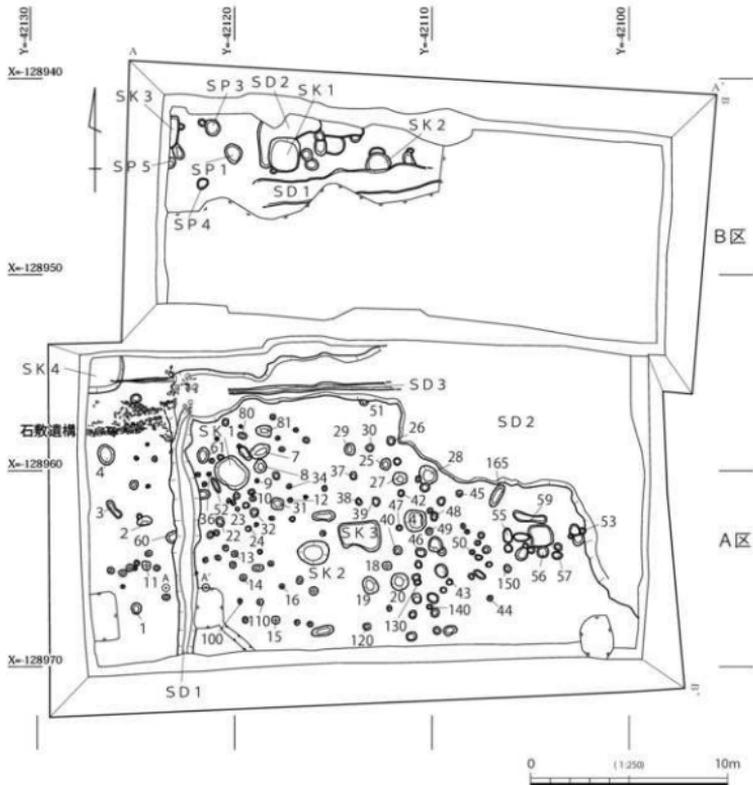


図58 07-1調査 第1遺構面平面図

とに1から番号を付与されており、極端なことをいえばSK1が6基、SD1が6条存在し得る状態であった。この状態では、記述が混乱しかねない。そのため、本報告においては南側をA区、北側をB区と呼称することとし、遺構の名称は調査区・遺構面・遺構種別・番号の順で記述する。つまり、A1SK1は、A区の第1遺構面検出のSK1ということになる。また、基本的にはSPはピット、SKは土坑、SDは溝、SXは不明遺構の略号であるが、調査時の呼称を踏襲しているため、この限りでないものも存在する。

本文中では、特徴的な遺構および遺物を掲載した遺構について記載し、原図で遺構番号が付与されていた遺構は、表2に計測値および出土遺物をまとめている。

『平成19年度発掘調査概報』[茨木市教育委員会2008]（以下、『概報』と記載する）に概要が報告されている。

## (2) 基本層序 (図58)

現地表面は36.1 mから36.8 mを測る。層序は大きく5層に分けることができた。0層は盛土・攪

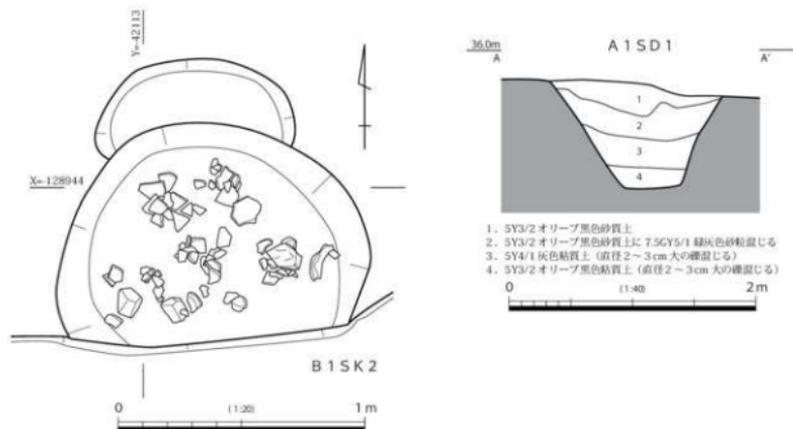


図59 07-1調査 第1遺構面遺構平面・断面図

乱層（層厚は北壁で0.6m、東壁で1.4m）である。B区では部分的に地山面まで攪乱が及ぶ。1層は耕作土（層厚0.2～0.4m）である。2層は灰色粘質土、オリーブ黒色砂質土など3つに細別される。2層全体で層厚は0.2～0.6mを測る。3層はオリーブ黒色砂礫など3つに細別される砂質の層準からなる（層厚0.4m）。4層は地山面であり、黄褐色細砂、明青灰色砂礫などからなる。1層下面で第1遺構面、2層下面で第2遺構面、3層下面で第3遺構面をそれぞれ検出した。

### （3）遺構

第1遺構面（図58）ピット205基、土坑14基、溝4条、流路1条、石敷遺構1基を検出した。A区では密に遺構が検出されているが、B区は攪乱の影響を受けているため北西部でのみ検出されている。ピット 多数検出されているが掘立柱建物としてのまとまりを把握できるものは認められない。

A1SP60 東側をA1SD1に切られる。長径0.6m、残存径0.5m、深さ0.22mを測る。遺物は奈良時代後半の須恵器が出土している。

A1SP61 A1SD1の東側で検出した。長径0.8m、短径0.6m、深さ0.22mを測る。遺物は古墳時代後期の須恵器が出土している。

土坑 B1SK2（図59）南側をB1SD1に切られる。東西1.25m、南北1.25m、深さ0.13mを測る。遺物は土師器・須恵器・瓦器が出土している。ただし、図化したのは飛鳥時代の須恵器のみである。瓦器が出土していることから、中世の遺構である。

溝 A1SD1（図59）長さ12.5m、幅0.6m、深さ0.84mを測り、南北方向に延びる。遺物は須恵器・陶器が出土している。

B1SD1 長さ8.6m、幅1.1m、深さ0.12mを測り、東西方向に延びる。前述したB1SK2を切る。遺物は土師器・須恵器・瓦が出土している。

流路 A1SD2はA区の北側から北東側を通る。極浅い落ち込み状で、検出幅8.0m、深さ0.3mを測る。遺物は土師器・須恵器・磁器・瓦が出土している。近世の遺物を含んでいることから、近世以降の流路と判断される。

石敷遺構 A1SD1の北西側で検出した礫の集中部である。東西4m、南北2mの範囲に集中している。『概報』では、「石敷」遺構と呼称されているが用途は不明である。

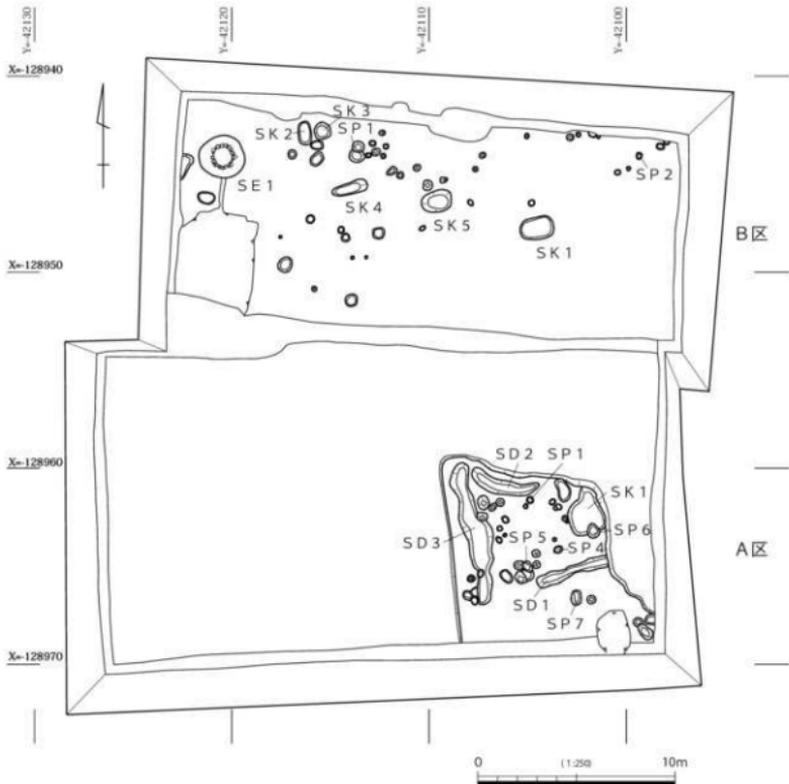


図 60 07-1 調査 第2遺構面平面図

第2遺構面(図60) ピット67基、土坑18基、溝3条、井戸1基を検出した。A区では南東隅部分でのみ遺構を検出した。

ピット A区・B区とも散在しており、掘立柱建物としてのまとまりを把握できるものは認められない。  
土坑 B2SK1 長径2.4m、短径1.85m、深さ0.27mを測る。埋土は褐色粗砂と褐色粗砂からなる。遺物は土師器・須恵器が出土している。

溝 A区で溝3条を検出したが、いずれも遺物は出土していない。

井戸 B2SE1 B区北西部で検出した。礫を積み上げることによって井戸側を構築する石組円筒井戸である。掘方は長径2.35m、短径2.1m、石組の内径は1.0mを測る。底まで完掘できていない。また、掘削を行った範囲内では遺物は出土していない。

第3遺構面(図61) ピット94基、土坑15基、溝1条、流路4条、その他の遺構1基を検出した。

ピット 主にA区で検出したが、掘立柱建物としてのまとまりを把握できるものは認められない。

土坑・溝 主にA区で検出したが、特筆する遺構は認められない。

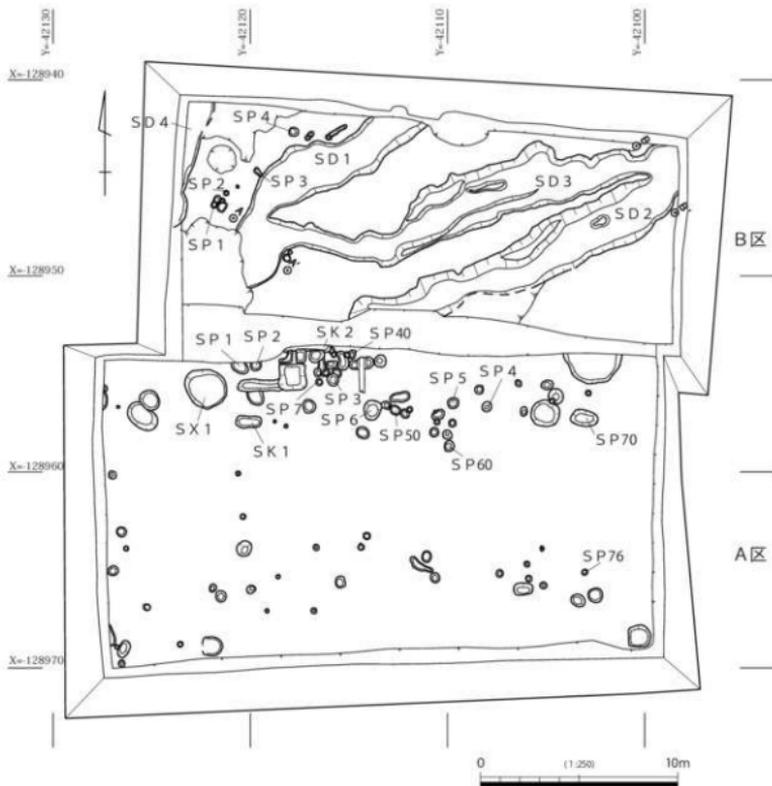


図 61 07-1 調査 第3遺構面平面図

流路(図62) B区で検出した北東-南西方向に伸びる4条の溝(B3SD1~4)である。複雑に合流・分岐している。深さ0.18mから0.48mを測る。遺物は出土していない。A区で流路の延長が検出されていないことから、検出面が同一でない可能性がある。

その他の遺構(図62) A区北西部で検出された土坑状の遺構(A3SX1)である。長径2.1m、短径2.0m、深さ0.26mを測る。内部から加工痕のある木材3点と礫が出土した。『概報』では「木製品と共に礫が丁寧に敷かれている状況から、何らかの工房のような施設」と推定されているが、写真(P.L.19)で見える限りでは、そこまでの判断はしかなる。他に土師器・瓦器・瓦が出土していることから、中世の遺構と考えられ、本来は1面に帰属する遺構と考えられる。

#### (4) 出土遺物(図63)

出土遺物は12点を図示したが、土師器・瓦器の状態が良好でなかったため、古墳時代~古代の須恵器が中心となっている。そのため、図示した遺物が遺構の年代を示せていない可能性もある。

B1SD1出土遺物(380・381) 380は軒丸瓦である。瓦当面に珠文が3個認められる。小片のため、時期は不明である。381は須恵器杯である。断面台形状の高台をもつ。平城宮VI期である。

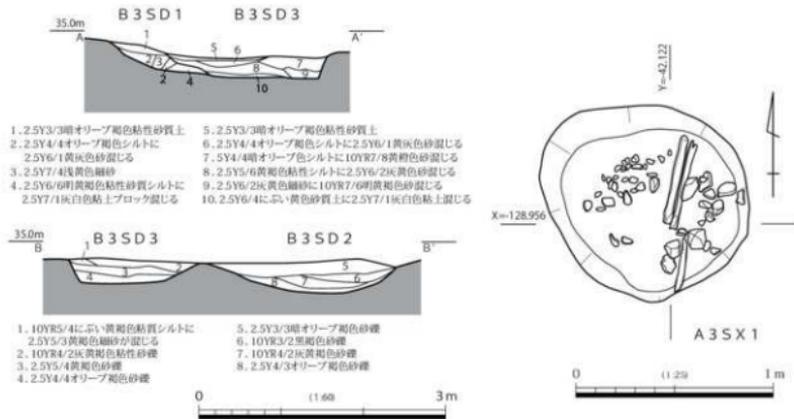


図62 07-1調査 遺構平面・土層断面図

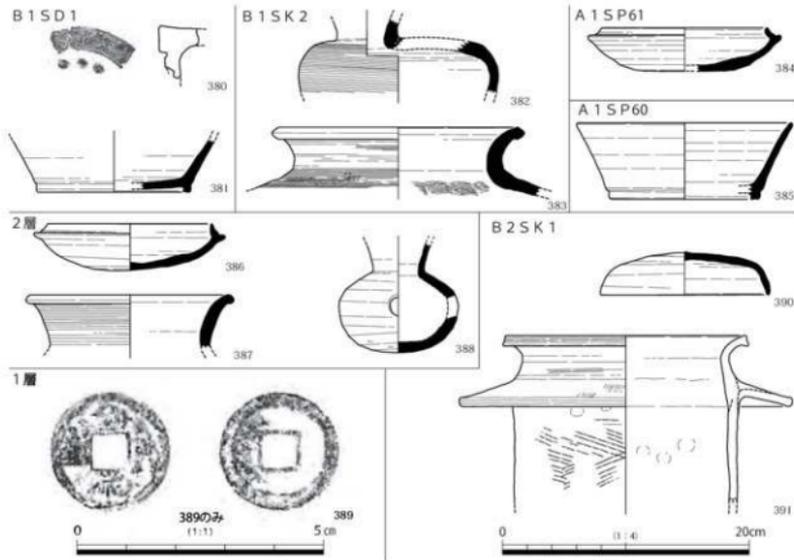


図63 07-1調査 出土遺物実測図

B1SK2出土遺物(382・383) 382は須恵器平瓶である。外面にカキメを施す。外面に自然軸がかかる。飛鳥Ⅱ期である。383は須恵器甕である。口縁端部は下方に肥厚する。体部外面に平行タタキ後カキメを施し、体部内面に同心円当てで具痕が認められる。

A1SP61出土遺物(384) 384は須恵器杯身である。たちあがりは短く内傾し、端部は丸く取め

表2 07-1 調査 遺構一覧表

地区	遺構 図	遺構 番号	規模 (m)			出土遺物
			長さ	幅	深さ	
B区	1	SK 1	1.8	1.6	0.14	土師器
B区	1	SK 2	1.25	1.25	0.13	土師器・須恵器・瓦器
B区	1	SK 3	1.6	(0.4)	0.25	土師器・須恵器・瓦器・陶器
B区	1	SP 1	0.86	1.0	0.18	
B区	1	SP 2	0.4	0.3	0.24	瓦
B区	1	SP 3	0.74	0.86	0.2	
B区	1	SP 4	0.56	0.5	0.2	
B区	1	SP 5	0.5	(0.32)	0.19	土師器
B区	1	SD 1	8.6	1.1	0.12	土師器・須恵器
B区	1	SD 2	3.2	(2.25)	0.18	土師器
A区	1	SK 1	1.75	1.33	0.22	
A区	1	SK 2	1.6	1.2	0.38	土師器・須恵器
A区	1	SK 3	2.1	1.5	0.4	土師器・須恵器・磁器
A区	1	SK 4	(1.6)	(1.5)	0.3	土師器・瓦器
A区	1	SP 1	0.55	0.5	0.26	土師器・須恵器
A区	1	SP 2	0.75	0.45	0.22	
A区	1	SP 3	1.05	0.3	0.26	土師器
A区	1	SP 4	1.1	0.86	0.18	
A区	1	SP 5	0.5	0.38	0.16	瓦器
A区	1	SP 6	0.75	0.55	0.22	
A区	1	SP 7	1.05	0.68	0.2	
A区	1	SP 8	0.7	0.64	0.2	須恵器
A区	1	SP 9	0.2	0.16	0.14	
A区	1	SP 10	0.35	0.25	0.18	
A区	1	SP 11	0.45	0.42	0.18	
A区	1	SP 12	0.24	0.25	0.14	土師器
A区	1	SP 13	0.3	0.3	0.17	
A区	1	SP 14	0.34	0.34	0.2	土師器
A区	1	SP 15	0.4	0.37	0.3	土師器
A区	1	SP 16	0.25	0.22	0.17	土師器
A区	1	SP 17	0.28	0.25	0.16	須恵器
A区	1	SP 18	0.5	0.42	0.22	土師器・瓦器
A区	1	SP 19	0.86	0.7	0.28	須恵器
A区	1	SP 20	0.9	0.85	0.38	土師器
A区	1	SP 21	1.14	0.44	0.25	須恵器
A区	1	SP 22	0.45	0.45	0.24	土師器
A区	1	SP 23	0.2	0.18	0.08	土師器
A区	1	SP 25	0.57	0.4	0.15	須恵器
A区	1	SP 26	0.45	0.4	0.2	土師器
A区	1	SP 27	0.7	0.62	0.33	土師器・須恵器
A区	1	SP 28	1.0	0.94	0.3	土師器
A区	1	SP 29	0.6	0.5	0.24	須恵器
A区	1	SP 30	0.4	0.35	0.18	
A区	1	SP 31	0.6	0.6	0.2	
A区	1	SP 32	0.47	0.4	0.16	
A区	1	SP 33	0.34	0.3	0.14	須恵器
A区	1	SP 34	0.26	0.2	0.14	
A区	1	SP 35	0.35	0.25	0.14	
A区	1	SP 36	0.2	0.2	0.1	
A区	1	SP 37	0.4	0.4	0.18	
A区	1	SP 38	0.4	0.25	0.15	
A区	1	SP 39	0.48	0.38	0.2	
A区	1	SP 40	0.45	0.4	0.27	須恵器・瓦器
A区	1	SP 41	1.1	1.1	0.3	土師器・須恵器
A区	1	SP 43	0.74	0.57	0.47	土師器・須恵器
A区	1	SP 44	0.3	0.3	0.28	土師器
A区	1	SP 45	0.46	0.36	0.2	
A区	1	SP 46	0.55	0.45	0.24	
A区	1	SP 47	0.3	0.3	0.14	
A区	1	SP 48	0.45	0.35	0.21	土師器・須恵器
A区	1	SP 49	0.35	0.35	0.14	
A区	1	SP 50	0.25	0.25	0.22	須恵器
A区	1	SP 51	0.45	(0.3)	0.15	土師器
A区	1	SP 52	0.84	0.3	0.12	土師器
A区	1	SP 53	0.32	0.32	0.04	土師器・須恵器
A区	1	SP 55	0.75	0.45	0.12	
A区	1	SP 57	0.54	0.4	0.2	
A区	1	SP 59	1.7	0.4	0.12	
A区	1	SP 60	0.6	0.5	0.22	須恵器

地区	遺構 図	遺構 番号	規模 (m)			出土遺物
			長さ	幅	深さ	
A区	1	SP 61	0.8	0.6	0.22	須恵器
A区	1	SP 70	0.3	0.27	0.2	
A区	1	SP 80	0.5	0.3	0.24	
A区	1	SP 90	0.25	0.15	0.14	
A区	1	SP 100	0.34	0.25	0.14	
A区	1	SP 110	0.3	0.3	0.12	
A区	1	SP 120	0.37	0.37	0.31	
A区	1	SP 130	0.37	0.37	0.3	
A区	1	SP 140	0.33	0.25	0.24	
A区	1	SP 150	0.35	0.25	0.1	
A区	1	SP 164	0.8	0.43	0.07	
A区	1	SP 165	1.2	0.5	0.2	
A区	1	SD 1	1.25	0.6	0.84	須恵器・陶器
A区	1	SD 2	2.25	8.0	0.3	土師器・須恵器・磁器・瓦
B区	2	SK 1	1.7	1.13	0.22	
B区	2	SK 2	1.2	0.7	0.22	須恵器・磁器
B区	2	SK 3	0.85	0.8	0.28	
B区	2	SK 4	1.84	0.55	0.3	
B区	2	SK 5	1.5	1.1	0.46	
B区	2	SE 1	2.35	2.1	1.0以上	
B区	2	SP 1	0.6	0.55	0.32	
B区	2	SP 2	0.35	0.3	0.24	
A区	2	SD 1	3.6	0.65	0.28	土師器・須恵器
A区	2	SD 2	3.5	0.7	0.2	
A区	2	SD 3	6.8	1.23	0.33	
A区	2	SK 1	2.4	1.85	0.27	土師器・須恵器
A区	2	SP 1	0.35	0.35	0.15	
A区	2	SP 2	0.4	0.3	0.12	
A区	2	SP 3	0.37	0.25	0.14	
A区	2	SP 4	0.4	0.35	0.1	
A区	2	SP 5	0.64	0.43	0.24	
A区	2	SP 6	0.75	0.6	0.28	
A区	2	SP 7	0.75	0.5	0.1	須恵器
B区	3	SD 1	(1.02)	2.75	0.18	
B区	3	SD 2	(1.53)	3.2	0.42	
B区	3	SD 3	(2.17)	3.0	0.36	
B区	3	SD 4	(7.3)	(0.6)	0.32	
B区	3	SP 1	0.35	0.3	0.04	
B区	3	SP 2	0.27	0.27	0.06	
B区	3	SP 3	0.56	0.22	0.08	
B区	3	SP 4	0.52	0.43	0.24	
A区	3	SK 1	2.56	1.12	0.34	
A区	3	SK 2	1.51	1.26	0.28	土師器
A区	3	SK 1	2.1	2.0	0.26	土師器・瓦器・瓦
A区	3	SP 1	(1.53)	1.31	0.1	
A区	3	SP 2	(1.07)	0.84	0.2	
A区	3	SP 4	0.9	0.84	0.12	土師器
A区	3	SP 5	1.1	1.1	0.18	
A区	3	SP 7	0.74	0.72	0.1	土師器
A区	3	SP 8	1.18	0.95	0.2	土師器
A区	3	SP 10	1.0	0.99	0.3	
A区	3	SP 20	0.56	0.56	0.2	
A区	3	SP 40	0.85	0.66	0.3	
A区	3	SP 50	1.05	0.92	0.1	
A区	3	SP 60	1.08	0.98	0.22	
A区	3	SP 70	2.67	1.62	0.22	
A区	3	SP 76	0.58	0.58	0.21	

る。扁平な器形を呈する。TK43型式である。

A1SP60出土遺物(385) 385は須恵器杯である。口縁部は斜め上方に延びる。断面台形状の高台をもつ。平城宮VI期である。

1層出土遺物(389) 389は銅銭である。銘が著しく、銭銘は判読できない。

2層出土遺物(386~388) 386は須恵器杯身である。たちあがりは短く内傾し、端部は丸く収める。扁平な器形を呈する。TK43型式である。387は須恵器甕である。口縁部は外方へ折り曲げる。外面にカキメを施す。388は須恵器甕である。球形の体部をもち、胴部最大径を測る位置に直径1.2cmの円孔を穿つ。TK209型式である。

B2SK1出土遺物(390・391) 390は須恵器杯蓋である。TK209型式である。391は土師器羽釜である。体部は直立し、口縁部は外反して、面を成す。端面に凹線を施す。鈎部は下方に下がり、端部は面を成す。体部外面にハケ及び平行タキを施す。菅原分類の拱津A型である。7世紀後半である。

### (5) 小結

当調査区では3面の遺構面を確認した。遺物の出土量が少ないが、第1遺構面が中世、第2遺構面が古墳時代中期~古代と判断される。第3遺構面は遺物がほとんど出土しておらず古墳時代中期以前としか判断できない。他の調査区では確認されていない、8世紀末の遺物が出土していることは注目される。

## 第15節 13-1調査区

### (1) はじめに

藤の里二丁目で計画された倉庫の建築に伴って行われた発掘調査である。確認調査の結果を受けて、基礎掘削による損壊が遺構面に及ぶ建物東辺部分(南北24m×東西5.5m)を対象として、調査を行った(調査面積132㎡)。

### (2) 基本層序(図65)

基本層序は、大きく5層に分けることができる。0層は盛土(層厚1.0~1.15m)、1層は耕土・鋤床土(層厚0.4m)、2層は整地土(層厚0.2m)、3層は遺物包含層(層厚0.5m)、4層は地山である。

### (3) 遺構と遺物(図65)

遺構は3-1a層の下面で検出した。ピット5基と土坑4基を確認した。調査段階で付与された遺構種別はいずれも「SP」であるが、遺構の規模から、SP1・3・5・8・9を土坑として扱う。いずれの遺構からも遺物は出土していない。

土坑 SP1が調査区外に延びる以外は、長径1.0~1.5mを測る。深さはSP9が0.3mを測る以外は0.1m前後を測る。埋土はいずれも単層である。

ピット 直径0.3~0.7m、深さ0.15~0.2mを測る。埋土はいずれも単層である。

遺物は1-2a層~2-1a層中から摩滅した土師器片が出土しているが、小片のため詳細は不明であり、図化できる遺物は無かった。

### (4) 小結

当調査区では、僅かながら、遺構・遺物を確認した。ただし、遺構からは遺物が出土しておらず、層中の遺物も細片であったため、時期を判断することができなかった。

調査区の南側を流れる勝尾寺川の影響を受けやすい地点であるため、顕著な活動の場として利用されていなかったと考えられる。北東100mに位置する82-3調査区も同様に顕著な遺構・遺物が確認されおらず、小規模な谷地形のような環境であった可能性がある。

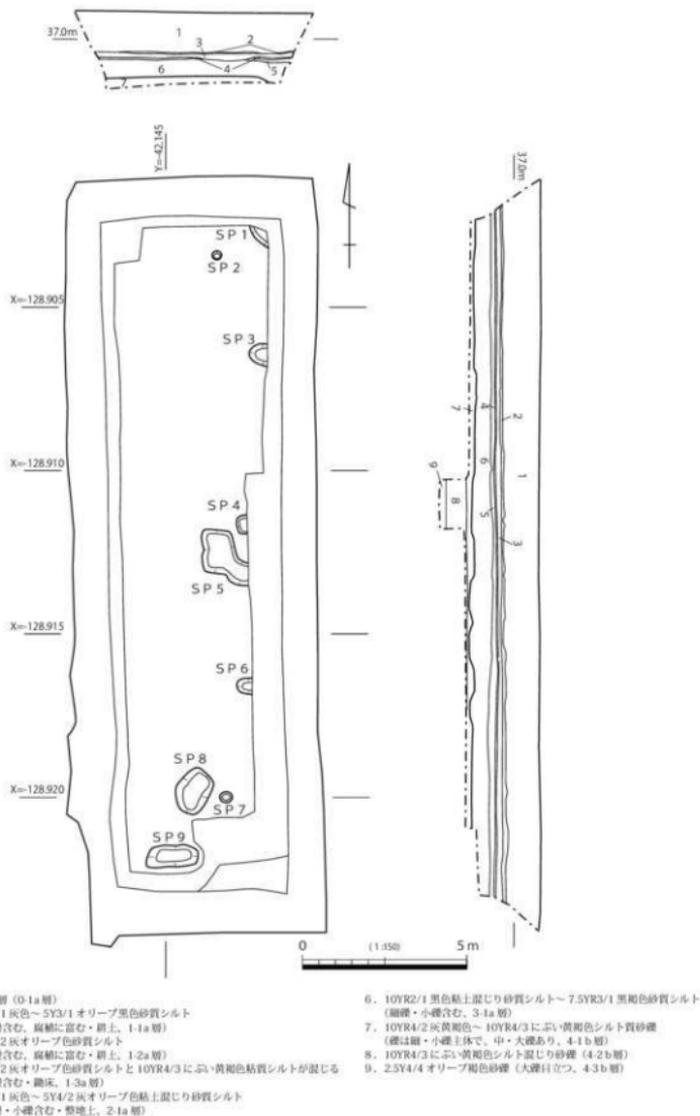


図 64 13-1 調査 調査区平面・土層断面図

## 第IV章 本書掲載調査のまとめ

本書では、既往の宿久庄遺跡の調査24件の内15件の調査内容について報告した。本章では、時代ごとにまとめておく。

**縄文時代** 宿久庄遺跡南西部に位置する78-1調査・04-1調査で縄文時代後期の遺物が出土している。明確な遺構は検出されていないが、特に04-1調査でまとまった量が出土していることから、この周辺に該期の遺構が存在するものと考えられる。周辺の縄文時代遺跡としては北西約2kmに粟生間谷遺跡が位置する。粟生間谷遺跡でも同時期の遺物が出土しており、周辺一帯が当該期の活動の場となっていたことを示している。

**弥生時代** 84-4調査で後期の土器が出土している。本報告書対象分では、極めて少量であったが、『宿久庄遺跡2』で報告予定の宿久庄遺跡東部では、前期(06-1調査)や、中期(1987年度確認調査)の遺物が出土している。現時点では明確な遺構の検出には至っていないが、北東部の未調査区域に存在すると思われる。

**古墳時代** 83-1調査、84-4調査、99-2調査などを中心として、古墳時代中期・後期及び飛鳥時代の遺物が出土している。古墳時代後期から飛鳥時代初めにかけての遺物が多く、この時期が宿久庄遺跡の一つの盛期であろう。ただし、遺構や遺物は数多く検出されているが、該期の集落像は十分につかみ切れていないのが現状である。

**古代** 07-1調査で8世紀末の遺物が出土している。この調査区では明確な遺構は確認できていないが、周辺にこの時期の遺構が存在する可能性がある。

**中世** 99-5調査や01-1調査をはじめとして、複数の調査区で検出されている掘立柱建物はこの時期の可能性が高い。柱穴からは遺物がほとんど出土していないため、年代比定には困難が伴うが、拡張区で出土している遺物の時期から判断すると12世紀末～13世紀初頭頃に比定できる可能性がある。

01-1調査では、細かい時期差は存在すると考えられるが、周囲に溝を伴った掘立柱建物や、石組井戸、火葬墓など多様な遺構が検出されている。当調査区では、中世の遺構が集中しており、集落の中心であった可能性もある。

宿久庄遺跡周辺には中宮職領宿久御園をはじめとする荘園が所在したと推定されている。文献上に現れるのは11世紀であるが、荘園と対応させて考えることのできる成果である。

『宿久庄遺跡2』で報告する東側の調査成果では中世の遺構が多く検出されており、これらと合わせて中世の宿久庄遺跡の様子を考える必要があるが、遠隔地からの広域流通品である滑石製石鍋や貿易陶磁が出土していることから判断しても、宿久庄遺跡が東西交通の要衝に位置する流通拠点であったことが窺われる調査成果といえよう。

宿久庄遺跡の既往の調査全体を踏まえた時期別の動態は、残る東側の調査成果を報告した上で『宿久庄遺跡2』において改めて述べることにする。

## 参考文献

### 第II章

- 石本倫子 2009 「戦国期摂津における国人領主と地域—摂津国人一揆の再検討を通して—」『ヒストリア』第213号 大阪歴史学会
- 市村 宏(全訳註) 2011 『風姿花伝』講談社
- 茨木市 2012 『新修 茨木市史』第一巻 通史Ⅰ
- 茨木市 2013 『新修 茨木市史』第四巻 資料編 古代中世
- 茨木市 2014 『新修 茨木市史』第七巻 資料編 考古
- 茨木市 2016 『新修 茨木市史』第二巻 通史Ⅱ
- 茨木市教育委員会 2016 「国史跡 郡山宿本陣—楯の本陣—」
- 茨木市教育委員会 2016 「宿久庄西遺跡1」
- 茨木市教育委員会 2017 「宿久庄西遺跡2」
- 大阪府教育委員会 2003 「福井遺跡」
- 大阪府教育委員会 2006 「福井遺跡Ⅱ」
- 大阪府教育委員会 2009 「福井遺跡Ⅲ」
- 岡田 賢 2018 「西福井遺跡の発掘調査について—府立福井高等学校建設に伴う発掘調査の概要—」『茨木市立文化財資料館館報』第3号 茨木市立文化財資料館
- 河音能平 1977 「中世前期北摂武士団の動向」『高槻市史—(のち 2011 『中世畿内の村落と都市』図書出版文庫 所収)』
- 木下 良 2013 「六 大道・大路その他の道路関係地名」『日本古代道路の復元的研究』吉川弘文館
- 木庭元晴 2012 「第一章 基盤地質」『新修 茨木市史』第1巻
- 京都大学大学院文学研究科考古学研究室 2007 『紫金山古墳の研究』
- 黒崎 直 1980 「近畿における8・9世紀の墳墓」『研究論集Ⅵ』奈良国立文化財研究所
- 国書刊行会 1915 『言継卿記』第4巻
- 小林義孝・海通博史 「古代火葬墓の典型的形態」『太子町立竹内街道歴史資料館 館報』第6号 太子町立竹内街道歴史資料館
- 財団法人 大阪府文化財調査研究センター 1999 a 『庄田遺跡』
- 財団法人 大阪府文化財調査研究センター 1999 b 『徳大寺遺跡』
- 財団法人 大阪府文化財調査研究センター 2000 a 『佐保栗栖山砦跡』
- 財団法人 大阪府文化財調査研究センター 2000 b 『栗栖山南墳墓群』
- 財団法人 大阪府文化財センター 2002 『宿久庄西遺跡』
- 財団法人 大阪府文化財センター 2003 a 『粟生間谷遺跡』旧石器・縄紋時代編
- 財団法人 大阪府文化財センター 2003 b 『粟生間谷遺跡』古代・中世編
- 財団法人 大阪府文化財センター 2003 c 『豊川遺跡』
- 財団法人 大阪府文化財センター 2005 『福井遺跡』
- 白井忠雄 1974 「茨木市宿久庄出土の蔵骨容器」『古代文化』3 元興寺仏教民俗資料研究所考古学研究室
- 統群書類従完成会 1923 『統群書類従・第二輯下 神祇部』「住吉太神宮諸神事次第」
- 統群書類従完成会 1929 『統群書類従・第一輯 神祇部』「神宮雜例集巻第一」
- 統群書類従完成会 1930 『統群書類従・補遺二 看聞御記(下)』
- 真宗史料刊行会 2017 『大系真宗史料 文書記録編9 天文日記Ⅱ』法藏館
- 竹内理三 1964 『平安遺文』古文書編 第二巻
- 辻本充彦 1977 「三島地方採集の石器」『大阪文化誌』第3巻第2号 財団法人 大阪文化財センター

- 天坊幸彦 1947『攝津三島郡の條里』『上代浪華の歴史地理的研究』大八州出版
- 東京大学史料編纂所 1922『大日本史料』第十編之十九
- 東京大学史料編纂所 1938『大日本史料』第十編之六
- 東京大学史料編纂所 1969『大日本古記録 小右記』五
- 東京大学史料編纂所 1988『大日本古記録 岡屋間白記』岩波書店
- 虎尾俊哉 2000『延喜式』上 集英社
- 中西裕樹 2019『戦国摂津の下克上 高山右近と中川清秀』戎光祥出版
- 名古屋市立博物館 1992『和名類聚抄』名古屋市立博物館資料叢書二
- 服部昌之 1983『律令国家の歴史地理学的研究—古代の空間構成』大明堂
- 馬部隆弘 2016『第一節 織豊期の茨木』『新修 茨木市史』第二巻 通史Ⅱ
- 福留照尚 2008『茨木の条里について』『新修 茨木市史年報』第7号
- 福留照尚 2012『第三節 宿久の猿楽』『新修 茨木市史』第一巻 通史Ⅰ
- 箕面市役所 1968『箕面市史』史料編一
- 箕面市役所 1972『箕面市史』史料編二
- 森田克行 2006『今城塚と三島古墳群』同成社
- 大和郡山市教育委員会 1984『大和郡山市西方寺所蔵一切経調査報告書』

### 第三章

#### 宿久庄遺跡既刊概報

- 茨木市教育委員会 1986『宿久庄遺跡発掘調査概要』
- 茨木市教育委員会 1986『昭和60年度 発掘調査略報』
- 茨木市教育委員会 1992『平成3年度発掘調査概報』
- 茨木市教育委員会 2000『平成11年度発掘調査概報』
- 茨木市教育委員会 2001『平成12年度発掘調査概報』
- 茨木市教育委員会 2002『平成13年度発掘調査概報』
- 茨木市教育委員会 2005『平成16年度発掘調査概報』
- 茨木市教育委員会 2008『平成19年度発掘調査概報』
- 茨木市教育委員会 2010『平成20年度発掘調査概報』
- 茨木市教育委員会 2019『平成30年度茨木市埋蔵文化財発掘調査概報・平成30年度国庫補助事業-』

#### 縄文土器

- 玉田芳秀・岡田憲一 2010『Ⅱ 各地域の土器編年 5. 近畿』『西日本の縄文土器 後期』真陽社
- 岡田憲一 2010『Ⅲ 特論 3. 縄文原体』『西日本の縄文土器 後期』真陽社

#### 弥生土器

- 森田克行 1990『摂津地域』『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 木耳社

#### 土師器・須恵器

- 河田泰之 1996『大阪湾岸を中心とした土器製塩活動の展開』『下田遺跡』⑩大阪府文化財調査研究センター
- 京嶋 寛 1992『古墳時代後半期における土師器の器種構成』『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ ⑩大阪市文化財協会
- 植山 洋 2004『大阪湾沿岸の古墳時代土器製塩』『季刊考古学・別冊14 畿内の巨大古墳とその時代』雄山閣
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 田村美沙 2010『千里塚における古墳時代後期の須恵器生産とその供給』『待兼山考古学論集Ⅱ』大阪大学考古学研究室
- 辻 美紀 1999『古墳時代中・後期の土師器に関する一考察』『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室・大阪大学

考古学友の会

中野 咲 2008 「接合技法からみた古墳時代中・後期の土師器高環—いわゆる刺突法とその周辺—」『韓式系土器研究』  
X 韓式系土器研究会

山内紀嗣 1994 「製塩土器の新例」『天理参考館館報』第7号 天理参考館

古代の土器

古代の土器研究会 1992 『古代の土器1 都城の土器集成』

古代の土器研究会 1993 『古代の土器2 都城の土器集成II』

中世の遺物

伊野近富 2019 「平安京左京内膳町の土師器皿」『中近世土器の基礎研究』27 日本中世土器研究会

荻野繁春 1993 「中世西日本における貯蔵容器の生産」『考古学雑誌』第78巻第3号 日本考古学会

尾上 実 1983 「南河内の瓦器検」『古代文化論叢』藤沢一夫先生古稀記念論集

木戸雅寿 1995 「石鋼」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社

小森俊寛・上村憲章 1996 「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」『研究紀要第3号』@京都市埋蔵文化財研究所

太宰府市教育委員会 2000 『大宰府条坊跡』XV—陶磁器分類編—

佐藤亜聖 2011 「大阪府下における和泉型瓦器検の地域相抽出とその意義」『中近世土器の基礎研究』23 日本中世土器研究会

高橋照彦 1995 「緑釉陶器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社

中世土器研究会事務局 2015 「東播系須恵器鉢の分類と編年」『中近世土器の基礎研究』26 日本中世土器研究会

森島康雄 1990 「中河内の羽釜」『中近世土器の基礎研究』VI 日本中世土器研究会

森島康雄 2005 「瓦器—編年と技術伝播—」『中世窯業の諸相—生産技術の展開と編年—』全国シンポジウム「中世窯業の諸相—生産技術の展開と編年—」実行委員会

森 隆 1990・1991 「西日本の黒色土器生産」（上・中・下）『考古学研究』第37巻2～4号 考古学研究会

森本朝子 2003 「博多遺跡群出土の合子について」『博多研究会誌』11号 博多研究会

木製品

水野正好 1985 「招福・除災—その考古学—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 国立歴史民俗博物館

春成秀爾 1996 「性象徴の考古学」『国立歴史民俗博物館研究報告』第66集 国立歴史民俗博物館

出土銭

兵庫埋蔵銭調査会 1996 『日本出土銭総覧1996年度版』

中世墓

狭川真一 2007 「中世の火葬、その初期の形態」『墓と葬送の中世』高志書院

井戸

宇野隆雄 1982 「井戸考」『史林』第65巻第5号 史学研究会

表3 出土遺物観察表(1)

調査 次数	探検 番号	発見 番号	出土地	器種	形状	流量 (cm)	残存	色調	胎土	調整	備考
78-1	1	21	茶褐色 粘質土層	縄文土器 土師器	柱口器	口径:△5.0 幅:△5.7	柱口部のみ	外:7.5YR7/6暗 新:2.5Y5/1黄灰 内:7.5Y5/1灰	φ1.5mm以下の長石、チャート、石英、雲母、クサリ礫を含む	外面:磨滅 内面:ユビナデ	
	2	21	茶褐色 粘質土層	土師器	甕	口径:(20.4) 器高:△6.0	口縁~ 底部1/4	外・新:7.5YR8/6 浅黄褐色 内:10YR7/4にぶい 黄褐色	やや粗:2.5mm以下のチャート、長石、クサリ礫を含む	外面:ヨコナデ、 ハケ 内面:ヨコナデ、 ヘラケズリ	
	3	21	茶褐色 粘質土層	須恵器	杯蓋	口径:(12.4) 器高:△4.7	口縁~ 底部3/8	外:5Y7/1灰白 5Y6/1灰 内・新:5Y7/1灰白	φ2mm以下の砂粒を含む	外面:同転ナデ、 同転ヘラケズリ、 同転ナデ 内面:同転ナデ、 ナデ	T K 10
	4	21	茶褐色 粘質土層	須恵器	甕	口径:(19.55) 器高:△13.8	頸・体部 1/2	外:2.5Y8/2灰白 新:2.5Y8/1灰白 内:2.5Y7/2灰黄	φ2mm程度の砂粒を含む	外面:平行タタキ 後方キヌ 内面:ヨコナデ、 同心円状で肌 ハケ	辻編年3
83-1	5	21	茶褐色 土層	土師器	椀	口径:(14.5) 器高:△6.85	1/4	外・新・内: 10YR7/4にぶい 黄褐色、10YR6/3にぶい 黄褐色	φ0.5mm程度のチャート、長石、石英、クサリ礫を含む	外面:ヨコナデ、 ハケ 内面:ヨコナデ、 ハケ	辻編年3
	6	21	茶褐色 土層	土師器	有稜角 形高杯	口径:12.2 器高:△5.48	口縁部5/8 柱体部 ほぼ完形	外・新・内: 10YR7/3にぶい黄褐色	φ2mm程度の長石、チャート、クサリ礫、石英を含む	外面:ナデ、ユビ オサエ 内面:ナデ	辻編年3
	7	21	茶褐色 土層	土師器	有稜角 形高杯	器高:△6.0	杯部3/4	外:10YR8/3浅黄褐色 10YR8/2灰白 新:10YR7/4にぶい黄褐色 内:10YR8/4浅黄褐色	やや粗(φ7mm程度の石英、長石を少量含む)	外面:ナデ、ヘラ ケズリ、ユビオサ エ 内面:ナデ	辻編年3
	8	21	茶褐色 土層	土師器	有稜角 形高杯	杯部径:(9.2) 器高:△5.8	脚・器部 完形	外・新・内: 10YR7/6明黄褐色	φ3mm程度のチャート、長石、クサリ礫を含む	内外面:磨滅のため不明	辻編年3 内底透かし 孔1個
	9	21	茶褐色 土層	土師器	高杯	杯部径: (10.2) 器高:△6.65	脚部 ほぼ完形 器部1/12	外:5YR6/6暗 新:2.5Y5/1黄灰、 10YR8/4浅黄褐色 内:10YR8/4浅黄褐色	φ1mm程度のチャート、長石、クサリ礫を含む	外面:ヨコナデ、 ナデ 内面:ナデ、ユビ オサエ	辻編年3
	10	—	茶褐色 土層	土師器	高杯	杯部径: (14.2) 器高:△10.3	脚部完形 器部1/6	外・新・内: 10YR8/3浅黄褐色	φ2.5mm程度のチャート、長石、石英、クサリ礫を含む	内外面:磨滅のため不明	辻編年3
	11	21	茶褐色 土層	土師器	高杯	杯部径: (8.5) 器高:△11.8	杯部完形 器部極小	外・内:7.5YR7/6暗 新:7.5YR8/6浅黄褐色	φ4mm程度のチャート、長石、石英、クサリ礫を含む	外面:タテ方向の タテハケ、ナデ 内面:ナデ	辻編年3
	12	22	茶褐色 土層	土師器	甕	口径:(8.75) 幅:△8.0	口縁部1/8 頸部1/4 同部3/8	外・新・内: 10YR7/4にぶい黄褐色 新:7.5YR7/4にぶい黄褐色	φ4mm程度のチャート、長石、石英、クサリ礫を含む	外・内面:ナデ	辻編年3
	13	22	茶褐色 土層	土師器	甕	口径:(16.0) 器高:△11.8	口縁・頸 部1/12	外・新・内: 10YR7/4にぶい黄褐色 新:10YR7/4にぶい黄褐色	φ2mm程度のチャート、長石、石英、クサリ礫を含む	内外面:磨滅のため不明	辻編年3
	14	22	茶褐色 土層	土師器	甕	口径:(12.0) 器高:△4.55	口縁部 1/4	外・新・内: 10YR8/3浅黄褐色 新・内:10YR8/3浅黄褐色	やや粗(φ3mm程度の石英、長石など少量含む)	外面:ナデ 内面:ナデ、ユビ オサエ	辻編年3
	15	22	茶褐色 土層	土師器	甕	口径:(16.2) 器高:△7.05	口縁部・ 頸部1/9 同部1/8	外・新・内: 7.5YR6/4にぶい黄褐色	φ1mm程度のチャート、長石、石英、クサリ礫を含む	外面:ヨコナデ、 ハケ 内面:ヨコナデ、 ハケ、ケズリ	辻編年3
	16	22	茶褐色 土層	土師器	甕	口径:(18.0) 器高:△4.1	口縁部1/6 頸部1/8	外・内:7.5YR7/6暗 新:10YR7/4にぶい黄褐色	φ1mm程度のチャート、長石、クサリ礫を含む	外面:ヨコナデ、 ハケ 内面:ナデ、ハケ	辻編年3
	17	23	茶褐色 土層	土師器	甕	口径:(27.75) 器高:△5.8	口縁部1/2 体部破片	外・新・内: 10YR5/3にぶい黄褐色、 10YR5/2灰黄褐色	φ3mm程度のチャート、長石、石英、クサリ礫を含む	外面:ヨコナデ タテハケ、ナデ 内面:ヨコナデ、 ヘラケズリ	辻編年3
	18	23	茶褐色 土層	土師器	甕	口径:(22.75) 幅:13.1 器高:22.1	口縁部 3/16 天井部 体部1/4 底部3/4	外・新・内: 10YR7/3にぶい黄褐色	φ6mm以下のチャート、長石、石英、クサリ礫を含む	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、 ハケ、ナデ	辻編年3 外底:肌張 底面:小孔 8個、大孔 1個
	19	22	茶褐色 土層	土製土器	紡錘車	直径:4.6 長さ:1.35 厚さ:0.7	完形	外:10YR8/3浅黄褐色 新:2.5Y6/1黄灰	φ1mm程度のチャート、長石、石英、クサリ礫を含む	内外面:磨滅のため不明	重量:32g
20	22	茶褐色 土層	須恵器	蓋	口径:(7.0) 器高:2.15	口縁部 極小 体部1/4	外・新・内: 2.5Y7/2灰黄	φ1mm程度の砂粒を含む	外面:同転ナデ 同転ヘラケズリ後 同転ナデ 内面:同転ナデ		
21	22	茶褐色 土層	須恵器	杯蓋	口径:(9.6) 器高:△3.5	1/4	外:5Y5/1灰 新・内:5Y6/1灰	φ1mm程度の砂粒を含む	外面:同転ナデ、 同転ヘラケズリ、 同転ナデ 内面:同転ナデ	飛鳥1	
22	22	茶褐色 土層	須恵器	杯蓋	口径:(10.3) 器高:△3.7	口縁部1/6 天井部 完形	外:2.5Y6/1黄灰 新:2.5Y7/2灰黄 内:2.5Y7/1灰白	φ2mm程度の砂粒を含む	外面:同転ナデ、 同転ヘラケズリ、 同転ナデ 内面:同転ナデ	飛鳥1	
23	—	茶褐色 土層	須恵器	杯蓋	口径:(10.7) 器高:△2.25	口縁部1/8	外・新・内: 2.5Y7/1灰白	φ1mm程度の砂粒を含む	外・内面:同転ヨ コナデ	飛鳥1	
24	P-4	須恵器	杯蓋	口径:(10.9) 器高:3.3	口縁部5/8 天井部3/4	外:N4/灰、N6/灰 新・内:N7/灰白	φ1.5mm程度の砂粒を含む	外面:同転ナデ、 同転ヘラケズリ後 ナデ 内面:同転ナデ	飛鳥1		
25	P-3	須恵器	杯蓋	口径:(11.2) 器高:3.15	1/4	外:N6/灰、N5/灰 新:N6/灰	φ1mm程度の砂粒を含む	外面:同転ナデ、 同転ヘラケズリ後 ナデ 内面:同転ナデ、 ナデ	飛鳥1		

表3 出土遺物観察表(2)

調査 次数	探検 番号	図録 番号	出土地	器種	器形	流量 (cm)	残存	色調	胎土	調整	備考
83-1	26	22	茶褐色土層	須恵器	杯蓋	口径: (11.4) 器高: 3.85	口縁部1/4 体部1/3 天井部 完形	外・新・内: 2.5Y7/1 灰白, 2.5Y7/2灰黄	φ1.5mm程度の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ, ナデ	飛鳥1
	27	22	茶褐色土層	須恵器	杯蓋	口径: (12.6) 器高: 3.2.9	口縁部1/6 天井部1/4	外: N5/灰 新・内: N6/灰	φ4mm程度の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ, ナデ	飛鳥1
	28	22	茶褐色土層	須恵器	杯蓋	口径: (15.0) 器高: 3.3.55	口縁部 体部1/8 天井部1/4	外・新・内: N6/灰	φ2mm程度の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ, ナデ	飛鳥1
	29	-	茶褐色土層	須恵器	杯蓋	口径: (15.7) 器高: 3.3.25	1/8	外・新・内: 2.5Y6/1 黄灰	φ0.5mm程度の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ, ナデ	飛鳥1
	30	22	茶褐色土層	須恵器	杯蓋	口径: (16.05) 器高: 3.4.25	口縁部 5/16 体・天井 部1/4	外・新・内: 10YR8/2灰白	φ3mm程度のチャート、長石、石英、タマリシロを含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ, ナデ	飛鳥1
	31	24	茶褐色土層	須恵器	杯身	口径: (11.0) 器高: 4.5	1/3	外: 10YR7/1灰白, 10YR6/1黄灰, 5Y5/1灰 新: N5/灰 内: N6/灰	密(φ6mm程度の石粒を少量含む)	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ	MT15
	32	24	P-4	須恵器	杯身	口径: (11.7) 器高: 4.5	口縁・ 体部3/8 底部1/4	外・新・内: 5Y7/1 灰白	φ2mm程度の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ, ナデ	T K10
	33	23	茶褐色土層	須恵器	杯身	口径: 12.7 器高: 4.6	口縁部2/3 体部 ほぼ完形	外・内: N6/灰 新: 2.5Y5/1黄灰	密(φ4mm程度の石粒を少量含む)	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ, ナデ	T K10
	34	-	茶褐色土層	須恵器	杯身	口径: (12.0) 器高: 3.3	口縁・体 部1/8	外・新: N5/灰 新: N4/灰	φ3mm程度の砂粒を含む	外・内面: 回転コ コナデ	T K43
	35	23	茶褐色土層	須恵器	杯身	口径: 11.6 器高: 3.6	ほぼ完形	外: 2.5Y7/1灰白, 2.5Y6/1黄灰, 10YR7/1灰白 新: 2.5Y6/1黄灰 内: 2.5Y8/1灰白	密(φ4mm程度の石粒を少量含む)	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ, ナデ	T K43 外面: 自然 釉
	36	24	茶褐色土層	須恵器	杯身	口径: (11.9) 器高: 3.4.2	1/3	外: 10YR7/1灰白, 10YR6/1黄灰, 10YR6/1黄灰 内: 10YR7/1灰白	φ1mm以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ	T K43
	37	-	茶褐色土層	須恵器	杯身	口径: (12.8) 器高: 3.3.8	口縁・ 体部5/16	外・新・内: 2.5Y7/1 灰白	φ1mm程度の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ, ナデ	T K43
	38	-	茶褐色土層	須恵器	杯身	口径: (13.2) 器高: 3.4.3	口縁部 1/16 体・底部 1/6	外: 2.5Y5/1・6/1 黄灰 新: 2.5Y5/1黄灰 内: 2.5Y6/1黄灰	φ1.5mm程度の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ	T K43
	39	24	茶褐色土層	須恵器	杯身	口径: (13.2) 器高: 3.4.0	口縁部 1/16 体・底部 1/4	外・新・内: 10YR7/1灰白	φ2mm程度の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ, ナデ	T K43
	40	23	茶褐色土層	須恵器	杯身	口径: 13.3 器高: 4.0	ほぼ完形	外・内: 2.5Y6/1黄灰 新: 2.5Y4/1黄灰	密(φ3mm程度の石粒を少量含む)	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ	T K43
	41	-	茶褐色土層	須恵器	杯身	器高: 3.2.4	破片	外・内: N6/灰 新: 5YR5/1黄灰	φ0.5mm程度の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ	T K43
	42	-	茶褐色土層	須恵器	杯身	口径: (13.6) 器高: 3.3.55	1/4	外・新・内: 2.5Y6/1 黄灰	φ2.5mm程度の砂粒を含む	外・内面: 回転コ コナデ	T K209
	43	-	茶褐色土層	須恵器	杯身	口径: (12.0) 器高: 3.3.2	口縁部1/4 体部5/16	外・新・内: N5/灰	φ0.5mm程度の砂粒を含む	外・内面: 回転コ コナデ	T K209 口縁部大き く歪む
	44	-	茶褐色土層	須恵器	杯身	口径: (12.75) 器高: 3.3.55	1/3	外・新・内: N6/灰	φ1.5mm程度の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ	T K209
	45	24	茶褐色土層	須恵器	杯身	器高: 3.4.4	体部3/4 底部ほぼ 完形	外・新・内: 2.5Y6/1 黄灰	φ1mm程度の石粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ	飛鳥1
	46	24	茶褐色土層	須恵器	杯身	口径: (10.0) 器高: 3.2.5	口縁部2/3	外: 2.5Y7/1灰白 新: 7.5YR6/1黄灰 内: N7/灰白	密(φ1mm程度の砂粒を微量含む)	外・内面: 回転ナ デ	飛鳥1
	47	24	P-5	須恵器	杯身	口径: (10.1) 器高: 3.2.95	1/4	外・新・内: 2.5Y7/1 灰白	φ1.5mm程度の砂粒を含む	外・内面: 回転ナ デ	飛鳥1 外面: 自然 釉
	48	23	茶褐色土層	須恵器	杯身	口径: 10.3 器高: 3.6	ほぼ完形	外: 10YR7/1灰白 新: 2.5Y8/1灰白 内: 10YR8/1灰白	密(φ2mm程度の石粒を少量含む)	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ	飛鳥1
	49	24	茶褐色土層	須恵器	杯身	口径: 10.3 器高: 3.6	口縁・ 体部3/4 底部完形	外: 10YR7/1灰白 新: 10YR6/1黄灰 内: 2.5Y6/1黄灰	φ3mm程度の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ後ナ デ 内面: 回転ナデ, ナデ	飛鳥1 外面: 変部に 重なる焼垂 肌、底部に ヘア文あり
	50	24	茶褐色土層	須恵器	杯身	口径: (10.5) 器高: 3.4.0	口縁・ 底部1/4	外・内: 10YR7/1 灰白 新: 2.5Y8/2灰白	φ1.5mm程度の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ	飛鳥1 外面: 変部に 口縁部付着

表3 出土物観察表(3)

調査 次数	探検 番号	図号 番号	出土地	器種	形状	流量 (cm)	残存	色調	胎土	調整	備考
	51	—	茶褐色土層	須恵器	杯	器高:△2.5	底部 4/5	外・新・内: 2.5Y7/1 灰白	φ 2mm程度の石粒を含む	外面: 回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、 ナデ	飛鳥I
	52	24	茶褐色土層	須恵器	杯	口径: (8.8) 器高: 3.5	1/4	外: 10YR6/2灰黄褐色 新・内: 10YR7/1 灰白	φ 0.5mm程度の砂粒を含む	外面: 回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、 ナデ	飛鳥I
	53	—	茶褐色土層	須恵器	杯	口径: (10.3) 器高: 3.45	5/16	外・新・内: 2.5Y8/2 9C1	φ 1mm程度の砂粒を含む	外面: 回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、 ナデ	飛鳥I
	54	23	茶褐色土層	須恵器	有蓋高杯	口径: 12.75 受部径: 14.9 器高: 15.2	杯部2/3 脚部1/3	外: 2.5Y6/1黄灰 10YR7/1灰白 新・内: 2.5Y6/1黄灰	やや密(φ 7mm程度の石粒を少量含む)	外面: 回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、 ナデ	T K 209 二段の方形 透かし孔 (3方向)
	55	23	茶褐色土層	須恵器	有蓋高杯	底径: (13.6) 器高: △14.4	脚部 3/4	外: 10YR8/1・ 5Y8/29C1 新: 2.5Y8/1灰白 内: 10YR7/2C1、赤い 黄褐色	密(φ 5mm程度の石粒を少量含む)	外面: 回転ヨコナデ 内面: 回転ナデ	T K 209 二段の方形 透かし孔 (3方向)
	56	24	茶褐色土層	須恵器	有蓋高杯	脚部径: (14.4) 器高: △7.15	脚部1/3 裾部3/16	外: 5Y3/1オリーブ 新: 2.5Y3/2黄褐色 新・内: 2.5Y5/1黄灰	φ 1mm程度の砂粒を含む	外・内面: 回転ヨコナデ	T K 209 二段の方形 透かし孔 (3方向)
	57	P-5		須恵器	高杯	器高: △7.2	脚部部 3/4	外: 5Y6/1灰、5Y7/1 灰白 新・内: 2.5Y6/1黄灰	密(φ 4mm程度の石粒を少量含む)	外面: ナデ、轆轤 紐交差・流紋文、 底面後半は 内面: 回転ナデ、 ナデ	
	58	23	茶褐色土層	須恵器	甕	口径: (8.6) 器高: 13.05 腹径: 14.0	口縁～ 腹部1/3 体部3/4	外: N7・10YR7/1 灰白 新: 10YR5/1黄褐色 内: 10YR7/1灰白、 N6/灰	密(φ 2mm程度の石粒を微量に含む)	外面: 回転ナデ、 回転ヘラケズリ、 轆轤紐交差文 内面: 回転ナデ、 ナデ	T K 216 底面にへう 記号
	59	24	茶褐色土層	須恵器	長頸甕	胴部径: 7.6 器高: △4.3	胴部ほぼ 完形	外: 5Y4/1・6/1 新: 5YR6/1黄褐色 内: 2.5Y6/1黄灰	φ 1mm程度の砂粒を含む	外・内面: ヨコナデ	飛鳥II 内面: 自然釉
	60	23	茶褐色土層	須恵器	甕	腹径: 17.5 器高: △8.5	体部～ 底部 ほぼ完形	外: 10YR7/1灰白、 2.5Y5/1黄灰 新: 2.5Y7/1灰白 内: 10YR7/1灰白	密(φ 3mm程度の石粒を微量に含む)	外面: 回転ナデ、 ナデ 内面: 回転ナデ	T K 43カ
	61	24	茶褐色土層	須恵器	甕	口径: (14.5) 器高: △5.6	口縁部 1/4	外・内: 10YR8/4 浅黄褐色 新: 2.5Y8/1灰白 内: 2.5Y8/1灰白	φ 2mm程度のチャート、長石、クサリ礫を含む	外・内面: ヨコナデ	
	62	—	P-3	須恵器	甕	口径: (16.0) 器高: △3.15	口縁部 1/12	外: N5/灰 新: 10YR7/2C1赤い 黄褐色 内: 7.5YR6/1黄褐色	φ 1mm程度の砂粒を含む	外・内面: 回転ヨコナデ	
	63	24	茶褐色土層	須恵器	甕	口径: (12.85) 器高: △5.15	口縁部 1/12	外・新・内: 10YR6/2灰黄褐色	密	外面: 回転ナデ、 流紋文 内面: 回転ナデ	T K 208
	64	—	茶褐色土層	須恵器	器台	器高: △3.3	体部 3/5	外: 7.5Y4/1灰、 N7/灰白 新・内: 2.5Y6/1黄灰	φ 2mm程度の砂粒を含む	外面: 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、 ナデ	
	65	—	茶褐色土層	須恵器	器台	器高: △5.45	脚部の 基部	外: 10YR7/1灰白 新: 10YR8/1灰白 内: 10YR7/2C1赤い 黄褐色	φ 2mm程度の砂粒を含む	外・内面: ヨコナデ	
	66	24	茶褐色土層	須恵器	甕	口径: (18.4) 器高: △5.9	口縁部1/3 腹部1/2	外: N4・N6/灰 新: 5Y7/1灰白 内: N6/灰	密(φ 1mm程度の石粒を微量に含む)	外面: 回転ナデ、 流紋文 内面: 回転ナデ	T K 208
	67	25	茶褐色土層	須恵器	甕	口径: (18.6) 器高: △4.6	口縁部1/7	外: 2.5Y6/1黄灰 新: 7.5Y5/2灰オリーブ 内: 10YR5/1黄褐色	φ 0.5mm程度の砂粒を含む	外・内面: 回転ヨコナデ	内面: 口縁部に自然釉
	68	—	茶褐色土層	須恵器	甕	口径: (20.15) 器高: △8.05	口縁部 残存 胴部1/4	外・新・内: 2.5Y7/1 灰白	φ 1mm程度の砂粒を含む	外面: 回転ヨコナデ 平行タタキ 内面: 回転ヨコナデ、 同心円当て貝殻	MT 15
	69	24	茶褐色土層	須恵器	甕	口径: (21.6) 器高: △10.8	口縁部1/3 胴部3/8	外・新・内: 10YR6/1黄褐色	φ 1mm以下の砂粒を含む	外面: ヨコナデ、 平行タタキ後方キメ 内面: ヨコナデ、 同心円当て貝殻	MT 15
	70	25	茶褐色土層	須恵器	甕	口径: (23.4) 器高: △4.5	口縁部 1/12	外・新・内: 2.5Y8/1 灰白	φ 1mm程度のチャート、長石、石灰を含む	外・内面: 回転ヨコナデ	
	71	25	茶褐色土層	須恵器	甕	器高: △4.0	口縁部 破片	外・新・内: 2.5Y8/2 灰白	φ 1mm程度のチャート、長石、クサリ礫を含む	外面: カキメ 内面: 回転ナデ	
	72	25	茶褐色土層	須恵器	甕	口径: (96.8) 器高: △5.35	口縁部 1/10	外: 10YR6/1黄褐色 新: 2.5Y7/29C1 内: 2.5Y6/1黄灰	φ 1mm程度の砂粒を含む	外・内面: 回転ヨコナデ	T K 208 内面: 口縁部に自然釉
	73	25	茶褐色土層	須恵器	甕	口径: (40.0) 器高: △4.5	口縁部 1/10	外・新・内: 2.5Y7/1 灰白	φ 0.5mm程度の砂粒を含む	外・内面: 回転ヨコナデ	
	74	25	茶褐色土層	須恵器	器台	口径: (33.2) 器高: △14.3	口縁部1/8 体部1/6	外: N5/灰 新: 10YR6/2灰黄褐色 内: 2.5Y6/1黄灰	φ 2mm以下の砂粒を含む	外面: 回転ヨコナデ 内面: 回転ヨコナデ	T K 208

表3 出土遺物観察表(4)

調査 次数	探検 番号	図面 番号	出土地	器種	器形	流量 (cm)	残存	色調	胎土	調整	備考	
83-1	75	25	茶褐色土層	須恵器	短圓筒	口径: (19.0) 胴径: (13.0) 器高: △3.55	口縁~ 体部1/8	外: 2.5Y8/2灰白, N6/灰 新・内: 2.5Y8/2灰白	φ0.5mm程度のチャート、長石を含む	外・内面: ヨコナデ、ナデ		
	76	25	茶褐色土層	須恵器	甕	口径: (18.35) 器高: △4.3	口縁・ 頸部1/8	外: 2.5Y4/1黄灰 新: 7.5Y8/6浅黄褐色 内: 10YR7/3に赤い黄褐色	φ1mm程度のチャート、長石、クサリ礫を含む	外・内面: ヨコナデ		
	77	25	茶褐色土層	瓦器	椀	口径: (14.7) 器高: △3.45		5/16	外・新・内: 2.5Y8/1・8/2灰白, N6/灰	φ5mm程度の砂粒を含む	外面: ヨコナデ、 ユビオサエ 内面: ナデ、平行 線文	須恵器
	78	25	茶褐色土層	瓦器	椀	口径: (15.4) 器高: △2.2 高台径: 6.4		1/8	外: 2.5Y8/1灰白 新・内: 2.5Y8/2灰白	φ2mm程度の砂粒を含む	外面: ヨコナデ、 ユビオサエ 内面: ハケ、ミガキ	精華Ⅲ3 内面: 蓋部 に沈泥
	79	25	茶褐色土層	白磁	甕	器高: △3.3	口縁部 破片		軸: 5Y8/1灰白, N8/灰白	密	外・内面: 魚鱗	白磁焼 X1型
	80	25	茶褐色土層	白磁	甕	高台径: (4.7) 器高: △2.4	高台 1/2		軸: 5Y6/2灰オリーブ 外・新・内: 5Y7/1 灰白	密	外面: 回転ヘラケ ズリ 内面: 魚鱗	
	81	25	茶褐色土層	白磁	皿	高台径: (5.3) 器高: △1.7	高台 1/4		軸: 5Y6/2灰オリーブ 外・新・内: 5Y7/1 灰白	密	外・内面: 魚鱗	
	82	26	包合層	弥生土層	高杯	口径: (23.0) 器高: △6.1	口縁部 1/4		外・新: 7.5YR7/6褐色 内: 10YR7/4に赤い 黄褐色	φ2mm程度の長石、チャート、クサリ礫、石英を含む	外面: ヨコナデ 内面: 磨滅のため 不明	
	83	26	包合層	弥生土層	鉢	口径: (26.55) 器高: △7.6	口縁部 1/8		外: 10YR7/4に赤い 黄褐色、7.5YR6/4 に赤い黄褐色 新: 7.5YR6/6褐色 内: 10YR6/3に赤い 黄褐色	φ1mm程度の長石、チャート、クサリ礫、石英を含む	外面: ヨコナデ、 ハケ 内面: ヘラケズリ、 ナデ	
84	26	包合層	弥生土層	広口甕	口径: (20.4) 器高: △9.0	口縁部 1/16 頸部1/7		外・新・内: 10YR8/2灰白	φ2mm程度の長石、チャート、クサリ礫、石英を含む	外・内面: 磨滅のため 不明		
85	26	包合層	土師器	甕	口径: (18.45) 器高: △3.85	口縁~ 頸部1/8		外: 10YR7/4に赤い 黄褐色、5YR6/6褐色、 2.5Y5/1黄灰 新・内: 10YR7/4 に赤い黄褐色	φ2mm程度の長石、チャート、クサリ礫、石英を含む	外面: ヨコナデ、 ハケ 内面: ナデ	辻編年4 以降	
86	26	包合層	土師器	甕	口径: (21.0) 器高: △6.1	口縁部1/4		外: 10YR7/6明黄褐色 新: 10YR4/1黄褐色 内: 7.5YR7/4に赤い 黄褐色	やや粗	外・内面: 磨滅のため 不明	辻編年4 以降	
87	-	包合層	土師器	甕	口径: (21.8) 器高: △6.6	口縁~ 体部1/10		外: 7.5YR7/6褐色 内: 7.5YR7/4に赤い 黄褐色	やや粗 (φ2~3mm程度の 砂粒を多く含む)	外・内面: 磨滅のため 不明	辻編年4 以降	
88	26	包合層	土師器	甕	口径: (26.3) 器高: △3.9	口縁部 1/7		外・新・内: 7.5YR7/6褐色	φ2mm程度の長石、チャート、クサリ礫を含む	外・内面: ヨコナデ	辻編年4 以降	
89	26	包合層	土師器	把手	長: △5.3 幅: △5.65	把手のみ		外・新・内: 10YR7/4に赤い黄褐色	φ5mm程度の長石、チャート、クサリ礫、石英を含む	外面: ユビナデ 内面: ナデ	辻編年4 以降	
90	26	包合層	土師器	把手	長: △4.7 幅: △6.05	把手のみ		外: 10YR7/4に赤い 黄褐色、7.5YR6/4に赤い 黄褐色 新: 7.5YR6/6褐色 内: 10YR6/3に赤い 黄褐色	φ1.5mm程度の長石、チャート、クサリ礫、石英を含む	外面: ユビナデ 内面: ヘラケズリ、 ナデ	辻編年4 以降	
91	26	包合層	土師器	把手	長: △7.3 幅: △6.95	把手のみ		外・新・内: 7.5YR7/4に赤い黄褐色	φ4mm程度の長石、チャート、クサリ礫、石英を含む	外面: ユビナデ 内面: ヘラケズリ、 ナデ	辻編年4 以降	
92	26	包合層	土師器	把手	長: △6.2 幅: △6.6	把手のみ		外: 10YR7/4に赤い 黄褐色 新: 10YR8/4浅黄褐色	φ3mm程度の長石、チャート、クサリ礫、石英を含む	外面: ユビナデ	辻編年4 以降	
93	26	包合層	土師器	把手	長: △9.0 幅: △8.45	把手のみ		外・新・内: 7.5YR6/4に赤い黄褐色	φ2mm程度の長石、チャート、クサリ礫、石英を含む	外面: ユビナデ 内面: ヘラケズリ、 ユビオサエ、 ナデ	辻編年4 以降	
94	-	包合層	石製品	紡錘車	幅: △3.5 厚さ: 0.8	1/2		外: 7.5YR5/2黄褐色 内: 7.5YR5/4に赤い 黄褐色	滑石	-	重量: 7g	
95	-	包合層	須恵器	杯蓋	口径: 13.15 器高: △3.85	3/8		外: 2.5Y5/1黄灰 内: 2.5Y6/1黄灰	φ1mm程度の砂粒を含む	外面: 回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、 ナデ	T K43	
96	27	包合層	須恵器	杯蓋	口径: (13.45) 器高: △3.3	口縁部1/8 体部3/16		外: 2.5Y5/1黄灰、 2.5Y7/1灰白 新: 2.5Y7/2黄褐色 内: 2.5Y7/1灰白	φ2mm程度の砂粒を含む	外面: 回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ	T K43	
97	-	包合層	須恵器	杯蓋	口径: (14.0) 器高: △3.3	口縁部~ 体部1/8		外: 2.5Y7/1灰白 内: 10Y R7/1灰白	密 (φ1~2mm程度の砂粒 を含む)	外面: 回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ	T K43	
98	27	包合層	須恵器	杯蓋	口径: (14.65) 器高: 4.3	ほぼ定形		外: N5/9R、 10YR6/1黄褐色 内: 10Y R 7/1灰白	φ2mm程度の砂粒を含む	外面: 回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、 ナデ	T K43	
99	27	包合層	須恵器	杯蓋	口径: (14.8) 器高: △3.9	口縁部 1/5		外: 2.5Y5/1黄灰 新・内: 2.5Y6/1黄灰	φ3mm程度の砂粒を含む	外面: 回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ	T K43	

表3 出土遺物観察表(5)

調査 次数	探検 番号	発掘 番号	出土地	器種	形状	流量 (cm)	残存	色調	胎土	調製	備考
	100	-	包含層	須恵器	杯身	器高:△2.95	口縁~ 底部1/6	外・新・内: 10YR7/1灰白, 10YR6/1褐灰	φ0.5mm程度の砂粒を含む	外面:同転ナデ, 内面:同転ナデ	TK 43
	101	-	包含層	須恵器	杯身	器高:△2.8	口縁~ 体部破片	外:10YR6/1褐灰 内:2.5Y7/1灰白	密(φ1mm程度の砂粒を含む)	外面:同転ナデ, 内面:同転ナデ	TK 43
	102	-	包含層	須恵器	杯身	器高:△3.7	口縁~ 体部破片	外:5Y7/1灰白 新:7.5Y7/1灰白 内:2.5Y7/1灰白	φ1~3mm程度の砂粒を含む	外面:同転ナデ, 内面:同転ナデ	TK 43
	103	-	包含層	須恵器	杯身	器高:△3.9	口縁~ 体部破片	外:2.5Y5/1黄灰 内:2.5Y7/1灰白	密(φ1mm程度の砂粒を含む)	外面:同転ナデ, 内面:同転ナデ	TK 43
	104	-	包含層	須恵器	杯身	口径:12.9 器高:4.5	口縁~ 体部1/10 底部1/2	外・内:10YR7/1 灰白	φ1mm程度の砂粒を含む	外面:同転ナデ, 内面:同転ナデ	TK 43
	105	-	包含層	須恵器	杯身	口径:12.0 器高:△3.2	1/2	外:2.5Y7/1灰白 内:5Y7/1灰白	密(φ1~2mm程度の砂粒を含む)	外面:同転ナデ, 内面:同転ナデ	TK 209
	106	27	包含層	須恵器	杯身	口径:(12.5) 器高:△3.75	口縁~ 底部1/8	外:10YR5/1褐灰 新:2.5Y7/2灰黄 内:10YR6/1褐灰	φ1mm程度の砂粒を含む	外面:同転ナデ, 内面:同転ナデ	TK 209
	107	-	包含層	須恵器	杯身	口径:(12.6) 器高:△4.2	口縁部 1/10 体部1/4	外:2.5Y7/2灰黄 内:5Y7/2灰白	密(φ1~2mm程度の砂粒を含む)	外面:同転ナデ, 内面:同転ナデ	TK 209
	108	-	包含層	須恵器	杯身	口径:(12.8) 器高:△4.2	口縁部1/2 体部1/2	外:2.5Y6/1黄灰 新:5Y7/1灰白 内:3G/灰	φ1mm程度の砂粒を含む	外面:同転ナデ, 内面:同転ナデ	TK 209
	109	-	包含層	須恵器	杯身	口径:13.4 器高:△3.7	口縁~ 体部5/16	外・内:N6/灰	φ0.5mm程度の砂粒を含む	外面:同転ナデ, 内面:同転ナデ	TK 209
	110	27	包含層	須恵器	杯身	口径:13.6 器高:4.35	ほぼ完形	外:5Y7/1灰白 内:10Y7/1灰白	φ1~3mm程度の砂粒を含む	外面:同転ナデ, 内面:同転ナデ	TK 209
	111	-	包含層	須恵器	杯身	口径:(14.0) 器高:△3.1	口縁~ 体部3/16	外:10YR6/1褐灰 新:7.5Y7/2明褐灰 内:10YR7/1灰白	φ2mm程度の砂粒を含む	外面:同転ナデ, 内面:同転ナデ	TK 209
	112	27	包含層	須恵器	杯身	口径:10.1 器高:3.85	口縁~ 体部5/8 底部4/5	外・内:N5/灰	φ1mm程度の砂粒を含む	外面:同転ナデ, 内面:同転ナデ	飛鳥 I
	113	27	包含層	須恵器	蓋	口径:(13.0) 器高:△2.4	口縁部1/8	外:2.5Y5/1黄灰 新:2.5Y7/2灰黄 内:2.5Y6/1黄灰	φ2mm程度の砂粒を含む	外・内面:同転ナ デ	
	114	-	包含層	須恵器	蓋	腹径:(8.5) 器高:△3.9	体~ 底部5/16	外:2.5Y5/1黄灰, 2.5Y6/1黄灰 新・内:2.5Y6/1黄灰	φ0.5mm程度の砂粒を含む	外面:同転ナデ, 内面:同転ナデ	TK 43 内面: 自然釉
	115	27	包含層	須恵器	蓋	腹径:(10.25) 器高:△6.75	体部1/3	外:10YR7/1灰白, 10YR6/1褐灰 新・内:10YR6/1 褐灰	φ3mm程度の砂粒を含む	外面:同転ナデ, 内面:同転ナデ	TK 43
	116	27	包含層	須恵器	提瓶	口径:φ7.1 器高:△5.3	口縁部 5/16 瓶部破片	外・新:2.5Y6/1黄灰 内:2.5Y7/1灰白	φ1mm程度の砂粒を含む	外・内面:ヨコナ デ	
	117	27	包含層	須恵器	甕	口径:(17.3) 器高:△4.15	口縁部 3/16	外:N6/灰 新:5Y6/1灰 内:10YR7/1灰白	φ3mm程度の砂粒を含む	外・内面:同転ナ デ	TK 10 ~TK 43
	118	27	包含層	須恵器	甕	口径:(18.4) 器高:△4.9	口縁部 3/16	外:2.5Y6/2灰黄 新:2.5Y6/1黄灰 内:2.5Y6/1黄灰, 2.5Y7/2灰黄	φ2mm程度の砂粒を含む	外・内面:同転ナ デ	TK 10 ~TK 43
	119	27	包含層	須恵器	甕	口径:(19.0) 器高:△3.65	口縁部1/8	外・新・内:N5/灰	φ1mm程度の砂粒を含む	外面:同転ナデ, 内面:同転ナデ	TK 10 ~TK 43
	120	27	土坑4	土師器	甕	口径:(21.6) 器高:△14.15	口縁~ 体部上半 1/2	外:10YR5/2灰黄 新:7.5Y7/4に赤い 粉, 10YR5/2灰黄 新, 10YR7/4に赤い 顔料, 10YR6/1褐灰 内:10YR6/4・ 10YR7/3に赤い黄粉	やや粗(φ10mm程度の小 石・石英・長石をやや多 く含む)	外面:ヨコナデ, 内面:ヨコナデ, ケナリ	
	121	27	ビット1	須恵器	甕	口径:(21.4) 器高:△3.8	口縁部 3/16	外・新・内:N5/灰	φ1mm程度の砂粒を含む	外面:同転ナデ, 内面:同転ナデ	TK 10 ~TK 43
	122	26	ビット6	土師器	把手	長:△5.3 幅:△6.45	把手のみ	外・新: 7.5YR7/4に赤い粉	φ3mm程度の長石, チャー ト, ケナリ, 石英を含む	外面:ヨコナデ	辻編年 3~4
	123	26	ビット6	土師器	把手	長:△5.4 幅:△5.45	把手のみ	外・新・内: 10YR8/3黄灰粉	φ2mm程度の長石, チャー ト, ケナリ, 石英を含む	外面:ヨコナデ	辻編年4

表3 出土遺物観察表(6)

調査年度	発掘番号	図面番号	出土地	種類	器形	流量 (cm)	残存	色調	胎土	調整	備考
96-1	124	27	包含層	石部	石函	口:△2.6 底:1.75	ほぼ完形	—	サヌカイト	—	重量: 3g
	125	27	包含層	須恵系	杯形	口径:11.8 底高:1.5	口縁~ 底部1/2	外・新・内: N6/灰	φ0.5m程度の砂粒・黒色粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ, 内面: 回転ナデ	T K 43
99-2	126	—	包含層	須恵系	杯形	口径:(14.9) 底高:△3.35	口縁部・ 体部3/16	外: 2.5Y7/2R黄 新・内: 2.5Y8/2R白	φ2m以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ, 内面: 回転ナデ	T K 43
	127	30	包含層	須恵系	杯形	口径:15.25 底高:4.4	口縁・ 体部1/2 天井部 完形	外: N6/灰, 2.5Y6/2 黄 新: 7.5Y6/1灰 内: 7.5Y7/1灰白	φ3m以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ, 内面: 回転ナデ	T K 43 外面: 自然釉
	128	30	包含層	須恵系	杯形	口径:14.0 底高:3.8	完形	外: 2.5Y7/1灰白 内: 5Y7/1灰白	φ3m以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ, 内面: 回転ナデ, ナデ	T K 209
	129	—	包含層	須恵系	杯形	口径:(14.5) 底高:3.8	口縁部1/4 体部・ 天井部1/3	外・内: 5Y7/1灰白 新: 5Y6/1灰	φ2m以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ, 内面: 回転ナデ, ナデ	T K 209 粘土積層
	130	30	包含層	須恵系	杯形	口径:14.6 底高:4.05	口縁部7/8 体部・ 天井部 完形	外: 2.5Y6/1黄灰, 2.5Y6/2R黄 新: 5Y5/1灰 内: 7.5Y6/1灰	φ2m以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ, 内面: 回転ナデ, ナデ	T K 209 外面: 天井 部大きく歪む, 自然釉
	131	—	包含層	須恵系	杯形	口径:(14.7) 底高:△3.7	口縁部・ 体部1/4	外: 5Y5/1灰 新: 2.5Y7/2R黄 内: 2.5Y7/1灰白	φ1m以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ, 内面: 回転ナデ	T K 209
	132	28	包含層	須恵系	蓋	口径:(14.7) 底高:△2.75	口縁部・ 体部1/8	外: 2.5Y7/1灰白, 2.5Y7/2R黄 新・内: 2.5Y7/1灰白	φ1.5m以下の砂粒を含む	外・内面: 回転ナ デ	外面: 自然釉
	133	30	包含層	須恵系	杯形	口径:11.2 底高:4.15	ほぼ完形	外: 2.5Y6/1黄灰 新: 5Y6/1灰 内: 5Y7/1灰白	φ3m以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ, 内面: 回転ナデ, ナデ	飛鳥1
	134	28	包含層	須恵系	杯形	口径:(13.2) 底高:△3.4	口縁部1/4 体部1/8	外・内: 5Y6/1灰	φ0.5m以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ, 内面: 回転ナデ, ナデ	飛鳥1
	135	—	包含層	須恵系	杯形	口径:(10.4) 底高:△3.4	口縁~ 底部1/4	外: N4/灰, 5Y7/1 灰白 新: 5YR6/1黄灰 内: 2.5Y7/1灰白	φ1.5m程度の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ, ナデ 内面: 回転ナデ	T K 43
	136	—	包含層	須恵系	杯形	口径:(11.7) 底高:3.85	口縁・ 体部5/16 底部1/3	外: 10YR6/2R黄 新: 2.5Y6/2R黄 新: 10YR6/2R黄 新: 5YR5/2R黄 内: 10YR6/1黄灰	φ3m以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ, 内面: 回転ナデ, ナデ	T K 209
	137	—	包含層	須恵系	杯形	口径:(11.9) 底高:△3.6	口縁~ 底部1/4	外: 7.5Y7/1灰白, 2.5Y6/1灰白 新・内: 5Y7/1灰白	φ1m以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ, 内面: 回転ナデ, ナデ	T K 209
	138	30	包含層	須恵系	杯形	口径:11.65 底高:3.8	ほぼ完形	外・内: N6/灰	φ5m以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ, 内面: 回転ナデ, ナデ	T K 209
	139	—	包含層	須恵系	杯形	口径:(12.75) 底高:△3.5	口縁部1/4 体部・ 底部1/3	外: 5Y7/1灰白, 5Y6/1灰 新・内: 5Y7/1灰白	φ2m以下の砂粒を含む	外面: 回転ナ デ, 回転ヘラケズリ, 内面: 回転ナデ, ナデ	T K 209
	140	30	包含層	須恵系	杯形	口径:12.85 底高:4.2	ほぼ完形	外: 2.5Y6/2R黄 新: 5P86/1黄灰, 5Y7/1灰白 内: 7.5Y6/1灰	φ2m以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ, 内面: 回転ナデ, ナデ	T K 209 外面: 自然 釉・底部分 近・別個体 の付着痕
	141	30	包含層	須恵系	杯形	口径:12.9 底高:4.35	完形	外・内: 10Y7/1灰白	φ2m以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ, 内面: 回転ナデ, ナデ	T K 209 外面: 自然釉
	142	30	包含層	須恵系	杯形	口径:13.2 底高:3.9	ほぼ完形	外: 7.5Y6/1灰, 7.5Y7/1灰白 内: 7.5Y7/1灰白	φ3m以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ, 内面: 回転ナデ, ナデ	T K 209
143	30	包含層	須恵系	杯形	口径:12.95 底高:4.2	ほぼ完形	外: 2.5Y6/1黄灰, 2.5Y6/2R黄 新: NS/灰	φ1m以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ, 内面: 回転ナデ, ナデ	T K 209 外面: 自然釉	
144	30	包含層	須恵系	杯形	口径:13.35 底高:3.8	口縁・ 体部5/8 底部2/3	外: 5Y6/1灰 新: 10YR6/3C-赤い 黄釉 内: 2.5Y7/1灰白	φ3m以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ, 内面: 回転ナデ, ナデ	T K 209 外面: 自然釉	
145	—	包含層	須恵系	杯形	口径:(13.3) 底高:△3.2	口縁~ 底部1/3	外: 10YR6/1黄灰, 5Y5/1灰 新・内: 5Y6/1灰	φ1m以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ, 内面: 回転ナデ, ナデ	T K 209 外面受部~ 内面: 自然 釉	
146	—	包含層	須恵系	杯形	口径:(13.45) 底高:△3.4	口縁~ 体部1/4	外・内: N7/灰白	φ1m以下の砂粒・黒色粒 を若干含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ, 内面: 回転ナデ, ナデ	T K 209	
147	—	包含層	須恵系	杯形	口径:(13.85) 底高:△3.6	口縁~ 体部1/6	外: 2.5Y7/1灰白, NS/灰 新・内: 5Y7/1灰白	φ1m以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ, 内面: 回転ナデ, ナデ	T K 209	

表3 出土物観察表(7)

調査 次数	埋蔵 番号	図録 番号	出土地	器種	器形	流量 (cm)	残存	色調	胎土	肌裏	備考
99-2	148	—	包含層	須恵器	杯身	口径:(14.15) 器高:△3.85	口縁~ 底部3/16	外・新・内:2.5Y7/2 灰黄	φ0.5mm以下の砂粒を含む	外面:回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ、 ナデ	T K 209
	149	—	包含層	須恵器	杯身	口径:(14.1) 器高:△3.65	口縁~ 体部1/4	外:2.5Y5/2暗灰黄、 2.5Y6/2灰黄 新・内:2.5Y6/2灰黄	φ1mm以下の砂粒を含む	外面:回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ、 ナデ	T K 209 外面: 自然釉
	150	—	包含層	須恵器	杯身	口径:(13.7) 器高:3.9	口縁~ 体部3/16 底部1/2	外・内:5Y6/1灰	φ1mm以下の砂粒を含む	外面:回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ、 ナデ	T K 209
	151	—	包含層	須恵器	杯身	口径:(15.35) 器高:△5.05	口縁部1/6 体部3/16 底部1/3	外:5Y6/1灰 新:10YR7/2に赤い 黄緑 内:5Y7/1灰白	φ1mm以下の砂粒を含む	外面:回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ、 ナデ	T K 209
	152	—	包含層	須恵器	杯身	口径:(13.6) 器高:△4.2	口縁~ 体部3/16 底部3/16	外・新・内:5Y7/1 灰白、2.5Y7/1灰白	φ2mm以下の砂粒を含む	外面:回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ、 ナデ	T K 209
	153	—	包含層	須恵器	杯身	口径:(12.9) 器高:△4.2	口縁部~ 底部1/2	外:2.5Y6/1黄灰 新:2.5Y7/2灰黄 内:2.5Y7/1灰白	φ1mm以下の砂粒を含む	外面:回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ、 ナデ	飛鳥1 外面: 自然釉
	154	30	包含層	須恵器	杯身	口径:12.75 器高:3.8	ほぼ定形	外・新:2.5Y6/2灰黄 内:2.5Y8/2灰白	φ1mm以下の砂粒を含む	外面:回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ、 ナデ	飛鳥1 外面: 自然釉
	155	30	包含層	須恵器	杯身	口径:9.5~ 12.6 器高:4.2	定形	外・内:2.5Y7/1灰白	φ1mm以下の砂粒を含む	外面:回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ、 ナデ	飛鳥1 全体に大き く赤い 外面:灰黄
	156	—	包含層	須恵器	杯身	口径:(12.25) 器高:△3.95	口縁~ 体部1/3 底部1/4	外:N6/灰、7.5Y6/1 灰、新・内:7.5Y7/1灰白	φ1mm以下の砂粒を含む	外面:回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ、 ナデ	飛鳥1
	157	31	須恵器	須恵器	杯身	口径:10.0 器高:3.95	定形	外:2.5Y6/2灰黄 新・内:2.5Y8/3淡黄	φ2mm以下の砂粒を含む	外面:回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ、 ナデ	飛鳥1
	158	31	包含層	須恵器	杯身	口径:10.5 器高:3.75	定形	外・内:2.5Y7/1灰白 新:2.5Y6/1灰黄	φ3mm以下の砂粒を若干含む	外面:回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ、 ナデ	飛鳥1 外中:底部 に火傷
	159	31	包含層	須恵器	有蓋 高杯蓋	口径:15.3 器高:4.9	定形	外:N4/灰、N6/灰 内:7.5Y6/1灰	φ2mm以下の砂粒を含む	外面:回転ナデ、 回転ヘラケズリ、 ナデ 内面:回転ナデ、 ナデ	T K 43
	160	31	包含層	須恵器	杯G	口径:12.0 器高:3.3	ほぼ定形	外:5Y6/1灰 新:2.5Y8/1灰白 内:2.5Y8/2灰白	中や底(φ2mm程度の石粒 を微量に含む)	外面:回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ、 ナデ	飛鳥1 外面: 自然釉
	161	31	包含層	須恵器	皿	口径:14.6 器径:(8.6) 器高:△9.1	胴部1/3 体部、 底部定形	外・新・内:2.5Y7/1 灰白	φ1mm以下の砂粒を含む	外面:回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ、 ナデ	T K 209 焼成前穿孔
	162	—	包含層	須恵器	皿	口径:(13.7) 器径:9.0 器高:17.7	口縁部1/8 胴部~ 底部 ほぼ定形	外:2.5Y7/1灰白 新・内:2.5Y6/2灰黄	φ2mm以下の砂粒を含む	外面:回転ナデ 縁部赤黄、回転 ヘラケズリ 内面:回転ナデ	T K 209 外面(胴部 ~)内面 部:灰がぶ りとなり 白自然釉 焼成前穿孔
	163	28	包含層	須恵器	提瓶	器高:△6.2	胴部1/3 斜部1/4	外:2.5Y7/1灰白 新:N6/灰 内:N7/灰白、N4/灰	φ1.5mm以下の砂粒を含む	外・内面:回転ナ デ	T K 43か 外面:自然 釉
	164	28	包含層	須恵器	甕	口径:(15.4) 器高:△4.9	口縁部1/6 胴部1/4	外・内:5Y7/1灰白 新:5Y6/1灰	φ1mm以下の砂粒を含む	外面:回転ヨコナ デ、中や底 内面:回転ヨコ ナデ、同心門 当て具痕	T K 10 ~T K 43 口縁部赤み
	165	28	包含層	須恵器	甕	口径:(23.65) 器径:(14.05) 器高:△6.4	口縁部 1/16 胴部1/8	外:10YR7/2に赤い 黄緑、10YR7/1 灰白、10YR5/1 黄緑、10YR8/2 灰白、2.5Y7/1 灰白	φ2mm以下の砂粒を含む	外面:回転ナデ、 平行タタキ 内面:回転ナデ、 同心門当て具 痕	T K 43 外面:1層 ~2層 自然釉
	166	28	包含層	須恵器	器台	口径:(24.1) 器径:△4.55	口縁部1/8	外:2.5Y7/1灰白、 2.5Y6/1灰黄 新・内:2.5Y7/1灰白	φ1mm程度の砂粒を含む	外面:回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ、 ナデ	外面: 自然釉
	167	28	包含層	土師器	甕	口径:(15.5) 器径:(14.05) 器高:△5.5	口縁部 1/12 体部1/8	外:10YR5/4に赤い 黄緑、10YR5/2 灰黄、10YR5/3 に赤い黄緑	φ3mm程度の長石、チャ ー、クサリ礫、石英を含む	外面:ヨコナデ、 ハケ 内面:ヨコナデ、 ヘラケズリ	辻編年4
168	28	包含層	土師器	把手	長:△10.25 幅:△7.85	把手とその 体部破片	外・新・内: 7.5YR6/0橙	φ3mm程度の長石、チャ ー、クサリ礫、 雲母を含む	外面:ナデ、ハ ケ 内面:ナデ	辻編年4	
169	31	包含層	土師器	皿	口径:8.1 器高:1.6	定形	外・新・内: 10YR7/4に赤い黄 緑	φ0.5mm程度の長石、チャ ー、クサリ礫、 雲母を含む	外面:ヨコナデ、 外周: 内面:ヨコナ デ	外面:ヨコナ デ、 外周: 内面: ヨコナ デ	
170	31	包含層	土師器	皿	口径:8.2 器高:△1.7	ほぼ定形	外・新・内: 10YR7/4に赤い黄 緑	φ0.5mm程度の長石、チャ ー、クサリ礫、 雲母を含む	外面:ヨコナデ、 外周: 内面:ヨコナ デ	外面:ヨコナ デ、 外周: 内面: ヨコナ デ	

表3 出土遺物観察表(8)

調査 次数	探検 番号	図面 番号	出土地	種類	器形	寸法 (cm)	残存	色調	胎土	調整	備考
	171	31	包含層	土師器	皿	口径: 8.4 器高: △1.6	口径→ 底部2/3	外・新・内: 10YR7/4に赤い黄緑	φ0.5mm程度の長石、チャード、クサリ礫を含む	外面: ヨコナデ、 ユビオサエ 内面: ヨコナデ、 ナデ	
	172	—	包含層	土師器	皿	口径: (8.4) 器高: △1.5	口径部 7/16 体部1/2 底部5/8	外・新・内: 10YR7/4に赤い黄緑	φ0.5mm程度の長石、チャード、クサリ礫、雲母を含む	外面: ヨコナデ、 ユビオサエ 内面: ヨコナデ、 ナデ	
	173	28	包含層	青磁	碗	口径: (14.2) 器高: △3.75	口径→ 体部1/8	施: 5Y/2灰オリーブ 新: 5Y7/1灰白	密	外・内: 施釉	
	174	—	包含層	瓦器	碗	口径: (12.8) 器高: △3.0	口径→ 体部1/4	外・内: 2.5Y8/1灰白	φ1mm以下の砂粒を含む	外面: ヨコナデ、 ユビオサエ 内面: ヨコナデ、 ナデ	
	175	—	溝1	土師器	皿	口径: (11.8) 器高: △2.05	口径部1/4 体部3/16 底部1/8	外・新・内: 10YR7/4に赤い黄緑	φ1mm程度の長石、チャード、クサリ礫	外面: ヨコナデ、 ユビオサエ 内面: ヨコナデ、 ナデ	
	176	28	溝1	土師器	無縁直 口鉢	口径: (20.7) 器高: △4.2	口径→ 体部1/8	外・新・内: 7.5YR7/4に赤い黄	φ1mm程度の長石、チャード、クサリ礫、石英を含む	外・内面: 磨滅の ため不明	辻編年 3~4
	177	28	溝1	土師器	有縁輪 形高杯	口径: (21.45) 器高: △8.4	口径→ 体部3/16	外: 7.5YR6/6 新・内: 10YR8/6 黄緑	φ2mm程度の長石、チャード、クサリ礫を含む	外面: 磨滅のため 不明 内面: ミガキ	辻編年 3~4
	178	28	溝1	土師器	有縁輪 形高杯	口径: (24.0) 器高: △7.3	口径部1/8 体部3/16	外: 7.5YR7/6 新: 5YR6/6 内: 7.5YR7/6 黄緑	φ3mm程度の長石、チャード、クサリ礫、石英を含む	外面: ハケ 内面: 磨滅のため 不明	辻編年 3~4
	179	28	溝1	土師器	把手	長: △6.2 幅: 8.7	把手のみ	外・内: 7.5YR6/4 に赤い黄 新: 5Y5/1灰	φ3mm程度の長石、チャード、クサリ礫、石英を含む	外面: ナデ、ハケ 内面: ナデ	辻編年 3~4
	180	28	溝1	土師器	甕	口径: (20.0) 器高: △6.25	口径→ 胴部1/6	外・新・内: 10YR7/4 に赤い黄緑 内: 10YR7/3に赤い 黄緑	φ1mm程度の長石、チャード、クサリ礫、石英を含む	外面: ヨコナデ、 ハケ 内面: ヨコナデ、 ヘラケズリ	辻編年 3~4
	181	28	溝1	石製品	紡錘車	直径: 3.6 厚: 1.7 孔径: 0.6	完形	—	滑石	—	重量: 35g
	182	29	溝2	土師器	鉢	口径: (16.2) 器高: △6.75	口径→ 体部1/8	外: 10YR6/3に赤い 黄緑 新: 10YR8/2R白 10YR7/3に赤い黄緑 内: 10YR8/2R白 10YR6/3に赤い黄緑	φ1.5mm程度の長石、チャード、クサリ礫、石英を含む	外・内面: ナデ	外面: 曇り着
99-2	183	29	溝2	土師器	皿	口径: (28.6) 器高: △5.7	口径→ 体部1/8	外・新・内: 7.5YR7/4に赤い黄	φ3mm程度の長石、チャード、クサリ礫を含む	外面: ヨコナデ、 ハケ 内面: ヨコナデ、 ハケ、ヘラケズリ	
	184	29	溝2	土師器	甕	口径: (11.85) 器高: (12.8) 器高: △11.75	口径部1/4 体・底部 1/2	外: 7.5YR7/4に赤い 黄緑 新: 10YR7/4に赤い 黄緑 内: 10YR8/3 黄緑	φ1.5mm程度の長石、チャード、石英を含む	外面: ヨコナデ、 ハケ 内面: ヨコナデ、 ヘラケズリ	外面: 曇り着
	185	31	溝2	土師器	長脚燗	口径: (18.8) 器高: (23.25) 器高: △32.7	口径→ 体部1/4	外・新・内: 10YR8/6黄緑	φ4mm程度の長石、チャード、クサリ礫を含む	外面: ナデ、ハケ 内面: ナデ、板ナ	
	186	—	溝2	土師器	把手	長: △4.4 幅: 4.8 厚: 1.3	把手のみ	外・新・内: 7.5YR8/6黄緑	φ1.5mm程度の長石、チャード、石英を含む	外・内面: ナデ	
	187	29	溝2	土師器	把手付 燗	器高: △13.6	把手とその 両面片 の断面	外・新・内: 10YR7/4に赤い黄緑	φ1.5mm以下の長石、チャード、石英を含む	外面: 格子タタキ 把手部はナデ 内面: ナデ、平行 線が刻み入	地成不良の 横式系土器 か?
	188	—	溝2	須恵器	杯蓋	口径: (11.85) 器高: △3.4	口径→ 体部5/16	外・新・内: 2.5Y7/1灰白	φ1mm以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、 ナデ	TK10
	189	—	溝2	須恵器	杯蓋	口径: (13.2) 器高: △3.8	1/2	外: N6/灰、N5/灰 内: N8/灰	密(φ3mm程度の石粒を少量含む)	外面: 回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、 ナデ	TK43
	190	31	溝2	須恵器	杯蓋	口径: (13.5) 器高: △3.8	ほぼ完形	外・内: N6/灰、 N7/灰白 新: N8/灰	φ2mm以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、 ナデ	TK43
	191	—	溝2	須恵器	杯蓋	口径: (13.9) 器高: △4.2	口径部・ 体部5/16 天井部1/2	外・新・内: 5Y7/1灰白	φ1.5mm以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、 ナデ	TK43 口径部のみ
	192	—	溝2	須恵器	杯蓋	口径: (14.6) 器高: 4.5	1/2	外・新・内: 2.5Y7/1灰白	φ1mm以下の砂粒、黒色粒 を若干含む	外面: 回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、 ナデ	TK43 口径部のみ
	193	—	溝2	須恵器	杯蓋	口径: (14.2) 器高: 3.2	1/2	外: N5/灰 新: N7/灰白 内: N6/灰	φ6mm以下の石粒を少量含む	外面: 回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、 ナデ	TK209
	194	—	溝2	須恵器	杯蓋	口径: (14.8) 器高: 4.0	口径部1/4 体部1/3 天井部1/2	外: 2.5Y7/1灰白 新: 5Y7/1灰白 内: N7/灰白	φ1mm以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、 ナデ	TK209

表3 出土遺物観察表(9)

調査 次数	探検 番号	発掘 番号	出土地	器種	形状	流量 (cm)	残存	色調	胎土	調整	備考
	195	31	溝2	須恵器	杯蓋	口径: 15.65 器高: 5.0	ほぼ完形	外: 2.5Y8/1灰白, 2.5Y8/2灰白 内: 2.5Y8/2灰白	φ 3mm以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ, ナデ	T K 209 外面: 天目 内部に亀裂
	196	31	溝2	須恵器	杯蓋	口径: (15.5) 器高: 3.6	口縁へ 一部1/3 天目部1/3	外: N5/灰, N6/灰 新・内: N6/灰	φ 2mm以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ, ナデ	T K 43
	197	32	溝2	須恵器	杯身	口径: 12.3 器高: 4.55	完形	外: N6/灰, N5/灰 内: N6/灰	φ 3mm以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ, ナデ	T K 43
	198	—	溝2	須恵器	杯身	口径: (13.1) 器高: 3.87	1/5	外: 2.5Y8/1灰白 新: 5Y6/1灰 内: N8/灰白	密 (φ 1mm以下の石粒を少量含む)	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ, ナデ	T K 43
	199	32	溝2	須恵器	杯身	口径: 13.0 器高: 4.3	ほぼ完形	外: 5Y6/1灰, 2.5Y7/2灰黄 新: 2.5Y6/1灰黄 内: N8/灰白	やや密 (φ 3mm程度の石粒をやや多く含む)	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ, ナデ	T K 43 外面: 受け 部に重む破 き痕
	200	32	溝2	須恵器	杯身	口径: 13.05 器高: 4.35	口縁へ 底部1/2	外・新・内: 2.5Y7/1 灰白	φ 1mm以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ, ナデ	T K 209
	201	—	溝2	須恵器	杯身	口径: (10.0) 器高: △3.1	1/2	外: 2.5Y7/1灰白, N7/灰白 新・内: N7/灰白	密 (φ 1mm以下の石粒を少量含む)	外・内面: 回転ナ デ, ナデ	T K 209
	202	—	溝2	須恵器	杯身	口径: (13.3) 器高: △3.7	口縁へ 体部5/16	外: N6/灰 新・内: N7/灰白	φ 1mm以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ, ナデ	T K 209 外面: 自然焼
	203	—	溝2	須恵器	杯身	口径: (12.3) 器高: 3.5	口縁部1/8 体・底部 1/4	外・新・内: 2.5Y7/1 灰白	φ 2mm以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ, ナデ	T K 209
	204	—	溝2	須恵器	杯身	口径: △3.5	口縁・ 体部3/16 底部1/4	外・新・内: 5Y6/1 灰, 2.5Y7/1灰白	φ 0.5mm以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ, ナデ	T K 209
	205	—	溝2	須恵器	杯身	口径: (12.0) 器高: 4.25	口縁部3/8 体・底部 1/2	外: 2.5Y7/1灰白 新: 5Y7/1灰白 内: N7/灰白	φ 1.5mm以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ, ナデ	T K 209 口縁部赤み
99.2	206	32	溝2	須恵器	杯身	口径: 12.3 器高: 4.75	2/3	外: N8/灰白, N5/ 灰, 2.5Y6/1灰黄 新: 5Y7/2灰黄 内: N8/灰白	緻密 (φ 1mm以下の石粒を 微量に含む)	外面: 回転ナデ, 底部未調整 内面: 回転ナデ	飛鳥1
	207	29	溝2	須恵器	高杯	口径: (11.2) 器高: △3.75	口縁部1/8 底部1/5	外: N6/灰, 5Y7/1 灰白 新: 2.5Y7/3灰黄, N5/灰 内: N7/灰白, N8/灰白	密 (φ 3mm以下の石粒を少量含む)	外面: 回転ナデ, 磨削点文, ナデ 内面: 回転ナデ	T K 43
	208	32	溝2	須恵器	有蓋 高杯	口径: 12.4 器高: 10.35 器高: 10.8	1/2	外: 2.5Y7/1灰白, N7/灰白, N6/灰 新: N7/灰白 内: N6/灰	緻密 (φ 1mm以下の石粒を 微量に含む)	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ, 回転ナデ 内面: 回転ナデ	T K 43 円筒部少し 孔3方向
	209	29	溝2	須恵器	器台	口径: (16.9) 器高: △7.4	口縁・ 体部1/2	外: 2.5Y8/1灰白, 2.5Y7/1灰白 新: 2.5Y8/1灰白 内: 5Y8/1灰白	φ 1mm以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, カキメ, 回転ヘラ ケズリ 内面: 回転ナデ	外面: 磨む 痕き痕
	210	32	溝2	須恵器	短束壺	口径: 9.2 器高: 5.55	完形	外: 10Y7/1灰白, N6/灰 内: 10Y7/1灰白	φ 1.5mm以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 内面: 回転ナデ	T K 10
	211	29	溝2	須恵器	短束壺	口径: (7.9) 器高: (12.2) 器高: △8.25	口縁・ 体部5/8 体・底部 1/2	外・内: N6/灰 新: N7/灰白	φ 3mm以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ, コビキヤエ	T K 10
	212	—	溝2	須恵器	壺	口径: (7.65) 器高: (18.2)	体部上半 1/12	外: N7/灰白 新・内: 5Y7/1灰白	φ 0.5mm以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 内面: 回転ナデ	
	213	32	溝2	須恵器	壺	口径: (15.35) 器高: △14.15	頸部1/4 胴部1/3 体部3/4 底部4/5	外・新・内: 2.5Y7/1灰白	φ 1.5mm以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ, コビキヤエ	
	214	29	溝2	須恵器	甗	口径: (17.5) 器高: △16.35	口縁・ 頸・体部 1/4	外・内: 2.5Y7/1 灰白, 2.5Y7/2灰黄 新: 2.5Y7/2灰黄	φ 3mm以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 平行タタキ後方キ メ 内面: 回転ナデ, 同心円当て目肌	T K 43
	215	32	溝2	須恵器	甗	口径: (18.0) 器高: (31.9) 器高: △15.6	口縁1/12 頸部1/2 体部上半 1/6	外: N7/灰白, N6/灰 新・内: N7/灰白	φ 3mm程度の砂粒を含む	外面: 回転ナデ, 平行タタキ後方キ メ 内面: 回転ナデ, 同心円当て目肌	T K 43
	216	—	溝2	須恵器	甗	口径: 20.6 器高: △30.4	口縁・ 体部1/2	外: N7/灰白, 2.5Y8/1灰白, 2.5Y8/3灰黄 新: 2.5Y8/1灰白, 5Y8/1灰白 内: 2.5Y8/1灰白, 2.5Y8/3灰黄	密 (φ 2mm程度の石粒を少量含む)	外面: 回転ナデ, タタキ 内面: 回転ナデ, 同心円当て目肌	T K 43

表3 出土遺物観察表 (10)

調査年度	探検番号	図号	出土地	種類	器形	寸法 (cm)	残存	色調	胎土	調整	備考
99-2	217	32	溝2	須恵器	甕	口径:(16.6) 体径:3/8 体高:△4.75 器高:△4.2	口縁・ 体径3/8 体高1/3 底部定形	外:10YR6/1灰黒 新・内:10YR7/1 灰白	φ2.5mm以下の砂粒を含む	外面:ヨコナデ、 平白多半年後方キ メ 内面:ヨコナデ、 同心円当て白煎	T K 43
	218	32	溝2	青磁	高内径:6.05 器高:△4.1	底部定形	無	無	無	外面:青磁 内面:ヨコナデ、 花文スタンブ、 垂梅	
	219	—	溝2	石製品	砥石	長:6.8 幅:3.7 厚:3.3	定形	2.5YR8/2灰白 2.5Y3/2黒黒	砂岩	—	4面に 使用跡 重量:87g
99-5	220	33	S K 1	土師器	杯	口径:(17.1) 器高:△5.6	口縁1/4 体径3/16 底部3/16	外・新・内: 5YR6/6橙	φ0.5mm以下のチャート、長 石を含む	外面:ヨコナデ、 内面:ヨコナデ、 放射状筋文	飛鳥目
	221	33	S K 1	土師器	皿	口径:(19.0) 器高:1.7	1/8	外:10YR8/3黄黒 黄緑、7.5YR7/4に 近い 新:10YR8/3黄黒 黄緑、7.5YR6/4に 近い 内:無	φ2mm以下のチャート、長 石、クサリ礫を含む	外・内面:ヨコナ デ	飛鳥目
	222	33	S K 1	土師器	皿	口径:(18.6) 器高:2.4	口縁・ 体径1/4 底部3/16	外・新:10YR7/6 黄黒、10YR3/1 黒黒 内:10YR7/6黄黒 黄緑、10YR3/1 黒黒、7.5YR7/4 に近い	φ2mm以下のチャート、長 石、クサリ礫を含む	外・内面:磨滅の ため不明	飛鳥目
	223	33	S K 1	土師器	皿	口径:(20.8) 器高:2.2	1/4	外・新・内: 10YR7/4に 近い	φ2mm以下のチャート、長 石、クサリ礫を含む	外・内面:磨滅の ため不明	飛鳥目
	224	33	S K 1	土師器	高杯	口径:(16.9) 器高:△4.9	口縁部1/4 体径2/3	外・新・内:5YR6/6 橙	φ2mm以下のチャート、長 石、雲母を含む	外面:ヨコナデ、 ユビナデ後ヨコナ デ	飛鳥目
	225	33	S K 1	須恵器	杯A	口径:19.8 器高:2.95	口縁部 5/12 体径7/16 底部1/2	外:2.5Y6/1黄灰、 2.5Y7/1灰白 新・内:2.5Y7/1灰白	φ1mm程度の砂粒を含む	外面:回転ナデ、 回転ヘラズリ 内面:ヨコナデ、 ナデ	飛鳥目
	226	33	S P 24	須恵器	甕	口径:(29.2) 器高:△9.5	口縁部 1/10 新・内 1/8	外・内:10YR6/1 灰黒 新:10YR7/1灰白	φ3mm程度の砂粒を含む	外面:ヨコナデ、 平白タタキ 内面:ヨコナデ、 ナデ	
	227	33	S P 27	石製品	不明	長:12.5 幅:5.6 厚さ:3.9	4/5	—	砂岩	—	重量:407 g
01-1	228	—	S E 3 溝方	須恵器	杯蓋	口径:(14.5) 器高:3.45	口縁部1/4 体径1/3 大径部1/2	外・新・内:N6/灰	φ1.5mm程度の砂粒を若干含 む	外面:回転ナデ、 回転ヘラズリ 内面:回転ナデ	T K 209
	229	33	S E 3 溝方	土師器	甕	口径:(11.0) 器高:△10.95	1/3	外:10YR8/3黄黒 黄緑、2.5Y6/1 黄灰、 10YR6/3黄黒 内:10YR8/2灰 白	φ2mm程度の砂粒を微量に 含む	外面:ヨコナデ、 ナデ 内面:ナデ、ケズ リ	
	230	—	S E 3 下層	土師器	皿	口径:(7.5) 器高:1.1	1/3	外・内:2.5Y7/2 灰黒 7.5Y7/2灰白 N4/灰 新:7.5YR6/3に 近い 内:無	φ1mm以下のチャート、長 石、石英を含む	外・内面:ヨコナ デ、ナデ	
	231	—	S E 3 下層	土師器	皿	口径:(7.6) 器高:1.3	1/3	外・新・内:2.5Y7/2 灰黒	φ0.5mm以下のチャート、長 石、雲母を含む	外・内面:ヨコナ デ、ナデ	
	232	—	S E 3 下層	土師器	皿	口径:(7.7) 器高:1.2	1/3	外・新・内: 10YR7/3に 近い	φ0.5mm以下のチャート、長 石、雲母を含む	外面:ヨコナデ、 ユビオサエ 内面:ナデ	
	233	—	S E 3 下層	土師器	皿	口径:(7.8) 器高:1.4	2/3	外・新・内:2.5Y7/2 灰黒	φ0.5mm以下のチャート、長 石、雲母を含む	外・内面:ヨコナ デ、ナデ	
	234	—	S E 3 下層	土師器	皿	口径:(7.9) 器高:1.3	1/2	外:2.5Y7/2 灰黒 新:10YR6/2 黄黒 5YR7/4に 近い	φ0.5mm以下のチャート、長 石、雲母を含む	外面:ヨコナデ、 ユビオサエ 内面:ナデ	
	235	37	S E 3	土師器	皿	口径:(8.3) 器高:△1.45	1/3	外・新・内:2.5Y7/2 灰黒	φ0.5mm以下のチャート、長 石、雲母を含む	外面:ヨコナデ、 ナデ 内面:ナデ	内面:雲 母
	236	33	S E 3 下層	土師器	皿	口径:8.4 器高:1.4	定形	外:10YR7/3に 近い 黄黒 新・内:10YR8/2 灰	φ4mm大の砂粒を微量に含 む	外面:ヨコナデ、 ユビオサエ 内面:ナデ	
	237	—	S E 3 下層	土師器	皿	口径:(8.5) 器高:1.3	1/4	外・新・内: 10YR7/3に 近い	φ0.5mm以下のチャート、長 石、雲母を含む	外・内面:ヨコナ デ、ナデ	
	238	—	S E 3 下層	土師器	皿	口径:(8.6) 器高:1.65	1/4	外・新・内:5Y7/1 灰白	φ0.5mm以下のチャート、長 石、雲母を含む	外面:ヨコナデ、 ユビオサエ 内面:ナデ	
	239	33	S E 3 下層	土師器	皿	口径:(9.3) 器高:1.2	1/3	口縁・ 体径3/8 底部3/5	外・新・内:2.5Y7/2 灰黒	φ1mm以下のチャート、長 石、雲母、クサリ礫を含む	外面:ヨコナデ、 ユビオサエ 内面:ナデ
240	—	S E 3 上層	瓦器	皿	口径:(8.7) 器高:1.55	1/2	外・内:5Y4/1 灰黒 5Y5/1灰	φ0.5mm以下の砂粒を含む	外面:ヨコナデ、 ユビオサエ 内面:ナデ		

表3 出土遺物観察表(11)

調査 次数	探検 番号	発掘 番号	出土地	器種	形状	流量 (cm)	残存	色調	胎土	調整	備考
01-1	241	33	SE 3 下層	瓦器	皿	口径: 2.35 器高: 1.64	ほぼ完形	外: 10YR5/1褐灰, 2.5Y6/1黄灰 新: 10YR7/1灰白 内: N6/灰	φ 1mm程度の砂粒を含む	外面: ヨコナデ, ユビオサエ 内面: ナデ, ミガキ	口縁大きく 歪む
	242	33	SE 3 下層	瓦器	椀	口径: (13.4) 器高: 3.55	1/4	外: 2.5Y6/1黄灰, N4/灰 新: 2.5Y7/1灰白 内: 2.5Y8/1灰白, N4/灰	φ 0.5mm程度の砂粒を若干含 む	外面: ヨコナデ, ユビオサエ 内面: ヨコナデ, ナデ後焼文	和泉 IV-1
	243	—	SE 3 下層	瓦器	椀	口径: (13.4) 器高: 3.55	口縁〜 体部1/4 底部1/8	外・内: N8/灰白, 2.5Y6/2灰黄 新: 2.5Y6/1黄灰	φ 0.5mm以下の砂粒を含む	外面: ヨコナデ, ユビオサエ 内面: ヨコナデ, ナデ後焼文	和泉 IV-1
	244	—	SE 3 下層	瓦器	椀	口径: (13.45) 器高: 3.8	1/5	外・内: N3/暗灰 新: 5Y8/1灰白	φ 0.5mm程度の砂粒を若干含 む	外面: ヨコナデ, ユビオサエ 内面: ヨコナデ, ナデ後焼文	和泉 IV-1
	245	—	SE 3 下層	瓦器	椀	口径: (13.35) 器高: △2.5	1/4	外: 2.5Y3/1黒褐 新: 2.5Y6/1黄灰, 2.5Y7/1灰白 内: 2.5Y8/1灰白	φ 1mm以下の砂粒を含む	外面: ヨコナデ, ユビオサエ 内面: ヨコナデ, ナデ後焼文	和泉 IV-1
	246	37	SE 3 下層	瓦器	椀	口径: (14.05) 器高: 4.7	ほぼ完形	外・新: N2/黒, 2.5Y8/1灰白 内: 2.5Y8/1灰白	φ 1mm程度の砂粒を若干含 む	外面: ヨコナデ, ユビオサエ 内面: ヨコナデ, ナデ後焼文	和泉 IV-1
	247	33	SE 3 下層	瓦器	椀	口径: (14.75) 器高: 4.4	口縁部 3/16 体部1/4 底部1/5	外・内: 2.5Y8/1灰 白, N4/灰 新: 2.5Y5/1黄灰	φ 0.5mm以下の砂粒を含む	外面: ヨコナデ, ユビオサエ 内面: ヨコナデ, ナデ後焼文	和泉 IV-1
	248	37	SE 3 下層	瓦器	椀	口径: 13.35 器高: 4.0	完形	外・新・内: N3/暗 灰, N8/灰白	φ 0.5mm程度の砂粒を若干含 む	外面: ヨコナデ, ユビオサエ 内面: ヨコナデ, ナデ後焼文	和泉 IV-1
	249	33	SE 3 下層	青磁	碗	口径: (14.3) 器高: △3.1	口縁部〜 体部1/15	胎: 5Y6/3オリーブ 黄 新: 5Y7/1灰白	精良	外・内面: 胎輪	
	250	33	SE 3 下層	陶器	碗	高台径: 7.0 器高: △2.55	底部1/3	外: 7.5YR5/2灰褐 新: 7.5YR5/2灰褐 内: 7.5YR7/2明褐灰	φ 1mm以下の砂粒を含む	外面: 凹坑ヘラケ スリ 内面: 凹坑ナデ	
	251	33	SE 3 下層	瓦器	甕	口径: (26.5) 器高: △4.3	口縁部1/5	外・内: N4/灰 新: 2.5Y7/1灰白	φ 1mm以下の砂粒を含む	外面: ヨコナデ, 平行タキ 内面: ヨコナデ	
	252	33	SE 3 下層	土師器	甕	口径: (24.45) 器高: △6.05	口縁部 胎輪 頸部1/8	外: 10YR6/3に赤い 黄橙 新・内: 7.5YR6/4に 赤い赤	φ 0.5mm以下のチャート、長 石、石英を含む	外面: ヨコナデ, 内面: ヨコナデ	
	253	33	SE 3 下層	石製品	箭	口径: (27.3) 器高: △8.2	1/5	外: 2.5Y4/1黄灰 新: N4/灰, 2.5Y8/1 灰白 内: N5/灰	滑石	—	Ⅲ類a
	254	37	SE 3	木製品	男鹿杖 木製品	長さ: △10.7 直径: 1.9	基部欠損	—	—	—	芯持材
	255	37	S X 2	白磁	舎子蓋	口径: 6.25 器高: 1.85	ほぼ完形	胎: 5Y7/2灰白 新・内: 2.5Y7/2灰黄	やや良	外・内面: 胎輪	II-2
	256	37	S X 2	白磁	舎子身	口径: (5.29) 器高: 2.25	ほぼ完形	胎: 5Y7/2灰白 新・内: 2.5Y7/2灰黄	やや良	外・内面: 胎輪	II-2
	257	34	S X 2	鉄製品	釘	長さ: △4.1 幅: 4.05 厚さ: 0.7	—	—	—	—	—
	258	34	S X 2	鉄製品	鎌	長さ: (8.9) 幅: (2.25) 厚さ: 0.45	—	—	—	—	—
	259	34	S X 2	鉄器	瓦礫 通貫	直径: 2.6 厚さ: 0.1	完形	—	—	—	初跡年: 1017年
	260	34	S X 2	鉄器	瓦礫 通貫	直径: 2.5 厚さ: 0.1	完形	—	—	—	初跡年: 1017年
	261	34	S X 2	鉄器	瓦礫 通貫	直径: 2.6 厚さ: 0.1	完形	—	—	—	初跡年: 1078年
	262	34	S X 2	鉄器	瓦礫 通貫	直径: 2.3 厚さ: 0.1	完形	—	—	—	初跡年: 1078年
	263	34	S X 2	鉄器	瓦礫 通貫の 少	直径: 2.3 厚さ: 0.1	一部欠損	—	—	—	—
	264	—	S X 2	鉄器	政柄 通貫	直径: 2.4 厚さ: 0.1	一部欠損	—	—	—	初跡年: 1111年
	265	34	S D 1	土師器	皿	口径: 9.3 器高: 2.0	ほぼ完形	外・新・内: 2.5Y8/1 灰白	φ 3mm程度の砂粒を中量含 む	外面: ヨコナデ, ユビオサエ 内面: ナデ	
	266	34	S D 10	土師器	皿	口径: (9.0) 器高: 1.5	1/2	外・新・内: 10YR8/3灰黄橙	φ 0.5mm以下のチャート、長 石、雲母を含む	外面: ヨコナデ, ユビオサエ 内面: ナデ	
	267	34	S D 10	土師器	皿	口径: 9.6 器高: 1.45	ほぼ完形	外: 10YR8/3灰黄橙 新・内: 10YR8/4灰 黄橙	φ 1mm以下の砂粒を微量に 含む	外面: ヨコナデ, ユビオサエ 内面: ナデ	
	268	34	S D 10	土師器	皿	口径: 13.3 器高: 2.45	ほぼ完形	外: 10YR8/2灰白 新: 10YR8/3灰黄 橙, 10YR6/1褐灰 内: 10YR6/1褐灰	φ 1mm以下の砂粒を微量に 含む	外面: ヨコナデ, ユビオサエ 内面: ナデ	

表3 出土遺物観察表(12)

調査年度	探検番号	図面番号	出土地	器種	形状	流量 (cm)	残存	色調	胎土	調整	備考	
01-1	269	35	P 173	土師器	皿	口径: 8.4 器高: 1.35	3/4	外・新: 2.5Y8/3淡黄 内: 10YR8/2灰白	φ 1mm以下の砂粒を微量に含む	外面: ヨコナデ, エビオサエ 内面: ナデ		
	270	-	P 173	土師器	皿	口径: (9.2) 器高: 1.8	1/2	外・新・内: 10YR7/3にぶい黄褐色	φ 1mm以下のチャート、長石を含む	外・内面: ヨコナデ, ナデ		
	271	35	P 173	土師器	皿	口径: 9.2 器高: 1.9	3/4	外・新・内: 10YR8/3淡黄褐色	φ 1mm以下の砂粒を微量に含む	外面: ヨコナデ, エビオサエ 内面: ナデ		
	272	35	P 173	土師器	皿	口径: 9.4 器高: 1.6	ほぼ定形	外・新・内: 10YR8/3淡黄褐色	φ 1mm以下の砂粒を微量に含む	外面: ヨコナデ, エビオサエ 内面: ナデ		
	273	35	P 173	土師器	皿	口径: 9.4 器高: 1.55	定形	外・内: 10YR8/4 淡黄褐色	φ 5mm以下の砂粒を微量に含む	外面: ヨコナデ, エビオサエ 内面: ナデ		
	274	35	P 173	土師器	皿	口径: 9.4 器高: 1.85	ほぼ定形	外・内: 2.5Y8/2灰白	φ 1mm以下の砂粒を微量に含む	外面: ヨコナデ, エビオサエ 内面: ナデ		
	275	35	P 173	土師器	皿	口径: 9.4 器高: 2.0	定形	外・内: 10YR8/3 淡黄褐色	φ 1mm以下の砂粒を微量に含む	外面: ヨコナデ, エビオサエ 内面: ナデ		
	276	35	P 173	土師器	皿	口径: 9.4 器高: 1.95	ほぼ定形	外: 10YR8/2灰白 内: 10YR8/3淡黄褐色	φ 1mm以下の砂粒を微量に含む	外面: ヨコナデ, エビオサエ 内面: ナデ		
	277	35	P 173	土師器	皿	口径: 9.5 器高: 1.9	ほぼ定形	外: 10YR8/2灰白 内: 10YR8/3淡黄褐色	φ 1mm以下の砂粒を微量に含む	外面: ヨコナデ, エビオサエ 内面: ナデ		
	278	35	P 173	土師器	皿	口径: 9.8 器高: 1.75	ほぼ定形	外・内: 10YR8/3 淡黄褐色	φ 1mm以下の砂粒を微量に含む	外面: ヨコナデ, エビオサエ 内面: ナデ		
	279	-	P 173	土師器	皿	口径: (10.4) 器高: 1.3	1/4	外・新・内: 10YR8/2灰白	φ 0.5mm以下のチャート、長石、雲母を含む	外・内面: ヨコナデ, ナデ		
	280	-	P 173	土師器	皿	口径: (12.3) 器高: 1.75	1/4	外・新・内: 10YR8/3淡黄褐色	φ 1mm以下のチャート、長石を含む	外・内面: ヨコナデ, ナデ		
	281	34	P 12	土師器	皿	口径: (7.8) 器高: 1.45	1/8	外・新・内: 10YR7/3にぶい黄褐色	φ 0.5mm以下のチャート、長石、雲母、クサリ砂を含む	外・内面: ヨコナデ, ナデ		
	282	34	P 12	土師器	皿	口径: 8.2 器高: 2.6	3/4	外: 10YR8/3淡黄褐色 新・内: 10YR8/4 淡黄褐色	φ 1mm以下の砂粒を微量に含む	外面: ヨコナデ, エビオサエ 内面: ナデ		
	283	34	P 12	瓦器	輪	口径: (14.55) 器高: 4.43	1/4	外・内: 5Y7/1灰白 新: 5Y7/1灰白	φ 1mm程度の砂粒を含む	外面: ヨコナデ, エビオサエ 内面: 漆黒のため不明	相泉田	
	284	34	P 12	瓦器	輪	口径: (15.2) 器高: 4.42	口縁部1/8 体部1/3	外・内: 5Y7/1灰白 新: 5Y5/1灰 新: 5Y7/1灰白	φ 1mm以下の砂粒を含む	外面: ヨコナデ, エビオサエ 内面: ヨコナデ, ナデ後焼文	相泉田	
	285	34	P 12	瓦器	輪	口径: (15.0) 器高: 3.7	口縁部1/4 体部1/6	外: 2.5Y7/1灰白 新: 2.5Y4/1黄褐色 内: 2.5Y4/1灰白	φ 0.5mm程度の砂粒を若干含む	外面: ヨコナデ, エビオサエ 内面: ヨコナデ, ナデ後焼文	相泉田	
	286	34	P 12	石製品	形状不明 石製品	長さ: 3.5 幅: 3.95 厚さ: 2.9	定形	-	-	-	重量: 48g	
	287	35	P 1	土師器	皿	口径: 7.8 器高: 1.5	3/4	外: 10YR8/2灰白 新: 10YR7/3にぶい黄褐色 内: 2.5Y8/2灰白	φ 1mm以下の砂粒を微量に含む	外面: ヨコナデ, エビオサエ 内面: ナデ		
	288	35	P 1	土師器	皿	口径: 8.0 器高: 1.43	3/4	外: 10YR8/3淡黄褐色 新・内: 10YR7/3 にぶい黄褐色	φ 1mm以下の砂粒を微量に含む	外面: ヨコナデ, エビオサエ 内面: ナデ		
	289	35	P 1	土師器	皿	口径: 8.2 器高: 1.45	ほぼ定形	外: 10YR8/3淡黄褐色 新・内: 10YR8/2 灰白	φ 2mm程度の砂粒を微量に含む	外面: ヨコナデ, エビオサエ 内面: ナデ		
	290	35	P 1	土師器	皿	口径: 8.4 器高: 1.45	ほぼ定形	外: 10YR8/3淡黄褐色 新・内: 10YR7/3 にぶい黄褐色	φ 1mm以下の砂粒を微量に含む	外面: ヨコナデ, エビオサエ 内面: ナデ		
	291	-	P 1	瓦器	輪	口径: (13.0) 器高: 4.41	1/4	外・内: 5Y7/1灰白 新: 5Y5/1灰 新: 5Y7/1灰白	φ 0.5mm以下の砂粒を含む	外面: ヨコナデ, エビオサエ 内面: 漆黒のため不明	相泉田	
	292	34	P 8	土師器	皿	口径: (8.25) 器高: 1.45	口径縁- 体部1/4 底部1/6	外・内: 2.5Y5/2暗灰 新: 10YR7/3にぶい黄褐色	φ 0.5mm以下のチャート、長石、雲母を含む	外面: ヨコナデ, エビオサエ 内面: ナデ		
	293	34	P 8	瓦器	輪	口径: (13.65) 器高: 3.6	口縁部1/6 体部1/4 底部1/2	外・新・内: 2.5Y8/1 灰白	やや粗	外面: ヨコナデ, エビオサエ 内面: ヨコナデ, ナデ後焼文	相泉田	
	294	-	P 91	土師器	皿	口径: (8.7) 器高: 1.6	1/4	外・新・内: 2.5Y7/3 淡黄褐色	φ 0.5mm以下のチャート、長石、雲母、クサリ砂を含む	外・内面: ヨコナデ, ナデ		
295	38	P 91	瓦器	輪	口径: (15.0) 器高: 4.6	1/2	外・内: 2.5Y6/1黄褐色 新: 2.5Y8/1灰白	φ 2mm程度の砂粒を微量に含む	外面: ヨコナデ, エビオサエ 内面: ヨコナデ, ナデ後焼文	相泉田		
296	-	P 146	須恵器	杯蓋	口径: (15.5) 器高: 4.8	口縁部1/8 体・天井 部1/4	外・内: N4/灰 新: 5Y6/1灰	φ 1mm程度の砂粒を含む	外面: 同転ナデ, 同転クサリ 内面: 同転ナデ	T K 10		

表3 出土遺物観察表 (13)

調査 次数	探跡 番号	発掘 層号	出土地	器種	形状	流量 (cm)	残存	色 調	胎 土	調 整	備 考
	297	-	P 146	須恵器	杯蓋	口径: (15.0) 器高: 4.6	口縁部1/8 体+耳部1/6	外・新・内: N5/灰	φ 2mm程度の砂粒を若干含む	外面: 同転子デ、 内面: 同転子デ	T K 10
	298	-	P 88	土師器	皿	口径: (8.6) 器高: 1.25	1/4	外・新・内: 10YR7/3に赤い黄緑	φ 0.5mm以下のチャート、長石、雲母、クサリ礫を含む	外・内面: ヨコナデ	
	299	-	P 88	土師器	皿	口径: (9.2) 器高: 1.65	1/6	外・新・内: 10YR7/3に赤い黄緑	φ 1mm以下のチャート、長石、雲母、クサリ礫を含む	外・内面: ヨコナデ	
	300	-	P 88	土師器	皿	口径: (9.4) 器高: 1.45	1/3	外・新・内: 10YR7/3に赤い黄緑	φ 0.5mm以下のチャート、長石、雲母を含む	外・内面: ヨコナデ	
	301	-	P 88	土師器	皿	口径: (10.1) 器高: 1.55	1/4	外・新・内: 10YR7/3に赤い黄緑	φ 1.5mm以下のチャート、長石、雲母、石英、クサリ礫を含む	外面: ヨコナデ、 ナデ	
	302	-	P 88	瓦器	皿	口径: (10.0) 器高: △1.9	3/16	外・内: 2.5Y6/1黄灰 新: 2.5Y7/1灰白	φ 0.5mm程度の砂粒を含む	外面: ヨコナデ、 ナデ	
	303	-	P 88	瓦器	椀	口径: (13.15) 器高: △2.7	口縁部へ 体部1/6	外・内: 5Y5/1灰 新: 2.5Y7/2黄灰	産	外面: ヨコナデ、 ナデ	和泉宮-1
	304	-	P 88	瓦器	椀	口径: (14.8) 器高: △3.1	1/8	外: 2.5Y7/2黄灰、 N3暗灰 新: 5Y7/2灰白 内: N4/灰	φ 1mm程度の砂粒を含む	外面: ヨコナデ、 ナデ	和泉宮-1
	305	35	P 88	白磁	碗	口径: (15.8) 器高: △2.6	口縁部 1/12	輪: 10YR8/2赤い 黄緑 新: 10YR8/2灰白	産	内外面: 無釉	IV類
	306	35	P 5	瓦器	皿	口径: 8.6 器高: 1.65	ほぼ定形	外・内: 5Y5/1灰 新: 2.5Y8/2灰白	φ 4mm程度の砂粒を含む	外面: ヨコナデ、 ユビオサエ	
	307	35	P 9	瓦器	皿	口径: 8.6 器高: 1.64	ほぼ定形	外: 2.5Y5/1黄灰、 2.5Y7/1灰白 新: 5Y8/1灰白、 2.5Y8/3淡黄 内: N6/灰、N4/灰	φ 2mm程度の石粒を微量に 含む	外面: ヨコナデ、 ユビオサエ	
	308	35	P 26	土師器	皿	口径: 8.4 器高: 1.05	ほぼ定形	外: 5Y8/1灰白 新: 5Y7/1灰白 内: 2.5Y8/1灰白	φ 2mm程度の砂粒を微量に 含む	外・内面: ヨコナ デ	口縁部大きく 歪む
	309	35	P 70	土師器	皿	口径: 8.8 器高: 1.7	定形	外: 10YR8/4淡黄緑 内: 10YR8/3淡黄緑	φ 1mm程度の砂粒を微量に 含む	外面: ヨコナデ、 内面: ヨコナデ	
	310	35	P 23	土師器	皿	口径: 9.6 器高: 2.0	ほぼ定形	外・新・内: 10YR8/2灰白	φ 1mm以下の砂粒を微量に 含む	外面: ヨコナデ、 内面: ナデ	
	311	35	P 69	土師器	皿	口径: 12.0 器高: 1.4	3/4	外: 2.5Y8/2灰白、 10YR8/2灰白 新: 5Y4/1灰 内: 2.5Y5/1黄灰	φ 4mm以下の砂粒を微量に 含む	外面: ヨコナデ、 ユビオサエ	
	312	35	P 7	土師器	皿	口径: (8.45) 器高: 1.4	1/2	外・新・内: 10YR7/3に赤い黄緑	φ 0.5mm以下のチャート、長石、雲母を含む	外・内面: ヨコナ デ	
	313	37	P 7	須恵器	鉢	口径: 28.2 器高: 10.5	1/2	外: 10YR7/1灰白、 10YR8/1黄灰 新・内: 10YR8/1灰 白	やや歪(φ 1.2cmの石英、長石を少量含む)	外・内面: ヨコナ デ、同転子デ	東播磨系
	314	36	包含層	土師器	鉢	口径: (10.2) 器高: △6.85	口縁部へ 体部1/6	外: 7.5Y8/6に赤い 黄緑 新・内: 10YR5/2灰 黄緑	φ 1mm程度の砂粒を微量に 含む	外・内面: ヨコナ デ	
	315	37	包含層	須恵器	杯蓋	口径: 10.1 器高: 3.3	定形	外・新・内: 2.5Y7/1 灰白	φ 1mm程度の砂粒を微量に 含む	外面: 同転子デ、 内面: 同転子デ	T K 43
	316	36	包含層	須恵器	杯蓋	口径: (14.2) 器高: 3.75	1/2	外: N6/灰 新: 10Y7/1灰白 内: 5Y6/1灰	φ 2.5mm以下の砂粒を含む	外面: 同転子デ、 同転子デ	T K 43
	317	37	包含層	須恵器	杯身	口径: 12.9 器高: 3.9	3/4	外・内: 2.5Y8/1灰白 新: 2.5Y5/1黄灰	φ 4mm程度の砂粒を少量含む	外面: 同転子デ、 内面: 同転子デ	T K 43 外周底部に へうごき跡
	318	36	包含層	須恵器	蓋	口径: (15.6) 器高: 3.2	2/3	外: 2.5Y6/1黄灰 新: 10YR8/1灰白 内: 2.5Y7/1灰白	φ 1mm以下の砂粒を微量に 含む	外面: 同転子デ、 同転子デ	
	319	37	包含層	須恵器	高杯	口径: (15.15) 器高: 9.6	杯部2/3 脚部 定形 器部2/3	外・内: 2.5Y8/2灰白、 10YR8/2灰白 新: 10YR7/2に赤い 黄緑	φ 1mm以下のチャート、長石、石英を含む	外面: 同転子デ、 同転子デ	平城宮1
	320	38	包含層	土師器	皿	口径: 18.0 器高: 2.4	2/3	外: 2.5Y8/3淡黄 新: 10YR5/1黄灰 内: 2.5Y4/1黄灰	φ 5mm程度の砂粒をやや多 く含む	外・内面: ヨコナ デ	平城宮1
	321	38	包含層	土師器	皿	口径: 22.4 器高: 3.55	2/3	外: 7.5Y8/6淡黄緑 新・内: 10YR8/6 黄緑	φ 4mm程度の砂粒を中量含む	外・内面: ヨコナ デ	平城宮1
	322	36	包含層	土師器	皿	口径: 8.0 器高: 1.15	4/5	外・新・内: 2.5Y7/3 淡黄	精良	外面: ヨコナデ、 ユビオサエ	
	323	-	包含層	土師器	皿	口径: (8.0) 器高: 1.3	1/2	外・内: 10YR8/3 淡黄 新: 7.5YR7/3に赤い 黄緑	φ 0.5mm以下のチャート、長石、雲母、クサリ礫を含む	外面: ヨコナデ、 ユビオサエ	

表3 出土遺物観察表(14)

調査年度	探検番号	図号番号	出土地	種類	器形	寸法(cm)	残存	色調	胎土	調整	備考	
01-1	324	36	包含層	土師器	皿	口径: 8.05 器高: 1.35	ほぼ完形	外・新・内: 10YR7/3にぶい・黄褐色	φ0.5mm以下のチャート、長石、雲母、石英を含む	外面: ヨコナデ、 エビオサエ 内面: ナデ		
	325	36	包含層	土師器	皿	口径: 8.5 器高: 1.45	ほぼ完形	外・新・内: 10YR7/3にぶい・黄褐色	φ0.5mm以下のチャート、長石、雲母、石英を含む	外・内面: ヨコナデ 内面: ナデ		
	326	-	包含層	土師器	皿	口径: (7.7) 器高: 1.4	1/5	外・新・内: 10YR7/3にぶい・黄褐色	φ1.5mm以下のチャート、長石、雲母、クサリ礫を含む	外・内面: ヨコナデ 内面: ナデ		
	327	-	包含層	土師器	皿	口径: (7.65) 器高: 1.45	1/3	外・新・内: 10YR7/3にぶい・黄褐色	φ2.5mm以下のチャート、長石、雲母を含む	外面: ヨコナデ、 エビオサエ 内面: ナデ		
	328	-	包含層	土師器	皿	口径: (8.45) 器高: 1.5	1/3	外・新・内: 10YR7/3にぶい・黄褐色	φ1.5mm以下のチャート、長石、石英、雲母、クサリ礫を含む	外・内面: ヨコナデ 内面: ナデ		
	329	36	包含層	土師器	皿	口径: 8.7 器高: 1.4	ほぼ完形	外・内: 10YR8/3 浅黄褐色 新: 10YR7/3にぶい・黄褐色	φ1mm以下の砂粒を微量に含む	外面: ヨコナデ、 エビオサエ 内面: ナデ		
	330	36	包含層	土師器	皿	口径: 8.8 器高: 1.55	ほぼ完形	外・新・内: 10YR8/2灰白	φ1mm以下の砂粒を含む	外・内面: ヨコナデ 内面: ナデ		
	331	-	包含層	土師器	皿	口径: (8.9) 器高: 1.15	1/3	外・新・内: 10YR7/3にぶい・黄褐色	やや粗	外・内面: ヨコナデ 内面: ナデ		
	332	-	包含層	土師器	皿	口径: (8.8) 器高: 1.4	1/4	外・新・内: 10YR8/4浅黄褐色	φ1mm以下のチャート、長石、クサリ礫を含む	外・内面: ヨコナデ 内面: ナデ		
	333	-	包含層	土師器	皿	口径: (8.8) 器高: 1.4	1/4	外・新・内: 10YR7/3にぶい・黄褐色	φ0.5mm以下のチャート、長石、雲母、クサリ礫を含む	外・内面: ヨコナデ エビオサエ 内面: ナデ		
	334	36	包含層	瓦器	皿	口径: 7.75 器高: 1.65	1/3	外・内: 2.5Y6/1黄灰 新: 10YR7/1灰白	φ0.5mm以下の砂粒を含む	外面: ヨコナデ、 エビオサエ 内面: ナデ		
	335	-	包含層	瓦器	椀	口径: (13.2) 器高: 3.8	1/6	外: 5Y4/1灰 新: 5Y6/1灰 内: 5Y5/1灰	φ1mm以下の砂粒を含む	外面: ヨコナデ、 エビオサエ 内面: 磨滅のため不明	相泉Ⅲ	
	336	36	包含層	瓦器	椀	口径: (13.3) 器高: 3.8	1/4	外・内: 2.5Y6/1黄灰 新: 2.5Y8/1灰白 内: 2.5Y8/1灰白	φ0.5mm以下の砂粒を含む	外面: ヨコナデ、 エビオサエ 内面: ヨコナデ、 ナデ後期文	相泉Ⅲ	
	337	36	包含層	瓦器	椀	口径: (13.65) 器高: 3.7	1/3	外・新・内: 10YR8/1灰白	φ0.5mm以下の砂粒を含む	外面: ヨコナデ、 エビオサエ 内面: 磨滅のため不明	相泉Ⅲ	
	338	38	包含層	瓦器	椀	口径: 14.6 器高: 4.15	完形	外: 2.5Y6/1黄灰 新: 5Y8/1灰白 内: 5Y5/1灰	φ1mm以下の砂粒を微量に含む	外面: ヨコナデ、 エビオサエ 内面: ヨコナデ、 ナデ後期文	相泉Ⅲ	
	339	36	包含層	瓦器	椀	口径: (15.95) 器高: △3.9	1/4	外・内: 2.5Y5/1黄灰 新: 2.5Y8/2灰白	φ0.5mm以下の砂粒を含む	外面: ヨコナデ、 エビオサエ 内面: ヨコナデ、 ナデ後期文	相泉Ⅲ	
	340	36	包含層	青磁	碗	口径: (14.1) 器高: △3.2	口径- 体部1/8	軸: 7.5Y5/2青オリーブ 新: 2.5Y7/1灰白	精良	内面: 劃花文	Ⅲ-1B	
	341	36	包含層	青磁	碗	器高: △4.0	体部片	軸: 10Y6/1灰 新: X7/6灰白	精良	外面: 蓮華文		
	342	36	包含層	青磁	浅形碗	高台径: (6.25) 器高: △1.65	高台部 1/4	軸: 2.5G/6/1オリーブ 7灰 新: 2.5Y8/1灰白	φ0.5mm以下の砂粒を若干含む	内面: 花文?		
	04-1	343	39	包含層	縄文土器	浅鉢	器高: △4.05	口縁部片	外: 10YR5/2灰黄褐色 10YR7/3にぶい・黄褐色 新: 10YR5/2灰黄褐色 内: 2.5Y5/2黄灰	φ3mm程度のチャート、長石、石英、雲母、クサリ礫を含む	外面: 沈線、単節 縄文R1 内面: 灰ナデ	中期後半
		344	39	包含層	縄文土器	浅鉢	器高: △3.7	体部片	外: 10YR4/2灰黄褐色 新: 10YR5/2灰黄褐色	φ2mm以下のチャート、長石、石英、クサリ礫を含む	外面: 沈線、単節 縄文R1 内面: ナデ	中期後半
		345	39	包含層	縄文土器	深鉢	器高: △4.35	口縁部片	外: 10YR7/3にぶい・黄褐色 内: 2.5Y6/1黄灰、 2.5Y5/1黄褐色	φ1mm以下のチャート、長石、石英、クサリ礫を含む	外・内面: 磨滅のため不明	中期後半
		346	39	包含層	縄文土器	深鉢	器高: △4.9	口縁部片	外・内: 10YR7/2 にぶい・黄褐色 新: 2.5Y5/1黄灰	φ1.5mm以下のチャート、長石、石英、クサリ礫を含む	外面: 条痕 内面: ヨコナデ、 ナデ	中期後半
		347	39	包含層	縄文土器	深鉢	器高: △3.1	口縁部片	外: 10YR7/4にぶい・黄褐色 新: 2.5Y5/1黄灰 内: 2.5Y8/3浅黄褐色	φ2mm以下のチャート、長石、石英、クサリ礫を含む	外面: ヨコナデ、 単節縄文R1 内面: ナデ	中期後半
		348	39	包含層	縄文土器	深鉢	器高: △5.85	口縁部片	外・内: 7.5Y6/4 新: 10YR7/3にぶい・黄褐色	φ2mm以下のチャート、長石、石英、クサリ礫を含む	外面: 研突文、 ナデ後期文 内面: ナデ	中期後半
		349	39	包含層	縄文土器	深鉢	器高: △4.6	口縁部片	外・内: 7.5Y6/4 にぶい・黄褐色 新: 10YR7/3にぶい・黄褐色	φ2.5mm以下のチャート、長石、石英、クサリ礫を含む	外面: ヨコナデ、 研目目、ナデ、 沈線3条 内面: ナデ	中期後半
		350	39	包含層	縄文土器	深鉢	器高: △5.3	体部片	外: 10YR4/2灰黄褐色 新: 10YR5/2灰黄褐色 内: 10YR4/2灰黄褐色 内: 10YR5/2灰黄褐色	φ2mm以下のチャート、長石、石英、クサリ礫を含む	外面: 沈線、条 痕、研突文R1 内面: ナデ	中期後半

表3 出土物観察表 (15)

調査 次数	探跡 番号	発見 番号	出土地	器種	器形	法量 (cm)	残存	色 調	胎 土	調 整	備 考
04-1	351	39	包含層	縄文 土器	深鉢	器高: △7.1	体部片	外: 7.5YR6/4Cに 近い 内: 2.5Y6/2R黄 7.5YR7/4Cに 近い黄褐色	φ 3mm以下のチャート、長 石、石英、クサリ礫を含む	外面: ヨコナデ、 単面回線文R.L. 沈線3条 内面: ナデ	中期後半
	352	39	包含層	縄文 土器	深鉢	器高: △6.1	体部片	外: 10YR6/4Cに 近い 内: 10YR6/3 に近い黄褐色	φ 4mm以下のチャート、長 石、石英、クサリ礫を含む	外面: 単面回線文 R.L.、沈線4条 内面: ヨコナデ	中期後半
	353	39	包含層	縄文 土器	深鉢	器高: △6.2	体部片	外: 7.5YR5/3Cに 近い 内: 10YR7/3 に近い黄褐色	φ 2mm以下のチャート、長 石、石英、雲母を含む	外面: 単面回線文 R.L.、沈線3条 内面: ナデ	中期後半
	354	39	包含層	縄文 土器	深鉢	器高: △5.0	体部片	外: 5YR5/4Cに 近い赤 内: 7.5YR6/4 に近い黄褐色	φ 2mm以下のチャート、長 石、石英、雲母、クサリ礫 を含む	外面: 単面回線文 R.L.、沈線3条 内面: 磨滅のため 不明	中期後半
	355	39	包含層	縄文 土器	深鉢	器高: △6.2	体部片	外: 10YR6/4Cに 近い 内: 10YR6/3 に近い黄褐色	φ 1mm以下のチャート、長 石、石英を含む	外面: 単面回線文 R.L.、沈線3条 内面: ヨコナデ	中期後半
	356	39	包含層	縄文 土器	深鉢	器高: △5.95	体部片	外: 10YR6/3Cに 近い 内: 2.5Y3/1黒 内: 10YR6/4Cに 近い黄褐色	φ 1.5mm以下のチャート、長 石、石英、雲母、クサリ礫 を含む	外面: 単面回線文 R.L.、沈線3条 内面: ナデ	中期後半
	357	39	包含層	縄文 土器	深鉢	器高: △3.3	体部片	外: 7.5YR6/4Cに 近い 内: 10YR5/2 に近い黄褐色	φ 2mm以下のチャート、長 石、石英、雲母、クサリ礫 を含む	外面: 刺突文、沈 線2条 内面: ナデ	中期後半
	358	39	包含層	縄文 土器	深鉢	器高: △3.7	体部片	外: 2.5Y7/3R 内: 2.5Y6/1黒 内: 10YR7/4Cに 近い黄褐色	φ 3mm以下のチャート、長 石、石英、クサリ礫を含む	外面: ナデ、沈 線 内面: 磨滅のため 不明	中期後半
	359	39	包含層	縄文 土器	深鉢	口径: 6.1 器高: △2.5	底部完形	外: 10YR6/4Cに 近い 内: 2.5Y5/1黄 内: 10YR7/3Cに 近い黄褐色	φ 2mm以下のチャート、長 石、石英、クサリ礫を含む	外・内面: 磨滅の ため不明	中期後半
	360	39	包含層	縄文 土器	深鉢	口径: 6.9 器高: △4.5	底部 2/3	外: 10YR5/2R黄 内: 2.5Y5/1黄 内: 2.5Y7/2R黄	φ 2mm以下のチャート、長 石、石英、クサリ礫を含む	外・内面: ヘラミ ガキ、ナデ	中期後半
	361	38	包含層	須恵器	杯身	口径: 10.2 器高: 4.7	口縁部 1/3欠損	外: 7.5Y7/1白 内: N7/灰白 内: 2.5Y7/1明オ ー黄	密	外面: 回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、 ナデ	MT 15
	362	-	包含層	須恵器	杯身	口径: (12.9) 器高: △3.95	1/2	外・内: N6/灰 内: 2.5YR4/2R赤 10YR2/1黒	密	外面: 回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、 ナデ	T K 43
	363	-	包含層	須恵器	杯身	口径: (12.7) 器高: △3.8	1/2	外・内: N7/灰白	密	外面: 回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、 ナデ	T K 43
	364	-	包含層	須恵器	杯身	口径: (15.6) 器高: △4.95	1/3	外・内: 2.5Y7/1白 内: 2.5Y8/1灰白	密	外面: 回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、 ナデ	T K 43
	365	40	包含層	須恵器	器台	口径: (44.4) 器高: △7.5	口縁部 1/16	外: 2.5Y5/1黄 内: 5Y4/1灰 内: 10YR7/1灰白 内: 10YR6/1黄褐色	φ 1mm以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ、 波文 内面: 回転ナデ、 ナデ	内面: 自然輪
	366	40	包含層	土師器	甕	口径: (13.6) 器高: △6.7	口縁一 部欠1/4	外: 10YR6/3Cに 近い 内: 7.5YR6/4 に近い黄褐色 内: 10YR6/3 に近い黄褐色	φ 1.5mm以下のチャート、長 石、クサリ礫を含む	外面: ヨコナデ、 クワ(6~7cm) (cm) 後ヨコナデ 内面: ヨコナデ、 ヘラケズリ	
	367	40	包含層	土師器	甕	口径: (44.4) 器高: △7.5	口縁一 部欠1/17	外: 7.5YR5/3Cに 近い 内: 2.5Y6/2R黄 内: 7.5YR6/4Cに 近い黄褐色	φ 1mm以下のチャート、長 石、石英、クサリ礫を含む	外・内面: ヨコナ デ、ナデ	
	368	-	包含層	土師器	皿	口径: (8.3) 器高: 1.4	1/4	外: N5/灰、2.5Y6/2 R赤 内: 2.5Y8/1灰白 内: N6/灰	密	外・内面: ヨコナ デ	
	369	-	包含層	瓦葺	筒	口径: 11.65 高台径: 4.5 器高: 3.3	口縁部1/2 体部5/8 高台完形	外: N5/灰、2.5Y6/2 R赤 内: 2.5Y8/1灰白 内: N6/灰	密	外面: ヨコナデ、 ナデ、ユビオサエ 内面: ヨコナデ、 暗文	和泉IV-2
	370	40	包含層	須恵器	鉢	口径: (29.65) 器高: △9.95	口縁部3/16 体部3/16	外: 2.5Y6/1黄 内: 2.5Y3/1黒 内: 2.5Y6/1黄	φ 3mm以下の砂粒を含む	外面: ヨコナデ、 ナデ 内面: ナデ	東播系
	371	-	S P 3	須恵器	杯蓋	口径: (12.3) 器高: 3.55	口縁部1/8 体部1/4	外: 2.5Y6/1黄 内: 7.5YR5/2R黄 内: N6/灰	φ 2.5mm以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、 ナデ	MT 15
	372	-	S P 3	須恵器	杯蓋	口径: (14.05) 器高: △3.7	1/4	外: 5Y6/1灰 内: 2.5Y7/1灰白 内: N6/灰	φ 1mm以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、 ナデ	T K 43
	373	-	S P 3	須恵器	杯蓋	口径: (14.25) 器高: 3.29	1/4	外・内: N5/灰	φ 3mm以下の砂粒を含む	外面: 回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、 ナデ	T K 43

表3 出土遺物観察表(16)

調査 年度	探検 番号	図版 番号	出土地	器種	器形	法量 (cm)	残存	色調	胎土	調整	備考
	374	—	S P 3	須恵器	杯身	口径:(11.8) 器高:△3.55	1/8	外・新・内:5Y6/1 灰	φ1mm以下の砂粒を含む	外面:回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	T K 10
	375	—	S P 3	須恵器	杯身	口径:(13.8) 器高:△4.5	1/8	外・新・内:2.5Y7/1 灰白, 2.5Y7/2灰黄	φ1mm以下の砂粒を含む	外面:回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	T K 10
	376	—	S P 3	瓦器	椀	口径:(11.2) 器高:△2.95	3/8	外・内:5Y5/1灰、 5Y6/1灰 新:5Y8/1底白	φ0.5mm以下の砂粒を含む	外面:ヨコナデ 内面:ナデ、筋文	和泉IV-2
	377	—	S P 3	瓦器	椀	口径:(11.2) 器高:△2.8	1/3	外・内:N6/灰、 N4/灰 新:5Y6/1灰	φ0.5mm以下の砂粒を若干含 む	外面:ヨコナデ、 ナデ、ユビオサエ 内面:ナデ、筋文	和泉IV-2
	378	—	S P 4	土師器	甕	器高:△10.4	体部片	外:10YR6/3に赤い 黄緑 新:10YR5/2灰黄緑 内:10YR6/3に赤い 黄緑	φ1mm以下のチャート、長 石、石英、クサリ礫を含む	外面:ハケ 内面:ナデ、ヘラ ケズリ	
	379	38	S P 4	須恵器	杯身	口径:13.25 器高:4.3	1/4	外・内:2.5Y8/1・ 7/1灰白 新:2.5Y8/2灰白	φ1mm以下の砂粒を含む	外面:回転ナデ、 回転ヘラ切り後ナ デ 内面:回転ナデ、 ナデ	T K 43
07-1	380	40	S D 1	瓦	軒丸瓦	長さ:△3.05 幅:△1.4 厚さ:1.4	瓦当3/16	外・内:N4/灰 新:2.5Y7/1灰白	φ0.5mm程度の砂粒を含む	外・内面:ナデ	珠文3個 残存
	381	40	S D 1	須恵器	杯	器高:△4.3 高台径: (12.5)	体部1/8 高台3/16	外・内:N5/灰 新:7.5YR6/2灰黒	φ0.5mm程度の砂粒を若干含 む	外面:回転ナデ、 ナデ 内面:回転ナデ	平城宮M
	382	40	S K 2	須恵器	平盤	直径:(16.2) 器高:△6.0	器部:1/4 斜部:1/3	外:10YR5/2灰黄 緑、2.5Y2/1黒 新・内:10YR7/1 灰白	φ0.5mm程度の砂粒を含む	外面:回転ナデ、 方カメ 内面:ナデ	飛鳥II
	383	38	S K 2	須恵器	甕	口径:(19.25) 器高:△5.6	口縁~ 胴部1/4	外・新・内:2.5Y6/1 黄灰	φ1.5mm程度の砂粒を含む	外面:回転ナデ、 平行タタキ後カメ 内面:ヨコナデ、 同心円当て貞直	
	384	40	S P 61	須恵器	杯身	口径:(13.2) 器高:3.55	1/4	外・新・内:N6/灰	φ0.5mm程度の砂粒を含む	外面:回転ナデ、 内面:回転ナデ、 ナデ	T K 43
	385	40	S P 60	須恵器	杯	口径:(7.25) 器高:6.25 高台径: (12.1)	1/4	外・内:N6/灰 新:10YR6/2灰黒	φ1mm程度の砂粒を含む	外・内面:回転ナ デ	平城宮M
	386	38	2層	須恵器	杯身	口径:13.2 器高:3.8	1/2	外:2.5Y7/1灰白 新・内:2.5Y6/1黄灰	φ4mm以下の砂粒を含む	外面:回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ、 ナデ	T K 43
	387	40	2層	須恵器	甕	口径:(16.15) 器高:△4.4	口縁部 1/8	外・新・内:2.5Y6/1 黄灰	φ1mm程度の砂粒を含む	外面:回転ナデ、 方カメ 内面:回転ナデ	
	388	38	2層	須恵器	罐	胴部径: (4.15) 器高:△8.9	体部完形	外・新・内:N5/灰	φ1.5mm程度の砂粒を含む	外面:回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	T K 209
	389	—	1層	瀬灰	—	直径:2.4 厚さ:0.1	完形	—	—	—	経路不明
	390	38	S K 1	須恵器	杯蓋	口径:13.5 器高:3.5	口縁部1/2 天井部 完形	外・内:10YR7/1 灰白 新:10YR7/1灰白、 N4/灰	φ2mm以下の砂粒を含む	外面:回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ、 ナデ	T K 209
	391	38	S K 1	土師器	羽釜	口径:(19.0) 器高:△13.7 口径:(27.0)	費1/3 体部3/4	外:5YR7/6赤、 10YR7/3に赤い黄緑 新:10YR8/2灰白 内:7.5YR7/4に赤い 黄	密	外面:ナデ後ハ ケ、平行タタキ 内面:ナデ	羽津A

## 写 真 図 版



宿久庄遺跡遠景（南東から）





1. 76-1 調査  
土層断面 (西から)



2. 78-1 調査  
調査区全景 (南から)



3. 83-1 調査  
調査地全景 (東から)



1. A区全景 (東から)



2. B区全景 (北から)

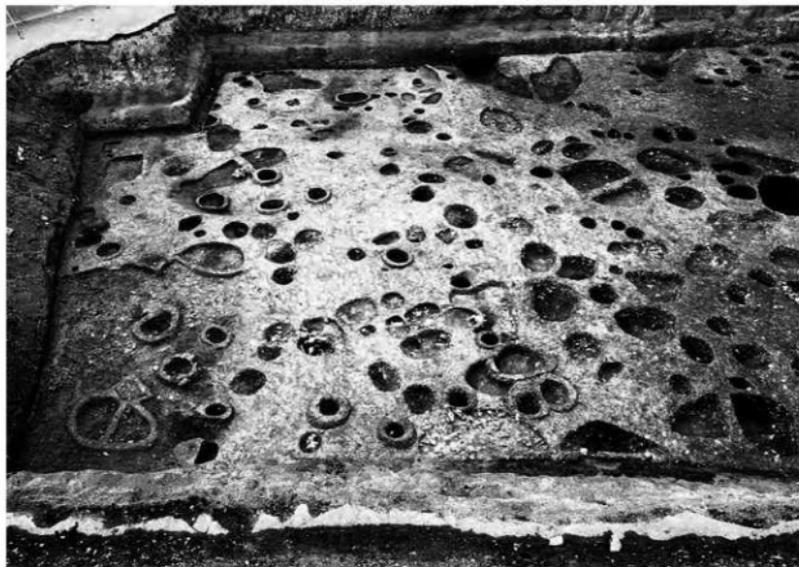
3. C区全景 (北から)



1. 調査区全景（上から・左が北）



1. 調査区北半部 (南から)



2. 調査区南半部 (東から)



1. 調査区南部（東から）



2. 調査区南西部（南から）



3. 調査区北部（北から）



1. 調査区全景（東から）



2. 調査区全景（北西から）



1. B区 (西から)



2. A区 (南から)



3. A区 (西から)



1. 調査区東半部 (北から)



2. 掘立柱建物1 (北から)



1. 掘立柱建物1 (東から)

2. 溝1 遺物出土状況  
(東から)3. 調査区西側石列検出  
状況 (東から)



1. 北調査区中央部（南から）



2. 北調査区南部（西から）



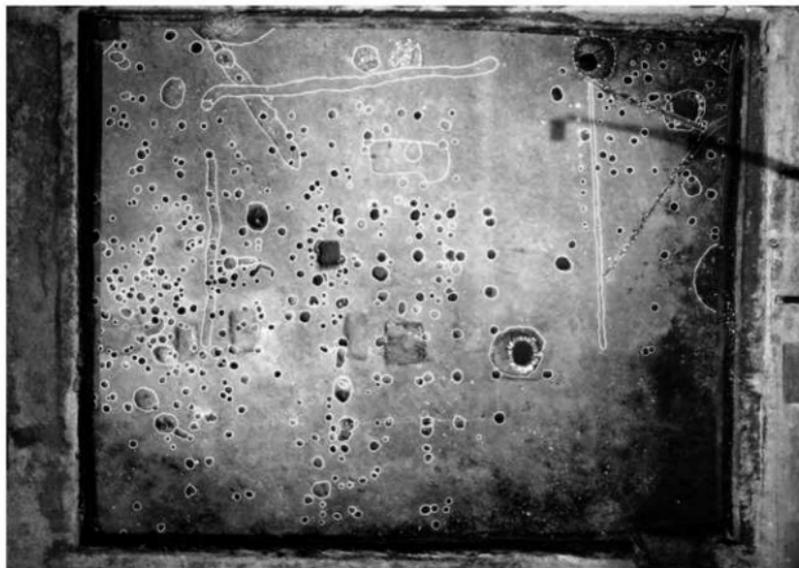
1. 掘立柱建物1 (南から)



2. 南調査区全景 (西から)



3. 南調査区東半 (南から)



1. 北調査区全景（上から・上が北）



2. 南調査区全景（上から・上が北）

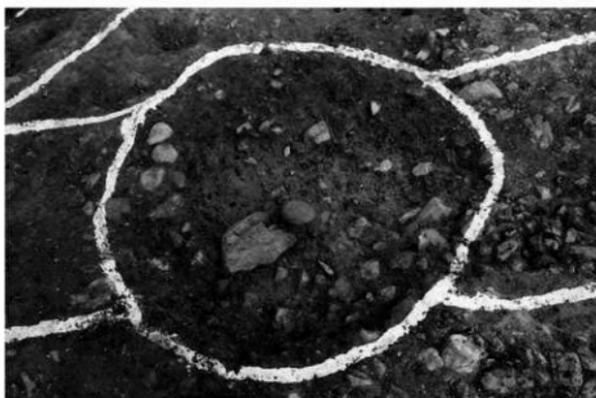


1. 北調査区北部(東から)

2. SX1・P10全景  
(西から)3. SX1検出状況  
(北から)



1. P 10 検出状況  
(北から)



2. S X 2 検出状況  
(西から)

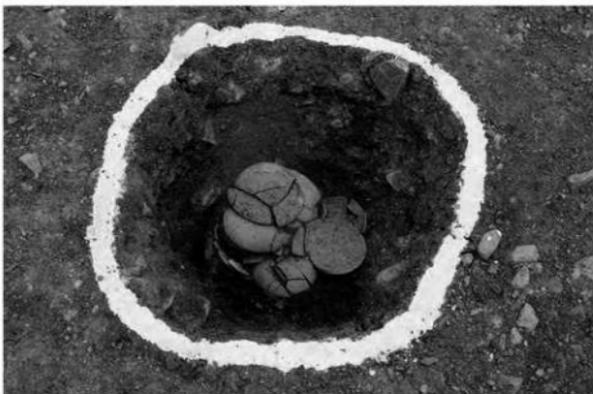


3. 掘立柱建物 (北から)

1. SE 2 完掘状況  
(東から)



2. P 173 遺物出土状況  
(北から)



3. SE 3 完掘出土状況  
(南から)





1. A区第1面西半  
(北から)



2. A区第1面東半  
(北から)



3. B区第1面 (西から)



1. B区第1面SK2  
遺物出土状況(西から)



2. B区第2面東半  
(西から)



3. B区第2西半(西から)



1. B区第2面SE1  
(東から)



2. A区第2面(南から)



3. B区第3面(西から)



1. A区第3面西半  
(南から)



2. A区第3面東半  
(南から)



3. A区第3面S X 1  
遺物出土状況 (南から)



1. 東壁土層断面 (西から)



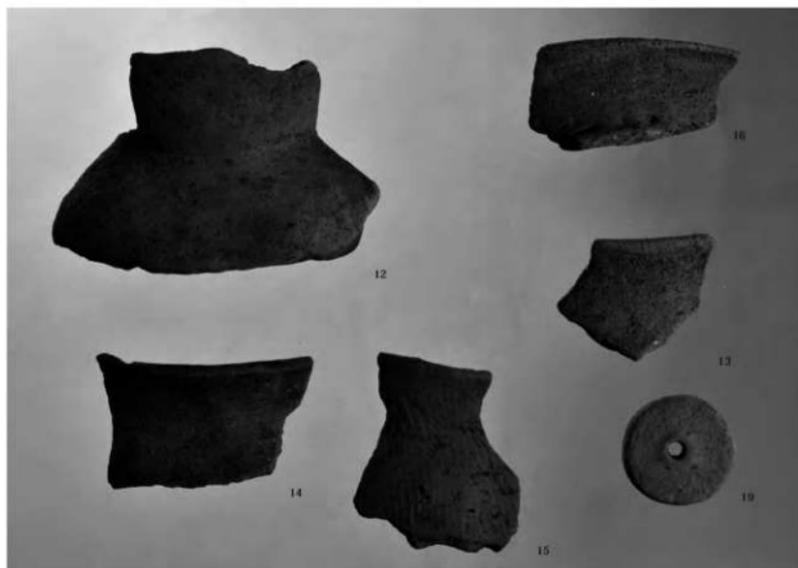
2. 完掘状況 (南西から)



1. 78-1 調査 出土遺物



2. 83-1 調査 包含層出土遺物



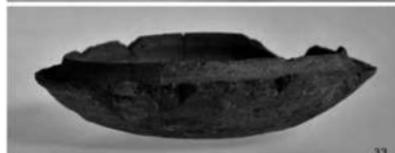
1. 包含層出土遺物



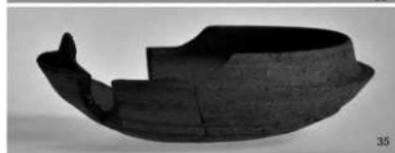
2. 包含層出土遺物



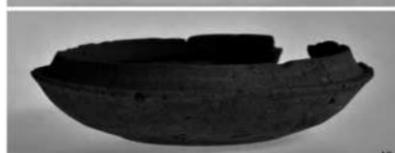
17



33



35



40



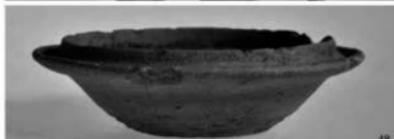
54



58



18



48



55



60

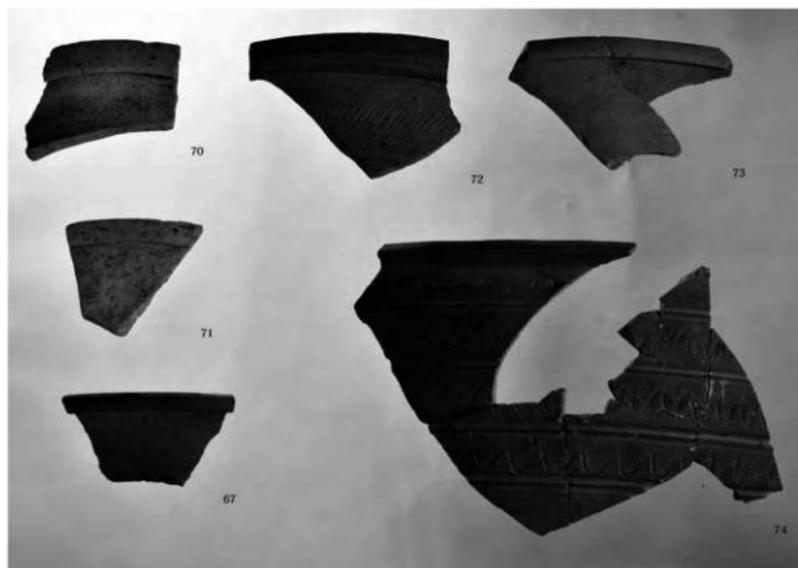
包含層出土遺物



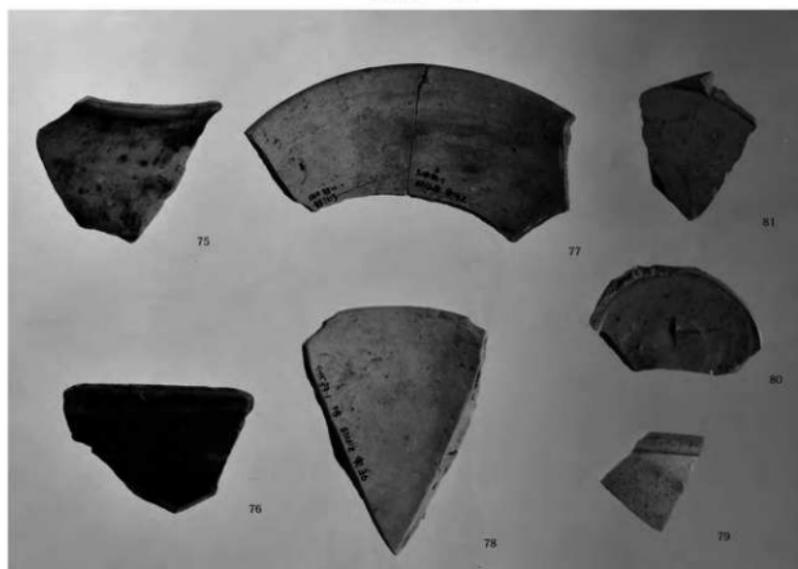
1. 包含層出土遺物



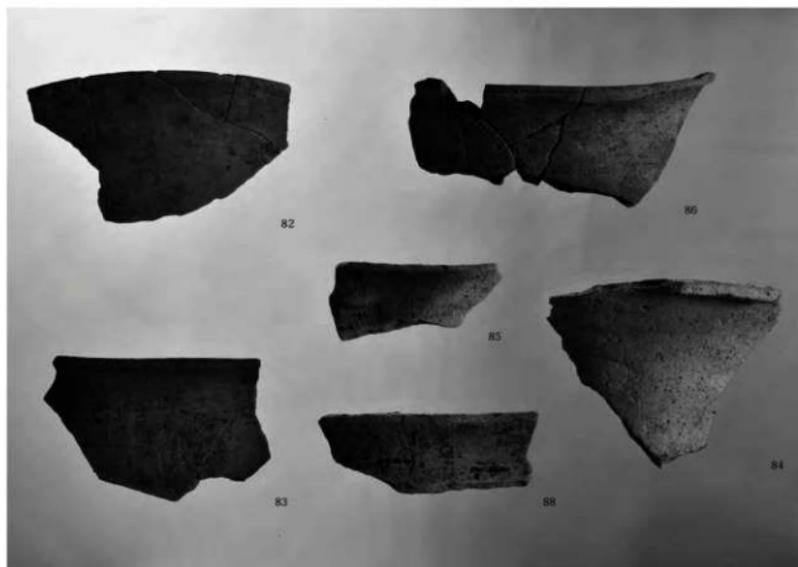
2. 包含層出土遺物



1. 包含層出土遺物



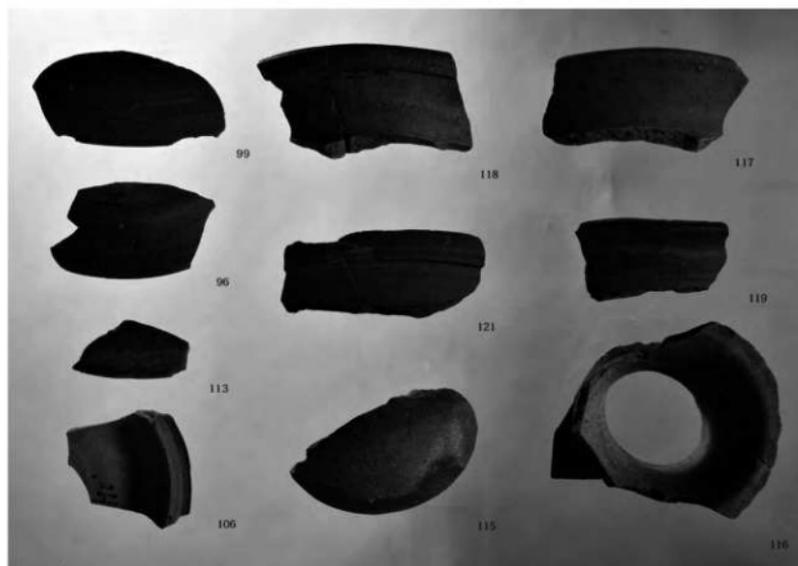
2. 包含層出土遺物



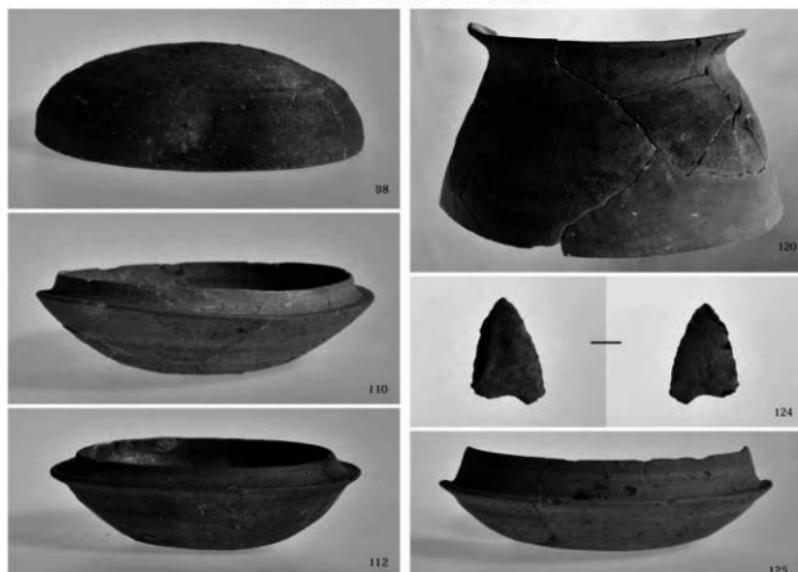
1. 包含層出土遺物



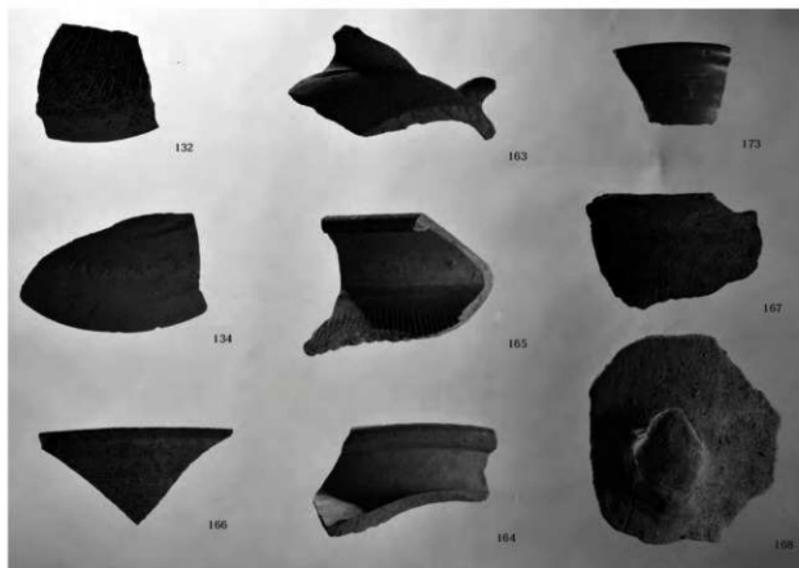
2. 包含層・ビット6出土遺物



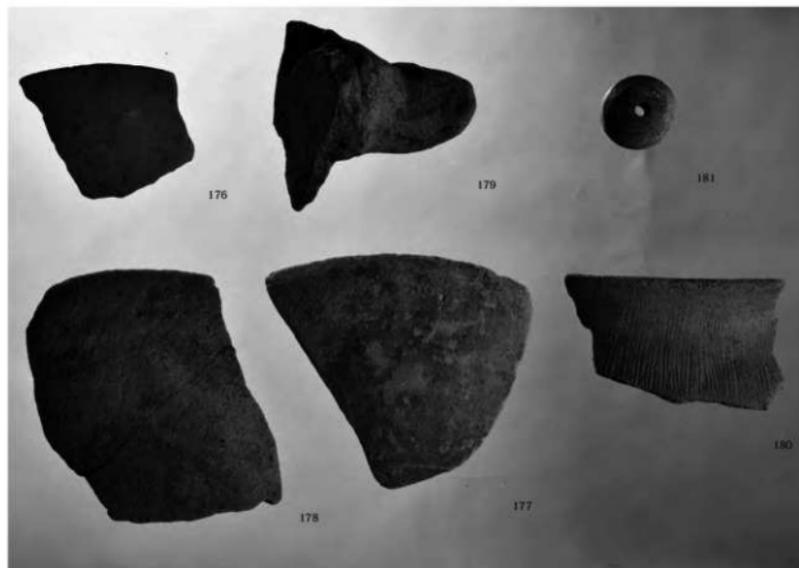
1. 84-4 調査 包含層・ビット出土遺物



84-4 調査 包含層・土坑4、96-1 調査 包含層出土遺物



1. 包含層出土遺物



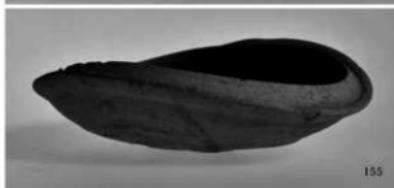
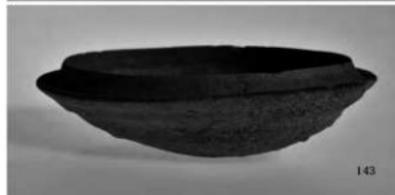
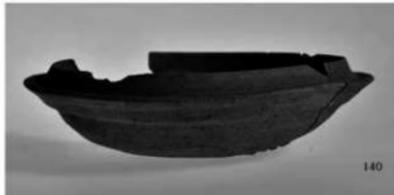
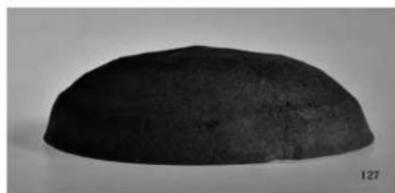
2. 溝1出土遺物

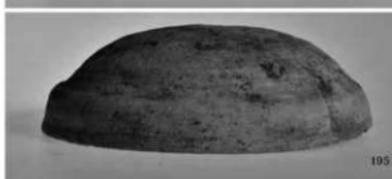
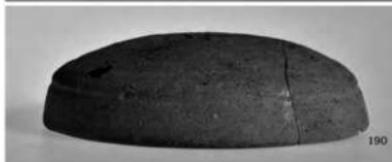
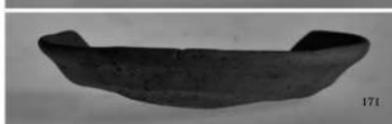
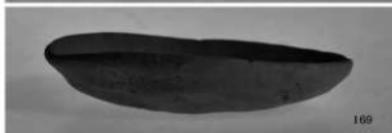
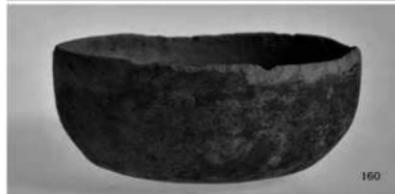
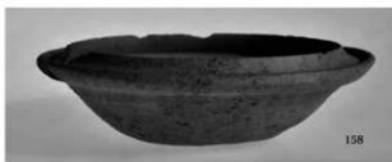
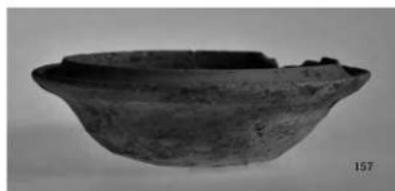


1. 溝2出土遺物

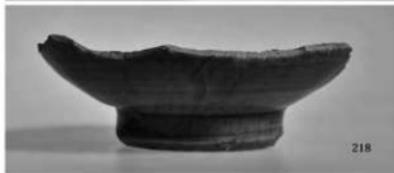
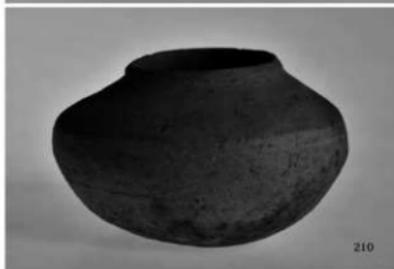
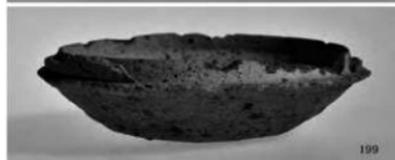


2. 溝2出土遺物

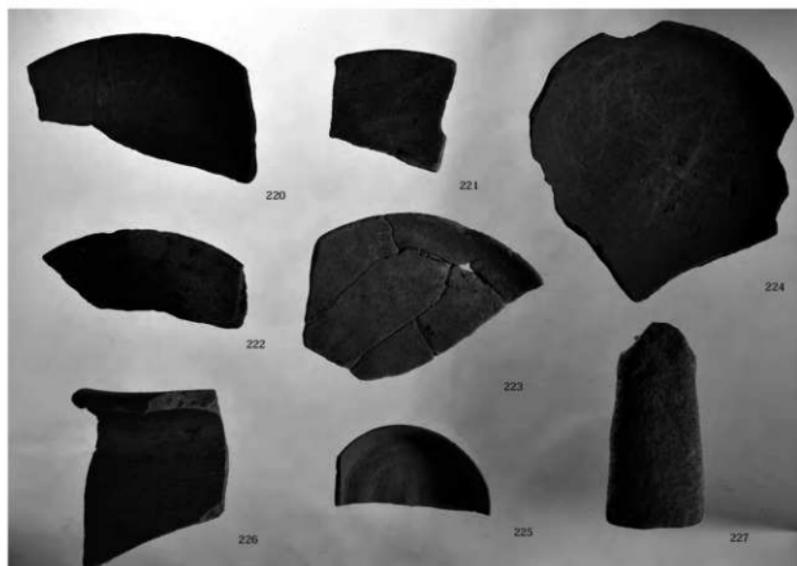




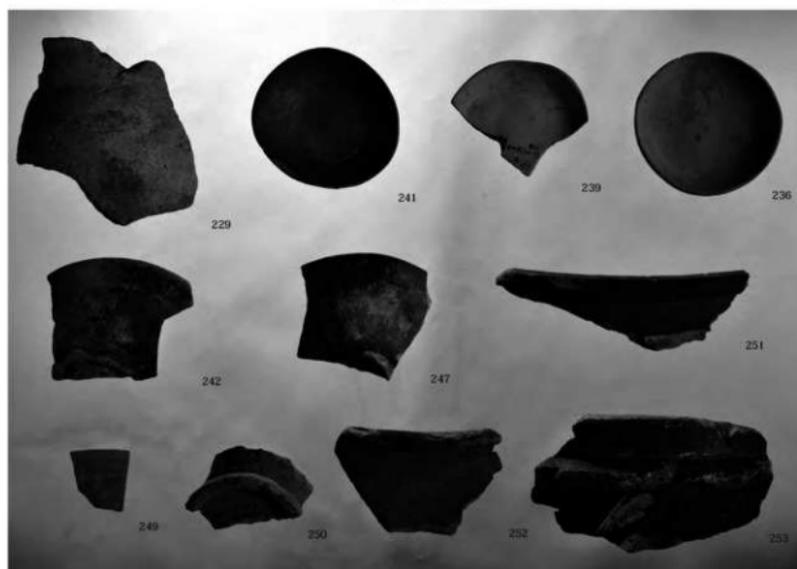
包含層・溝2出土遺物



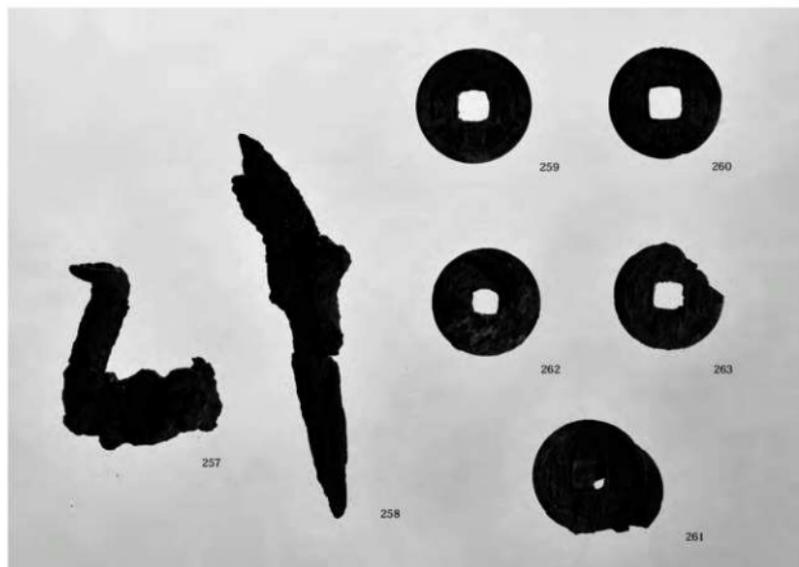
溝 2 出土遺物



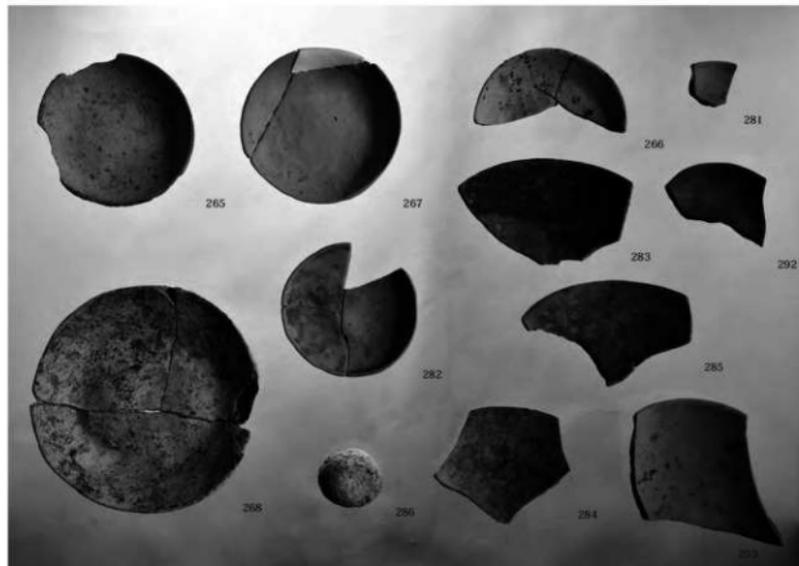
1. 99-5 調査 出土遺物



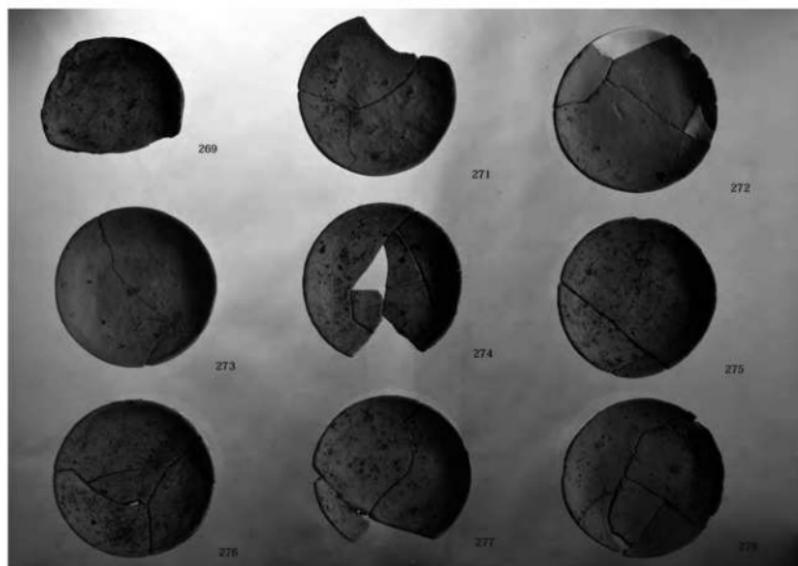
2. 01-1 調査 SE 3 出土遺物



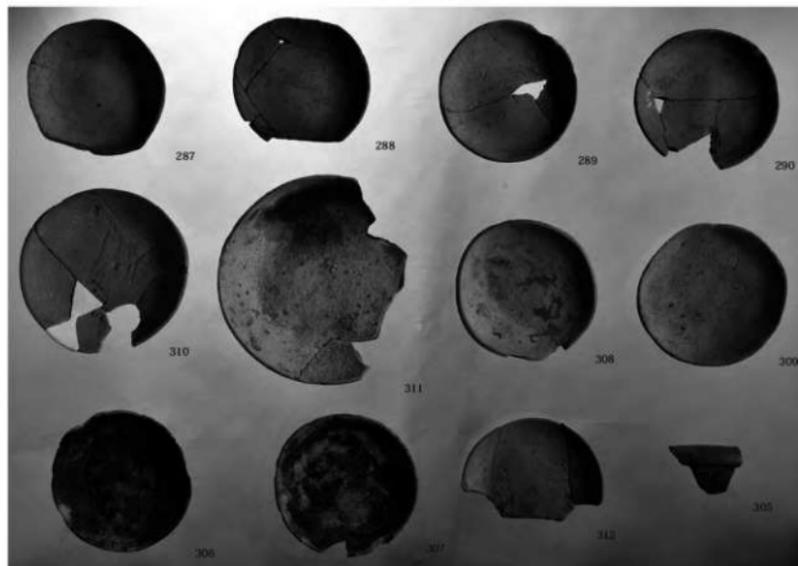
1. SX2 出土遺物



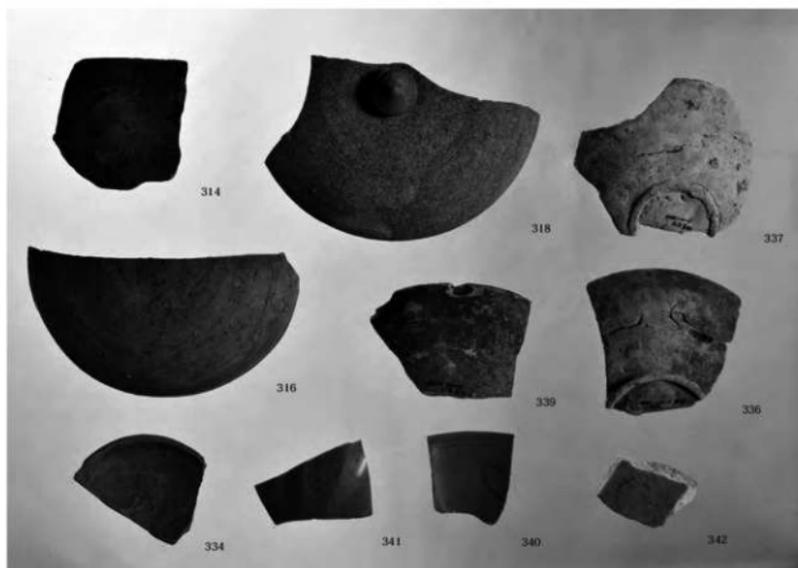
2. 各遺構出土遺物



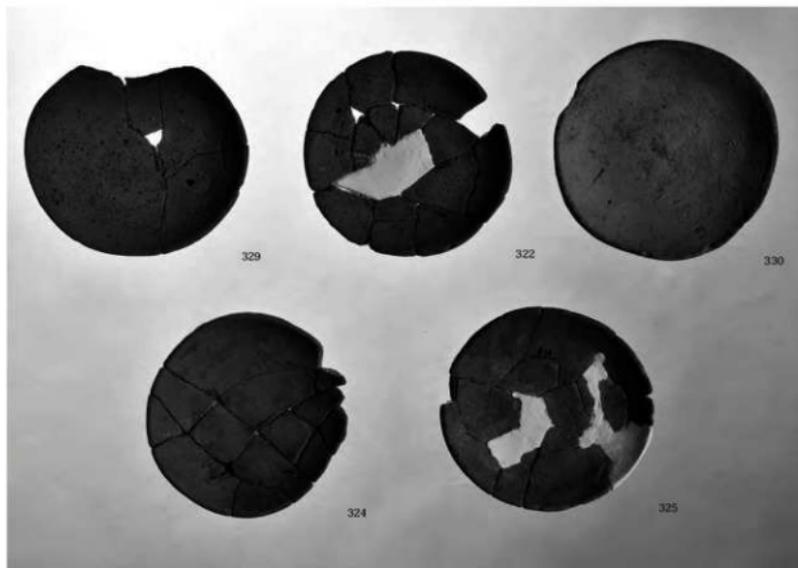
1. P 173 出土遺物



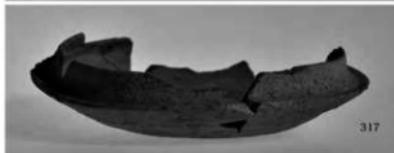
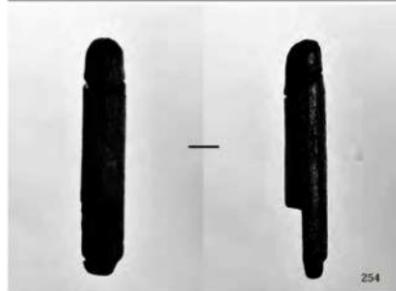
2. ビット出土遺物



1. 包含層出土遺物

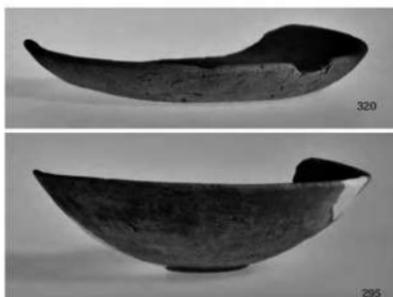


2. 包含層出土遺物



各遺構・包含層出土遺物

01  
|  
1  
04  
+  
1  
07  
+  
1  
調  
遺  
物  
查



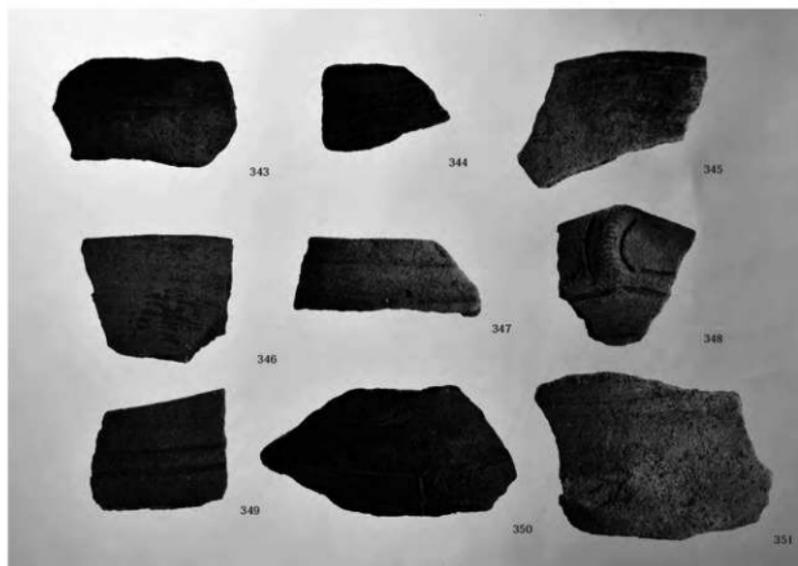
01-1 調査 出土遺物



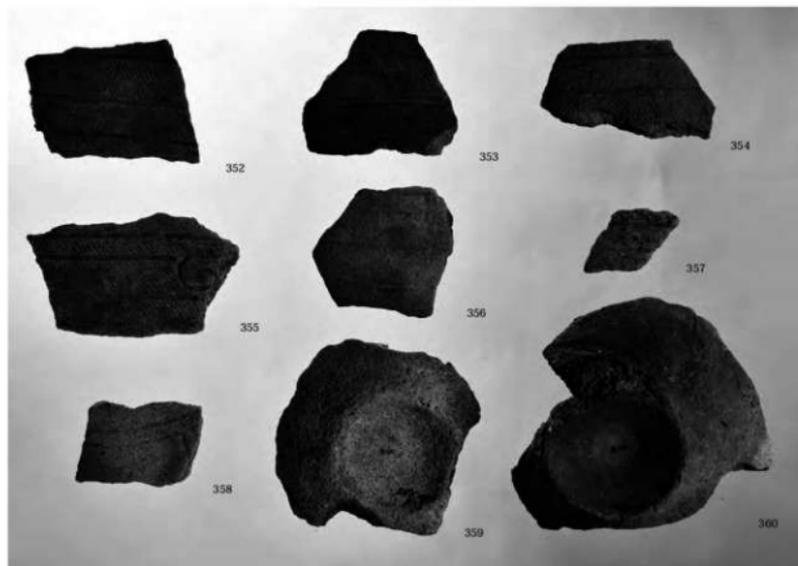
04-1 調査 出土遺物



07-1 調査 出土遺物



1. 包含層出土遺物



2. 包含層出土遺物



1. 04-1 調査 包含層出土遺物



2. 07-1 調査 各遺構・包含層出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	しゅくのしょういせき いち							
書名	宿久庄遺跡1							
副書名								
巻次名								
シリーズ名	茨木市文化財資料集							
シリーズ番号	第81集							
編著者名	坂田典彦 川村和子 木村健明							
編集機関	茨木市教育委員会							
所在地	〒567-8505 大阪府茨木市駅前三丁目8番13号 電話 (072) 622-8121 (代表)							
発行年月日	令和4年(2022年)3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しゅくくわいせき 宿久庄遺跡	大阪府茨木市 藤の里二丁目			34° 50' 18"	135° 32' 11"	1976.	131	府道拡幅
				34° 50' 13"	135° 32' 12"	1978.4.3 ~4.14	50	病院建設
	大阪府茨木市 宿久庄二丁目			34° 50' 22"	135° 32' 10"	1982.6.22 ~7.5	75	配送センター 建設
				34° 50' 15"	135° 32' 22"	1982.8.20 ~8.27	12	食堂建設
	大阪府茨木市 藤の里二丁目			34° 50' 16"	135° 32' 20"	1983.12.1 ~ 1984.1.31	2,204	倉庫建設
				34° 50' 16"	135° 32' 17"	1983.12.25 ~ 1985.2.10	759	倉庫建設
				34° 50' 18"	135° 32' 17"	1988.4.1 ~6.8	350	倉庫建設
				34° 50' 14"	135° 32' 15"	1994.5.23 ~8.11	1,880	倉庫建設
		34° 50' 14"	135° 32' 19"	1997.1	794	倉庫建設		

宿久庄遺跡	大阪府茨木市 豊川一丁目			34° 50' 09"	135° 32' 11"	1999.6.10 ～8.4	972	研究施設建設
				34° 50' 13"	135° 32' 17"	2000.2.21 ～ 2001.3.31	2,146	倉庫建設
				34° 50' 12"	135° 32' 15"	2001.5.15 ～7.20	1,575	倉庫建設
	大阪府茨木市			34° 50' 12"	135° 32' 13"	2004.9.6 11.15～	502	コミュニティセンター建設
	藤の里二丁目			34° 50' 12"	135° 32' 22"	2007.11.8 ～ 2008.1.23	1,029	工場建設
				34° 50' 13"	135° 32' 21"	2013.6.13 ～7.19	132	工場建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
宿久庄遺跡	集落	古墳時代 ・中世	ピット 土坑 溝 掘立柱建物	縄文土器・弥生土器・ 土師器・須恵器・ 瓦器・磁器				
要約	<p>今回報告した調査地点では、古墳時代後期から飛鳥時代・中世の遺構を確認した。古墳時代後期から飛鳥時代の遺構は明瞭ではないが、豊富な遺物が出土している。中世と考えられる掘立柱建物を複数確認しており、平安京から西方へ延びる山陽道に近接した交通の要衝に立地した集落と考えられる。また、遺構は確認されていないが、縄文時代の遺物が出土しており、茨木市域の縄文時代の動態を考える上でも重要な成果である。</p>							

茨木市文化財資料集 第81集

## 宿久庄遺跡 1

発行日 令和4年(2022年)3月31日

編集 茨木市教育委員会

〒567-8505 大阪府茨木市駅前三丁目8番13号

電話 (072) 622-8121 (代表)

発行 茨木市教育委員会

印刷 印刷松本